

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集

めん じょ
毛 受 遺 跡

1999

愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県一宮市は、尾張平野北西部に位置し、織物業を基幹産業として発展した都市であります。木曽川下流域に位置する当地域は、肥沃な土地と豊かな水に恵まれており、古くから多くの人々の生活に潤いを与えてきました。毛受遺跡が位置する一宮市西部には、弥生時代の遺跡として著名な山中遺跡や八王子遺跡、戦国時代の城跡である荊安賀城をはじめとして、縄文時代から中世・戦国時代に至る幅広い時間にわたって、数多くの遺跡が所在しています。

今回調査した毛受遺跡は、東海北陸自動車道建設に伴い、その事前調査として行われました。調査の結果、戦国時代に掘削された居館を巡る堀と考えられる大溝や屋敷地を区画する区画溝、また江戸時代の毛受村の広がりを示すとみられる区画溝や井戸などを検出することができました。本書に掲載しておりますこれらの調査結果が、学術的にも重要なものとして、地域の歴史研究に活用され、ひいては埋蔵文化財保護のための一助になることを願ってやみません。

この発掘調査を行うにあたって、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに、厚く御礼を申し上げます。

最後になりましたが、昭和60年度に発足しました財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、平成11年度より、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターへと衣替えしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成11年8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮 泰啓

例 言

- 1 本書は、愛知県一宮市大和町毛受到に所在する毛受遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、平成7年4月から6月、平成8年4月から10月にかけて実施した。
- 3 調査にあたっては、次の関係諸機関の協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課 愛知県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団 愛知県土木部
- 4 調査担当者は下記のとおりである。
平成7年度 黒田哲生（本センター主査、現愛知県立五条高等学校教諭）、山本寿徳（同調査研究員、現愛知県立岩倉高等学校教諭）、 飴谷 一（同調査研究員）
平成8年度 小泉 渡（本センター主査、現一宮市立浅野小学校教諭）、浅井厚視（同調査研究員、現美和町立美和小学校教諭）、 飴谷 一
- 5 発掘調査には、以下の方々の協力を得た。（敬称略）
野村信生（発掘調査補助員、現青森県教育委員会）・橋本亜希子（発掘調査補助員、現大阪府文化財センター）
- 6 調査、報告書の作成にあたって、以下の方々の御指導を賜った（敬称略）。
愛知県図書館、一宮市博物館、徳川黎明会徳川林政史研究所
岡本直久、金子健一、久保禎子、須田 肇、千田嘉博、土本典生、坪井裕司、中嶋 隆、藤澤良祐、毛受英彦
- 7 本書の執筆は、第Ⅰ章を浅井厚視、第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅴ章・第Ⅵ章を飴谷 一、第Ⅳ章第2節を鬼頭 剛（本センター調査研究員）が、それぞれ分担した。また、第Ⅳ章第1節は三辻利一氏（奈良教育大学）より、第Ⅳ章第3節は森 勇一氏（愛知県立明和高等学校教諭）より、それぞれ玉稿を賜った。全体の編集は飴谷 一が担当した。
- 8 報告書作製に関わる整理作業には、以下の方々の協力を得た。
岩城由枝、大迫慶子、大津洋子、大西多賀子、加藤美和子、神田善子、斎藤智可子、高山正美、野々垣裕美、松田典子（以上、整理補助員）
田口雄一、平野昌子（以上調査研究補助員）
- 9 遺構埋土の土色については、財団法人日本色彩研究所編『新版標準土色帳』（1995年度版）を参考に記述した。
- 10 調査記録の座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠する。
- 11 調査記録及び出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

目次

第I章 調査の概要

第1節 調査の経緯・経過	1
第2節 遺跡の概要	
1 位置と地理的環境	2
2 歴史的環境	3

第II章 遺構

第1節 基本層序	6
第2節 遺構	
1 遺構の概要	8
2 A期の遺構	8
3 B期の遺構	8
4 C期の遺構	11

第III章 遺物

第1節 出土遺物の整理と分析方法	14
第2節 調査区全体のカウント結果（概要）	15
第3節 遺物	
1 A期の遺物	17
2 B期の遺物	18
3 C期の遺物	24
4 その他の遺物	25

第IV章 自然科学分析

第1節 毛受遺跡出土の土師器皿の蛍光X線分析	36
第2節 毛受遺跡の堆積土の珪藻分析	42
第3節 毛受遺跡の昆虫群集—500年前の夏の夜のできごと	44

第V章 考察

第VI章 まとめ

付表 遺構一覧表

遺物一覧表

図版 基本遺構図

写真図版

挿図目次

第1図	調査区位置図	2
第2図	毛受遺跡周辺遺跡分布図	5
第3図	毛受遺跡基本層序位置図	6
第4図	毛受遺跡基本層序図	7
第5図	D区掘立柱建物実測図	9
第6図	B期主要溝層序図	10
第7図	C区SK01・SK18実測図	12
第8図	毛受遺跡出土遺物組成図	16
第9図	時期別破片数グラフ	16
第10図	A期遺物実測図	17
第11図	中世土器口縁部残存率	17
第12図	B区SD11遺物実測図	19
第13図	B区SD12遺物実測図	19
第14図	C区SD17遺物実測図	21
第15図	C区SD18遺物実測図	21
第16図	C区SD18・SD20遺物実測図	22
第17図	D区遺物実測図	23
第18図	貿易陶磁器実測図	23
第19図	C期遺物実測図	24
第20図	加工円盤法量共変図	27
第21図	加工円盤重量分布図	27
第22図	加工円盤重量別転用陶器分布図	29
第23図	その他の遺物実測図(1)	30
第24図	その他の遺物実測図(2)	31
第25図	転用土器割合	32
第26図	擦り痕を有する土器部位名称	32
第27図	擦り痕を有する土器法量図	33
第28図	擦り痕を有する土器重量分布図	33
第29図	加工円盤・擦り痕を有する土器 出土分布図	33
第30図	石製品実測図	34
第31図	金属製品実測図	35
第32図	土師皿分析資料	39
第33図	毛受遺跡出土土師皿の両分布図	40
第34図	大毛池田遺跡出土土師皿の両分布図	40
第35図	岩倉城遺跡出土土師皿の両分布図	40
第36図	清洲城下町遺跡(T)63E出土 土師皿の両分布図	40
第37図	清洲城下町遺跡90C出土 土師皿の両分布図	41
第38図	名古屋城三の丸遺跡出土 土師皿の両分布図	41
第39図	郷上遺跡出土土師皿の両分布図	41
第40図	吉田城遺跡出土土師皿の両分布図	41
第41図	資料採取位置と採取層準	42
第42図	資料採取位置図	45
第43図	資料採取層準	45
第44図	毛受遺跡における昆虫組成	48
第45図	灰釉系陶器出土分布図	49
第46図	毛受遺跡戦国期屋敷地割推定図	51
第47図	B期遺物組成図	52
第48図	B期遺物数量分布図	52
第49図	B期遺構出土陶器器種別数量分布図	53
第50図	C期遺構配置図	56
第51図	C期遺物組成図	56
第52図	毛受村絵図模式図	57

表目次

第1表	発掘調査工程表	1
第2表	毛受遺跡関連年表	4
第3表	毛受遺跡材質別遺物破片数	16

第4表	陶磁器・土器・土製品破片数	16
第5表	時期別陶器破片数	16
第6表	産地別加工円盤転用器種分類表	25
第7表	加工円盤類別表	27
第8表	加工円盤重量別転用陶器分布表	29
第9表	擦り痕の残存状況一覧表	33
第10表	蛍光X線分析データ一覧表	38
第11表	珪藻分析結果	43
第12表	毛受遺跡から産出した昆虫化石	46
第13表	天目茶碗・皿類・播鉢破片数	50
第14表	B期遺構出土遺物時期別数量分布表	51

図版目次

図版1～図版8 遺構図

写真図版

図版9	遺跡遠景
図版10	Aa区・Ab区全景
図版11	Ac区全景・B区全景・B区SD11・B区SD12
図版12	C区全景・C区南部全景・C区SK18・C区SD20 遺物出土状況
図版13	C区SD17・C区SD18・C区SD17遺物出土状況・ C区SD18遺物出土状況
図版14	D区北部全景・D区SD06・D区SB01
図版15	48・46・41・49・34・35・72・73・74・75・76・ 84・85・86・87・83・78
図版16	91・92・93・94・95・96・97・98・99・100・111・ 112・113・114・115・116・117・118・119・120・ 131・132・133・134・135・136・137・138・149・ 150・151・152・153・154・155・156・157・158・ 175・176・177・178・179・183・184・185・186・ 187・188・189・192・193・195・196・55・203・ 204
図版17	39・56・60・65・66・67・211・212・213・214・ 215・216
図版18	毛受遺跡から出土した昆虫化石の顕微鏡写真

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の経緯・経過

発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査区及び調査面積は、平成7年度には95 A区をA a区・A b区・A c区の3つの小調査区に分割し、合わせて1,446 m²を、平成8年度には96 B区・96 C区・96 D区の3調査区合わせて4,115 m²を、それぞれ調査した(第1表)。なお96 C区については、工程上調査区を2つに分割して行ったため、調査時には、便宜上、先に調査を行った地区を96 C a区、後に調査を行った地区を96 C b区と呼称した(以下、調査区の表記については、アルファベットのみ記述する)。

遺構の検出は、表土をバックホウで除去した後、近世の包含層である黄褐色シルト層面より行った。その際、それぞれの調査区内に国土座標を基準とした5 m×5 mのグリッドを設定し、出土した遺物については、各グリッドごとに取り上げた。また遺構の測量は、各調査区ごとにヘリコプターによる航空測量を実施し、必要に応じて手測りによる実測や写真撮影を行った。

発掘調査終了後ただちに、出土遺物を本センター一宮事務所(平成7年度)及び尾西事務所(平成8年度)に搬入し、洗浄・注記等の一次整理を行った。そして平成10年度において資料・出土遺物を改めて本センターの一宮事務所に移し、遺物実測・トレース等の二次整理を行い、報告書の作成作業を行った。

年度	調査区	調査担当者	調 査 期 間							調査面積	
			4	5	6	7	8	9	10	(m ²)	
平成7	A a	黒田・山本・飴谷								454	1,446
	A b	黒田・山本・飴谷								494	
	A c	黒田・山本・飴谷								498	
平成8	B	小泉・浅井・飴谷								745	4,115
	C	小泉・浅井・飴谷			Ca区			Cb区		1,774	
	D	小泉・浅井・飴谷								1,596	

第1表 発掘調査工程表

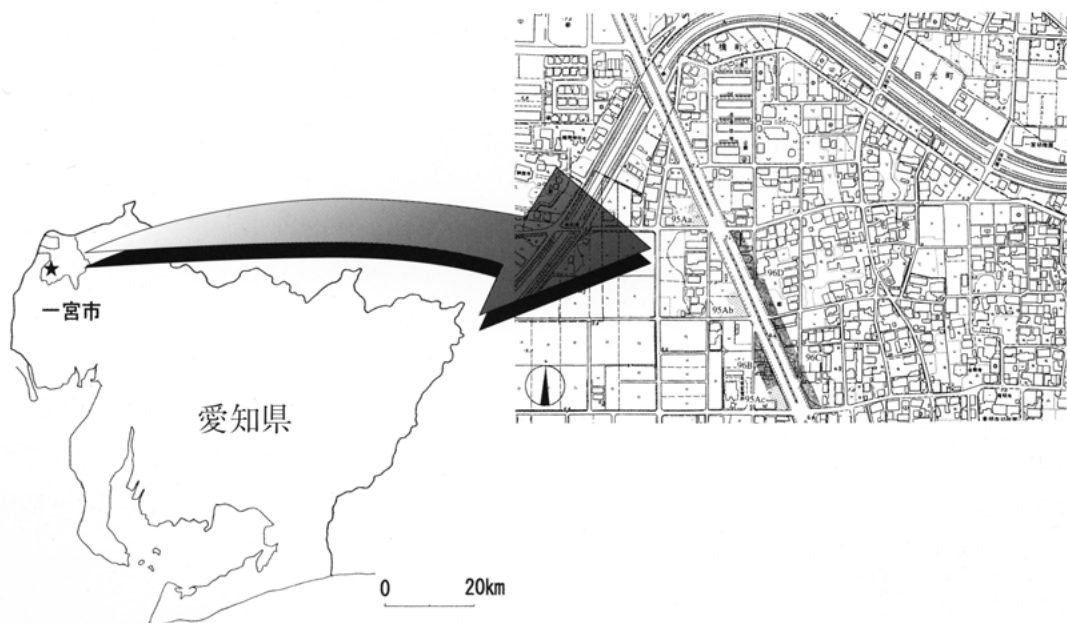
第2節 遺跡の概要

1 位置と地理的環境

毛受遺跡は一宮市大和町毛受（北緯37度17分50秒 東経136度46分58秒）に所在する遺跡で、市の西部に展開している。現在遺跡周辺は、県道一宮蟹江線（西尾張中央道）が南北に縦断し、水田のまわりに住宅地・工場などが点在している。西尾張中央道は交通量が多く、この地方を南北に繋ぐ重要な幹線となっている。

濃尾平野は木曽川によって形成された沖積平野で、上流域より木曽川扇状地、氾濫原地帯、三角州地帯に分けられる。木曽川扇状地の最南西部は一宮市北東部に展開し、沖積層基礎礫層が広がっている。また木曽川支流の小河川の流域では、洪水性の自然堆積土が微高地列をなす自然堤防帯と後背湿地を展開させている。一宮市内は、微高地を伴わない海拔0m地帯の三角州地帯ではなく、木曽川扇状地と氾濫原によって形成されている。

毛受遺跡は木曽川水系の日光川流域に位置している。遺跡付近は現在でこそ平坦な水田地帯として土地が利用されているが、かつては標高7m前後の自然堤防帯の上に集落が分布し、微高地には畑が広がり、綿が生産されていた。また後背湿地には水田が広がっていた。江戸時代の『寛文村々覚書』にもそれらの様子が記されている。幕末になると藍が作られ、明治20年代の後半からは自然堤防上に桑畑が広がり養蚕が行われた。これらの生産に伴って、機屋も木綿物から絹綿交織へ、さらに大正末期には毛織物へと変わった。



第1図 調査区位置図

2 歴史的環境

毛受遺跡の位置する一宮市西部は多くの遺跡が集中している地域である。毛受遺跡が立地する自然堤防は、歴史時代に日光川の旧河道に沿って形成されたと見られ、この辺りに展開する弥生時代～古墳時代にかけての遺跡が立地する自然堤防とは、形成時期を異にしていると考えられる¹⁾。

毛受遺跡から南1kmに位置する八王子遺跡は、弥生時代前期～後期にかけて尾張北部での拠点的な集落遺跡と考えられ、県内最古の銅鐸が出土している。そして古墳時代前期までは継続して集落が営まれ、それ以降も、中世まで連綿として続いていたことが明らかとなった。また毛受遺跡から南西2km付近には、愛知県尾張部の弥生時代後期の標識遺跡となつている山中遺跡があり、この遺跡を北端とする周辺には同時期の萩原遺跡群が存在する。

古代には、日光川流域に幾つかの寺院が建立されていたことが、発掘調査や分布調査によって確認されている。それらの中の1つ、毛受遺跡からおおよそ1km南の地点に位置する薬師堂廃寺では、変形蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦などが採集されている。

中世になると妙興寺から荊安賀を通る街道が東西に設けられ、そのまわりに集落が形成された。この頃になると八王子遺跡は次第に衰退していき、代わって南の荊安賀遺跡へと集落の主体は移り、荊安賀の街並みが街道沿いに展開していく。そして八王子遺跡の北側から毛受遺跡周辺にかけても中世の集落が展開していくようである。毛受遺跡周辺の中世の遺跡として、南1.5km付近に荊安賀遺跡があり、日光川を挟んで、北へ0.5kmの付近に馬引横手遺跡、北へ1km付近に東荊安賀道遺跡がそれぞれ位置している。また日光川流域に展開する自然堤防上には中世城館跡が点在している。

戦国時代になると織田信長の家臣浅井新八郎政高が、岩倉の町並や寺院を移して、荊安賀に城下町を形成した。この頃毛受にも砦（毛受城）が設けられ、新八郎の庶弟とも家老とも言われる浅井玄蕃の居城となった。荊安賀城は17世紀の初めに廃城となったが、毛受城はそれ以前に廃城になったと見られる。それは、浅井新八郎政高の跡を継いで荊安賀城主となった浅井田宮丸が、天正14（1584）年の小牧・長久手の戦いに際し、謀反の疑いで殺害されて間もなくの頃と考えられる。なお賤ヶ岳の戦いで柴田勝家の身代わりとなった毛受勝助は、毛受村に在住していたと見られる鶴飼家より春日井郡稲葉村へ分家し、毛受姓を名乗った鶴飼勝明の次男である²⁾。

近世になると荊安賀は巡見街道が通り、街道沿いの在郷の町として発展した。毛受はその北にあり、『寛文村々覚書』に記された石高720石、家数72軒、人数360人の農村として発展した。

毛受は現在「めんじょ」と呼ばれているが、以前は「めんじょう」と呼ばれていたようである。地名の由来としては、「毛受は河内、和泉付近に住んだ物部氏の一族百舌鳥氏が全国に拡がり、モズからメンジョウとなった」（天野信景）「毛受は免除の誤りか」（吉田東伍）「大和国鵜村が毛受となり、更にメンジョウと転じた」（津田正生）などの諸説がある。毛受姓は和泉国発祥の土師姓の一つとも考えられている。

<参考文献>

- (1) 服部信博編 1992 『山中遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集
- (2) 毛受英次 1983 『鶴飼毛受家譜』

第2表 毛受遺跡関連年表

- 11世紀～12世紀 国衙領内に郷保が展開し、中嶋郡毛受村が存在したことが知られる。
- 1235（嘉禎 8）（久我家文書）真澄田社領注文に「毛受茅原二丁半」とある。
- 1281（弘安 4）（醍醐寺文書）毛受袈裟鶴丸が安食荘預所職となり、年貢を進納する。
- 1282（弘安 5）（醍醐寺文書）千世氏荘坪付注進状案に「毛受里一坪二反大」と記されている。
- 1350（承和 2）（妙興寺文書）毛受遠能・遠巖・遠篤など、これより数回に渡って、毛受村の所領を妙興寺に寄進する。
- 1388（嘉慶 2）年の毛受遠能の寄進によれば、7町7反あまりの寄進となっている。
この寄進の中に「瓦堂前・助田・東村・八王子後・深沼・鎌田・西奈木・高畠・寛口前」という小字名がでてくる。
- 1356（文和 5）（妙興寺文書）証覚荒尾宗顕牛野郷坪付注文に「毛受引一所壺町二坪」と記されている。
- 1394（応永 元） 鶴飼頼定が中嶋郡毛受郷に敷地 70 反の別業の地を開く。
- 1432（永享 4） 「尾張名所図絵」によれば、足利義教が富士遊覧の帰途、毛受郷鶴飼頼定家に立ち寄る。
- 1558（永禄 元） 六代鶴飼兵右衛門勝孝、浮野合戦にて織田信長に兵糧を送り恩賞を受ける。
毛受孫兵衛、永見貞親と共に徳川方で三州寺部に戦う。
- 1561（永禄 4） 浅井新八郎政高が、岩倉の町並・寺院を移し、荻安賀に城下町を形成する。
この頃、浅井新八郎政高が所領内に砦（毛受城）を築き、浅井玄蕃の居城とした。
- 1565（永禄 8） 毛受城主浅井玄蕃、妙興寺に銅磬を寄進する。
- 1566（永禄 9） 浅井玄蕃、毛受勝助が浄土宗金剛寺を建立する。
- 1581（天正 9） 浅井新八郎政高が没し、田宮丸が 16 才で荻安賀城主の跡を継ぎ、織田信雄の三家老の一人となる。
- 1583（天正 13） 賤ヶ岳の戦いで、柴田勝家の家老毛受勝助家照（春日井郡稲葉村に移住し、毛受姓に改姓した鶴飼勝明の次男）が、勝家の身代わりになって戦死する。兄毛受茂左衛門も戦死。
- 1584（天正 14） 小牧・長久手の戦いが始まる。荻安賀城主浅井田宮丸、羽柴秀吉との内通の疑いを受け、長島城で織田信雄によって殺害される。森勘解由が荻安賀城に入る。
この頃に、毛受城廃城か？
- 1620（元和 6） 源敬公御黒印写に寄れば、毛受村を知行地としている金子庄左衛門は 171 石となっている。
- 1636（寛永 13） 源敬公御黒印写に寄れば、毛受村を知行地としている田嶋八右衛門は 104 石となっている。
- 1639（寛永 16） 源敬公御黒印写に寄れば、毛受村を知行地としている左右田三郎兵衛は 200 石、石林次左衛門は 30 石、伴清十郎は 10 石、行方平左衛門は 50 石となっている。
- 1672（寛文 12） 『寛文村々覚書』によれば村の概高 720 石余り、田 2 町 7 反余り、畑 66 町余りで、家数 72 軒、人数 360 人と記されている。
- 1684（貞享 元） 竜明寺が、荻安賀の天台宗法輪坊の寺籍を移して建立される。
- 幕末～明治 藍の栽培が始まり、明治 7 年には藍玉製造者が 10 軒あった。
- 1890（明治 22） 毛受村が、日光村の一部となる。



(国土地理院発行 1/25,000地形図「一宮」をもとに作成)

1 畑添遺跡 (弥生) 2 四反田遺跡 (弥生～古墳) 3 大平遺跡 (古墳) 4 板倉遺跡 (縄文) 5 蒲原遺跡 (弥生～中世) 6 伝治越遺跡 (古墳) 7 薬師堂廃寺 (古代) 8 斎宮寺遺跡 (古代) 9 八王子遺跡 (弥生～中世) 10 田島遺跡 (弥生～古墳) 11 竜明寺遺跡 (弥生) 12 毛受遺跡 (中世) 13 荻安賀遺跡 (中世) 14 山中遺跡 (縄文～中世) 15 馬引横手遺跡 (中世) 16 法圓寺遺跡 (中世) 17 東荻安賀道遺跡 (古墳～中世) 18 三味郭遺跡 (古墳) 19 東向野遺跡 (古墳) 20 野府城遺跡 (中世) 21 西上免遺跡 (弥生～古墳) 22 中切遺跡 (古墳)

第2図 毛受遺跡周辺遺跡分布図

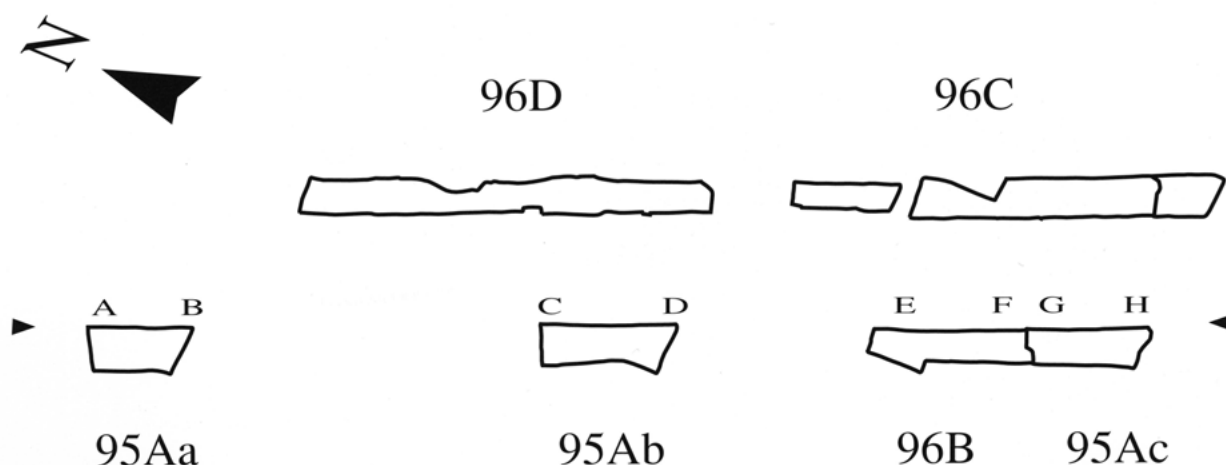
第Ⅱ章 遺構

第1節 基本層序

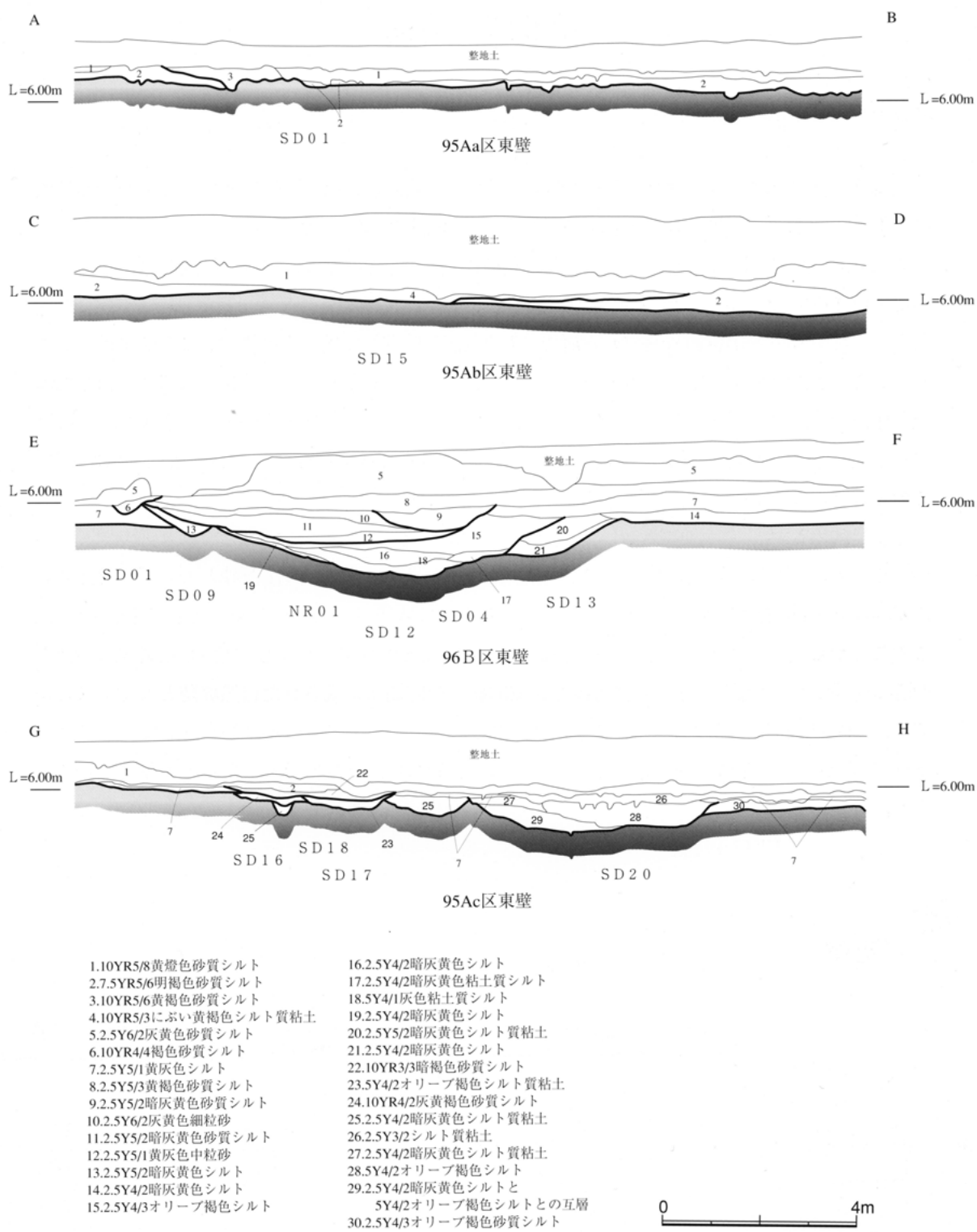
発掘調査区の基本的な層序は、現表土の大部分が、西尾張中央道建設時に埋め立てられた整地土層であった。旧地層の堆積は、それ以下であり、概ね5層に分けられる。

第1層は、旧畑地の耕作土と見られる黄灰色の砂質シルト層で、50～70cm程度の厚さを持っていた。第2層は20～40cm程度の厚さの黄褐色砂質シルトおよびシルト層である。第3層は暗灰黄色もしくはオリブ褐色の砂質シルト層で、近世（江戸時代）に属する遺構は、この層に掘りこまれている。また第2層と第3層の間には、ところどころに、黄褐色細粒砂がレンズ状に堆積した状況が確認できた。第4層は暗灰黄色もしくは黄褐色のシルト層で、戦国期の遺構の多くは、この層に掘り込まれている。第5層は、黄褐色粘土質シルトと灰黄色極細粒砂との互層が形成されており、この層以下が基盤層となる。（第4図）

毛受遺跡の層序を、南北に見ていくと、最も日光川に近いA a区では、第2層の黄褐色シルト層から以下では、すでに基盤層である黄褐色粘土質シルト層と灰黄褐色極細粒砂との互層が確認されたが、戦国期の遺構が展開するB区・A c区では基本的には上記したような基本層序が確認された。このことから基盤層は北へいくほど高くなっていることが伺える。しかし、検出した遺構の希薄さや所属時期から、日光川に近い堆積層ほど比較的新しい時期に形成された自然堤防と考えることができ、戦国期・近世（江戸時代）の遺構が多く展開し、また現在の毛受集落が立地している南側のほうが、より古い時期に形成された自然堤防として安定した土壌基盤であったと考えることができる。



第3図 基本層序位置図（タテ、ヨコともに1：2,500）



第4図 基本層序図 (1:125)

第2節 遺構

1 遺構の概要

C区とD区で、一部現代の攪乱により遺構が大きく削平されていたが、全体としては調査区域の南側に遺構が多く展開し、北側に向かうにつれて、遺構は稀薄になっていくようである。

検出した遺構の多くは、出土遺物から、概ね戦国期に属するものと近世（江戸時代）に属するものとの、大きく2つの時期に分けられる。中世より以前の遺構は、ほとんど検出されなかった。そこで本書では以下の3期に区分して記述をすすめることとする。

A期 古墳時代から中世

B期 戦国期

C期 近世（江戸時代）

なお本報告で記述する戦国期は15世紀後半から16世紀代までを対象とし、近世は概ね17世紀代から19世紀半ばまでを対象とする。

2 A期の遺構

溝1条を検出した。出土遺物は稀薄で、所属時期は明らかにし難いが、B期の遺構との前後関係などから、室町時代半ば～後半くらいの遺構と考えられる。

C区 SD19

SD18に切られる東西方向の溝である。検出面での規模は、幅約2.7m、深さ約0.4mを測る。溝の底面には、溝の方向上に、節を削り抜いた竹製の道管状の筒が2本並列して置かれており、西側は調査区外へ延びていた。性格は不明である。

3 B期の遺構

B期の遺構は調査区域の中程から南側にかけて展開をしていた。検出した溝は、いずれも比較的規模が大きく、屋敷地または居館を囲む区画溝と考えられる。また掘立柱建物が1棟検出された。

A 掘立柱建物

D区 SB01（第5図）

調査区の南部で検出された桁行4間以上×梁行2間の東西棟の掘立柱建物で、桁行7m以上×6.6mを測り、西側は調査区外へ広がっていく。この建物を構成する柱穴群は、検出面で、直径0.7～1.2mの規模を測る。柱穴の遺存状況から、建物の一部がすでに削平された可能性がある。また柱間距離は、南面の東西方向で、東から約1.9m・約1.9m・約1.9m・1.3m以上、とほぼ等間隔に並んでいたと考えられる。また南北方向では、北から約3.9m・約2.7mであった。検出された11基の柱穴には

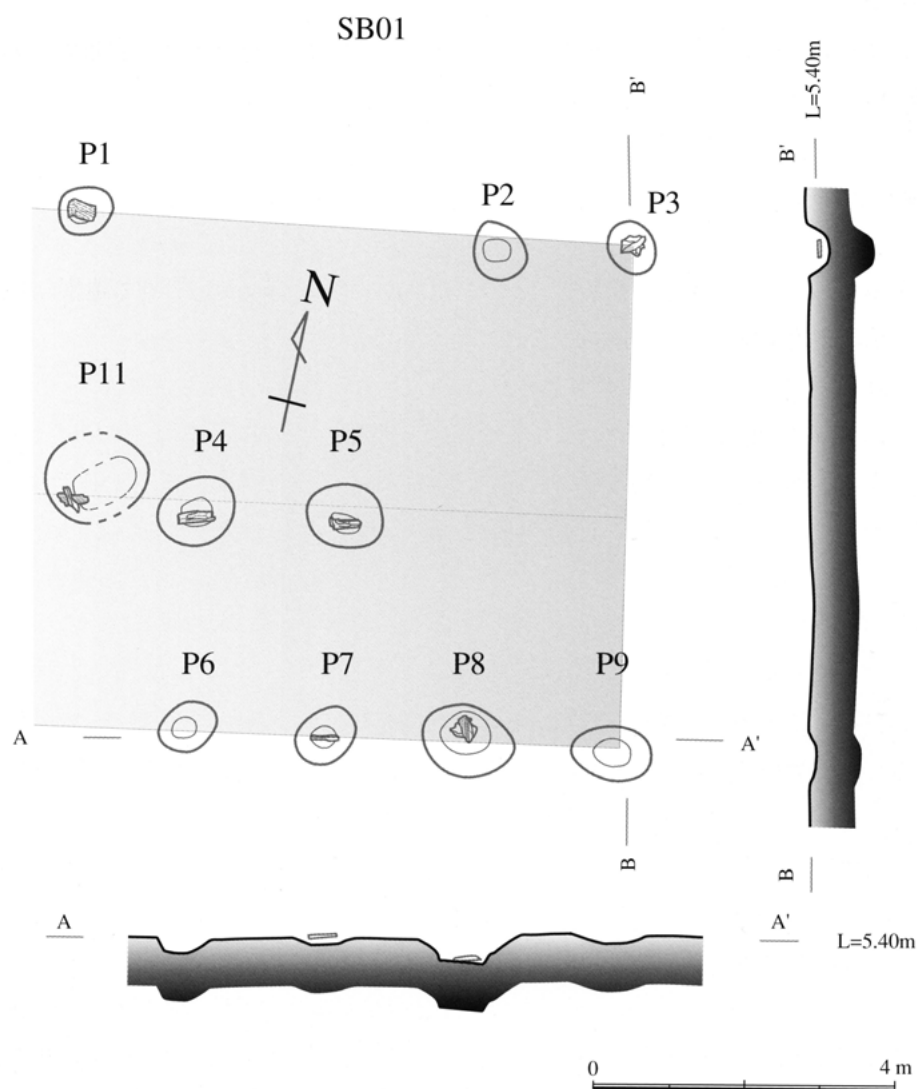
柱痕の遺存は見られなかったが、そのうち6基には、礎板が設置されていた。主軸方位はN83° Eを測り、C区SD18やD区SD06と方位をほぼ同じくすることから、これらの遺構と同時期に属すると見られる。

B 溝

(1) B区

SD11

溝の西側の肩は調査区外のため、全体の規模は不明であるが、検出し得た規模では、幅1.9m以上、深さ約0.7mを測る。最下層面から被熱した痕跡をもった自然礫が幾つか固まって出土したが、石組み構築物の石材等の可能性は低い。この溝は、調査区内で北から西へ逆L字形に屈曲している。

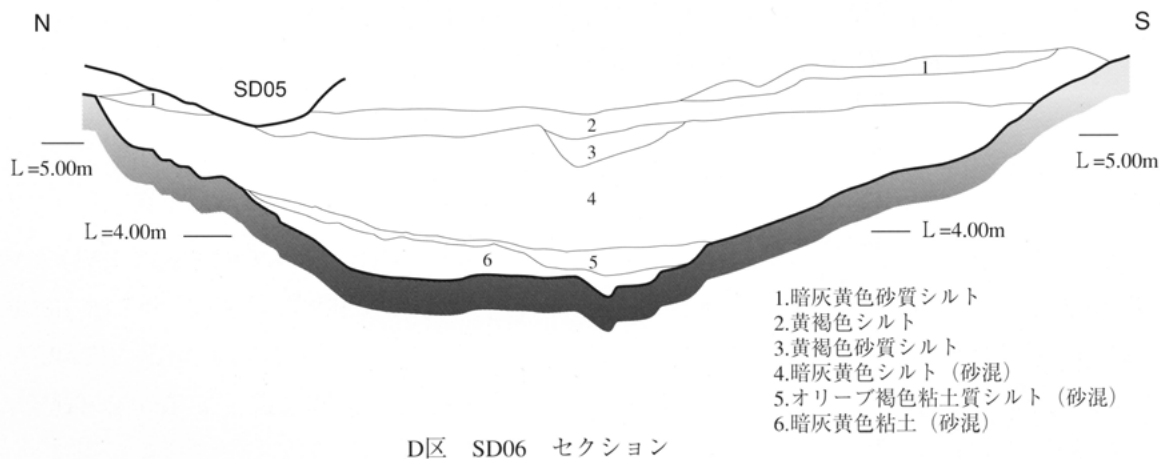
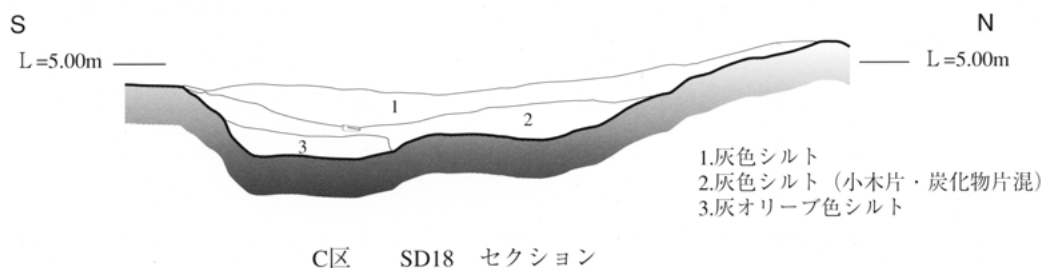
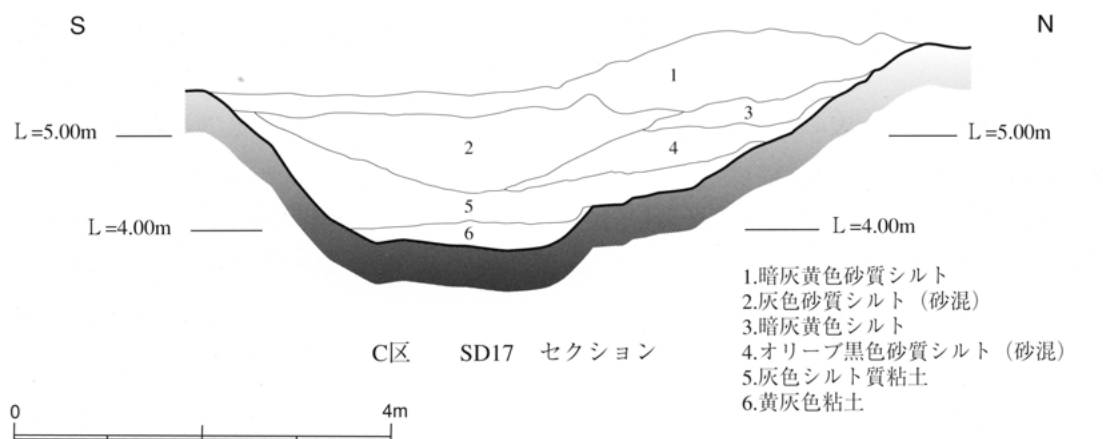


第5図 D区 掘立柱建物実測図

ることから、調査区域よりさらに西側へ展開する区画溝と考えられる。

SD12

調査区の中央をほぼ南北に走る溝である。上部はSD04、NR01によって壊されていた。検出面での規模は、幅約1.8m、深さ約1.5mを測るが、推定幅は約3.5m前後になると思われる。埋土は暗灰黄色シルトで、下層面では、植物質の堆積層が部分的に確認できた。比較的規模が大きく、深いU字形の断面形態を呈していることから、堀割のような機能を持った区画溝と考えられる。



第6図 B期主要溝層序図 (1:80)

(2) C区

SD17 (第6図)

確認しえた規模は、幅約7.8 m、深さ約2.4 mを測る。上部の一部はSD16により壊されていた。埋土は、上層が暗灰黄色シルト、下層が灰色シルトである。この溝は、調査区内で北から西へやや鋭角に屈曲しており、同時期の他の溝とは若干方位を異にしている。その規模や、断面形が逆台形の掘形であることから、清洲城下町遺跡にみられる堀のような、企画性を持って掘られたと考えられる大溝である。

SD18 (第6図)

溝の上面は、現代の攪乱によりほとんど削平されていた。そのため検出面での規模は、いくらか過小であるとみなければならないが、幅約7.2 m、深さ約1.5 mを測る。埋土は灰色シルトで、部分的に植物質の堆積が見られた。断面形態から、この溝は平らな溝底で比較的急斜面の掘形が想定できる。また検出状況から、調査区付近にクランク状の屈曲部を持っていたことが確認された。SD17同様、堀と考えられる大溝である。

SD20

調査区のほぼ中央を、東西に走る溝で、幅約3.2 m、深さ約0.5 mを測る。主軸方位はN83° Eであり、C区SD17を除く、他の同時期の溝とほぼ同一方向である。この溝からは木製卒塔婆が1基出土していることから、居住域を区画していた溝と考えられる。

(3) D区

SD06 (第6図)

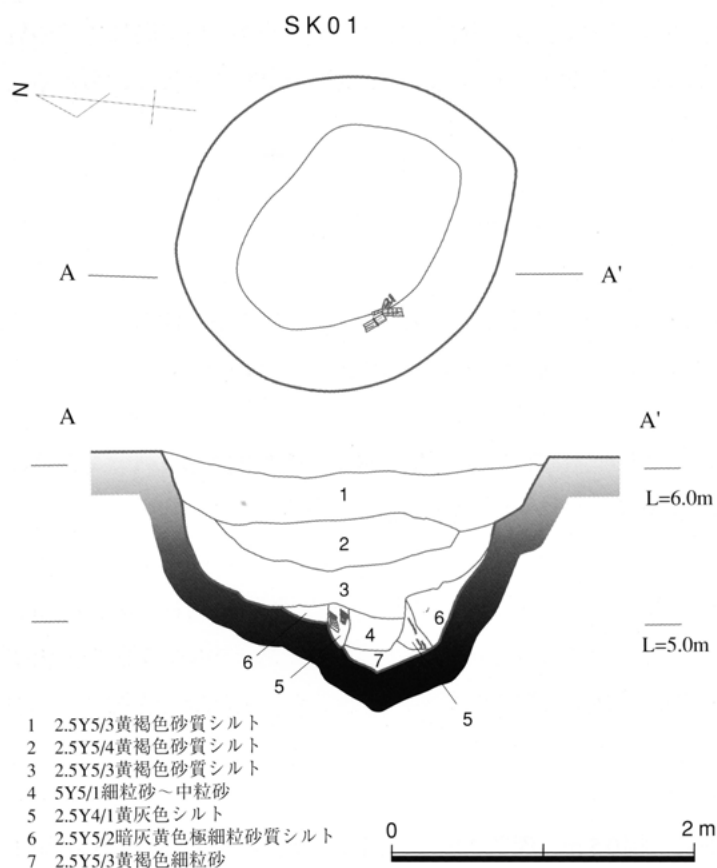
調査区の中央付近を東西に走る大溝で、主軸方位はN65° Eである。上部は後世の掘り返しなどで破壊されていた。幅10.2 m、深さ2.1 mを測り、断面形がやや急峻な斜面をもった逆台形であることから、堀として掘削された溝と考えられる。埋土中の遺物から、該期の中でも初期に位置づけられる。

SD07

SD06の北側に併走する溝で、主軸方位はN65° Eである。幅1.8 m、深さ1.1 mを測り、断面は逆三角形を呈する。検出状況から、SD06より若干先行して掘削された可能性もあるが、出土遺物が稀薄なことから、掘削時期については明らかにし難い。

4 C期の遺構

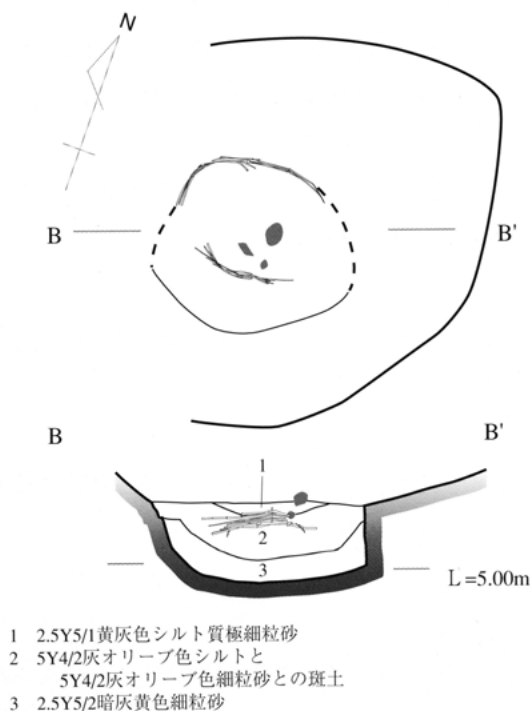
C期の遺構は、調査区域ほぼ全域から検出された。特に96C区南域では、居住空間を区画していると想定させる方形に屈曲する溝数条、井戸を数基検出した。この時期の溝は、いずれも主軸方位は南北もしくは東西であり、B期のそれとは若干方位を異にしていることが窺える。これらは、概ね江戸時代の前期前半(17世紀前半)から中期後半(18世紀後半～19世紀前後)に属すると考えられる。



A 畝状遺構

A (A a) 区の北西付近で検出された、小規模の溝が数条並行して走る遺構群を畝状遺構として報告する。長さ2m～4m程の溝7条で構成される。いずれの溝も幅0.3m～0.7m、深さ0.16m～0.19m程度を測る。それぞれの溝の間隔は、SD02とSD07との間隔が約0.4mである他は、0.1m～0.2m程度で、主軸方位はN63° Eである。溝の埋土は暗褐色砂質シルトであった。出土遺物がほとんど存在しないことから時期は特定し得ないが、天保年間に作成された村絵図によれば、この付近は畑となっていることから、江戸時代後期以前と考えることができる。

SK18



B 井戸

C区で2基検出した。

SK01 (SE01) (第7図)

調査区の南側で検出された。平面プランは長径約3.2mの楕円形を呈し、深さ1.5mを測り、断面形は1段の段差を持っている。井戸の内部構造は遺存していなかったが、最下層に砂の噴出を防ぐための竹製の編み物が設置されていた。SD03に切られていることから、江戸時代前期に属すると考えられる。

SK18 (SE02) (第7図)

SK01 (SE01) から南へ6mほど離れた地点で検出された。平面プランは長径2.3mの楕円形を呈

第7図 C区 SK01・SK18実測図

し、深さ約1.2 mを測る。SK01同様、井戸の内部構造は遺存していなかったが、最下層に竹製の編み物が設置されていた。SD11に切られているので、江戸時代前期後半～中期に位置づけられる。

C 溝

(1)C区

SD01

調査区の南側をほぼ南北に走る溝である。検出規模で、幅1.1 m、深さ0.35 mを測る。この溝の南端は、調査区の南端付近で収束している。出土遺物から江戸時代中期に属する。

SD02

調査区南側で東西方向から南北方向に屈曲する溝である。幅0.76 m、深さ0.33 m測り、南端は調査区南端で収束する。出土遺物から江戸時代中期後半に属する。

SD03

調査区南東側で方形に巡り、東側は調査区外へと延びている溝である。幅は0.9 m、深さ0.2 mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。方形の南北の長さは約15.5 mであった。屋敷地を囲む区画溝と考えられる。出土遺物や、SK01を切り、SD01に切られていることから、江戸時代前期後半～中期頃に位置づけられる。

SD06

SD03の外側に平行して走る溝である。幅0.5 m、深さ0.16 mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。江戸時代中期後半と考えられる。

SD09

調査区の中央を東西に走る溝である。幅1.71 m、深さ0.3 mを測り、断面形は浅い皿形を呈する。SD20が埋没した後で掘削され、SD06に切られている。出土遺物から、江戸時代中期に属する。

SD11

調査区南東部で検出された、SD01にほぼ並行して走る溝である。幅1.2 m、深さ0.38 mを測り、南端は調査区南端で収束する。出土遺物から、江戸時代中期に属する。

SD12

調査区中央を南北に走る溝である。幅1.8 m、深さ0.3 mを測り、断面形は皿形である。江戸時代中期に属すると考えられる。

SD13

SD12の西側を並行して走る溝である。規模はSD12よりやや小さく、幅1.28 m、深さ0.23 mを測る。SD12とほぼ同時期の溝と考えられる。

(2)D区

SD01

調査区のほぼ中央で検出された、東西方向に走る溝である。南肩部は後世の掘削により削平されていたが、検出した規模で、幅6.7 m、深さ0.73 mを測る。埋土は黄灰色シルトであった。出土遺物から江戸時代中期に属すると考えられる。

第Ⅲ章 遺物

第1節 出土遺物の整理と分析方法

A 出土遺物の整理方針

出土した遺物は、27リットル入りコンテナ容器に換算しておよそ40箱程度であった。遺構に伴う一括性の高い遺物は少なく、多くは遺構外からの出土である。また遺物の残存状況も良好とはいえず、ほとんどが小破片である。そのため、遺跡の性格を理解するための情報をできるだけ多く収集するために、出土遺物の分類と出土量のカウント作業をおこない数量化することにつとめた。特に、毛受城が築城されていたとされるB期の遺物については、毛受遺跡の南に位置し、歴史的にも関係が深いとされる荊安賀城との比較をおこなうための基礎データを蓄積することに観点を置いた。整理、カウント方法については『清洲城下町遺跡Ⅳ』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 1994）・『清洲城下町遺跡Ⅴ』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 1995）を参照とし、分類項目もこれらの報告書の形式を基本的には踏襲しつつ、一部改変を行った。

B 出土遺物整理の方法

出土遺物を材質（陶磁器、土師器、石製品、木製品、金属製品）で区分し、大きくA期・B期・C期の3期に分けた。B期の遺物を中心にカウント作業を行い、それ以前・以後の遺物についても、器種によっては、簡単なカウント作業をおこなった。

なお、各時期の遺物の年代観は、古式土師器については赤塚次郎氏（本センター主査）、灰釉系陶器については岡本直久氏・藤澤良祐氏（共に（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）、B期・C期の陶磁器については鈴木正貴氏（本センター調査研究員）・藤澤良祐氏、また石製品の材質鑑定は堀木真美子氏（本センター調査研究員）にそれぞれご教示をいただいたが、その文責はすべて筆者にある。

C カウント方法

① データの収集

- a 遺構、グリッド別毎に接合作業を実施した後、口縁部の有無で区別する。
- b 口縁部を有するものは接合後破片1点につき1データとした。
- c 口縁部を持たないものも、基本的には破片1点につき1データとした。
- d 長辺が1cm以下の小破片は、原則として分析から除外した。

② 陶磁器・土器の分類

出土した遺物は、B期のみならず、多くが細片化した小破片であるため、器種項目毎に分類を進めることが十分にできなかった。そこで器類毎に分類することとし、場合によって器種分類までおこなった。

- A 碗……………口径10cm前後、器高7cm前後の小型容器。

平碗・天目茶碗・丸碗・尾呂茶碗・せんじ碗・鎧茶碗、など

B 皿……………口径10cm前後、器高2cm前後の浅い小型容器。

縁釉皿・腰折皿・端反皿・稜皿・重圈皿・丸皿、など

C 鉢……………口径25cm前後で逆ハの字状に開くものと向付と呼ばれる小鉢状のものを一括。

平鉢・丸鉢・大皿・筒型鉢、など

D 擂鉢……………内面に擂目を持つ口径25cm前後で逆ハの字状に開く大型容器。

E 袋物……………袋形・筒形の形状をなす容器。(底径の大きさと大形品と小形品との細分が可能だが、遺物の残存状況から、本報告ではそこまでの細分が困難であることから一括して「袋物」として扱う)。

壺類・甕類・瓶類・筒型容器、など

F 香炉……………筒形・壺形の容器に脚がついたもの。

G 鍋・釜……………煮沸・煮炊に使用されたと思われる浅鉢・大型製品を特に区別する。

H その他……………蓋・鈴・陶丸・錘等上記の分類に当てはまらないもの。

I 不明……………器類・器種が不明なもの。

なお、土師器皿、土師器の鍋・釜、灰釉系陶器については、以下の手順で、カウントをおこなった。

土師器皿は、遺構に伴って出土した破片点数が総破片点数の約37%程度であり、形状を復元できる資料も少量であった。そのため、遺構に伴う資料のなかで、数量的にもまとまって出土したものについては、カウントをおこなった。土師器の鍋・釜は、口縁部の形状に基づき内耳鍋・焙烙・羽付鍋・伊勢型鍋とに分類されるが、所属時期を踏まえた上での器種分類を進めるための十分な破片資料数が得られなかった。そのため、土師器皿同様に、把握できる限りにおいてカウントをおこなったが、基本的には「鍋・釜」という1つの器類として扱った。灰釉系陶器についても、碗と皿を明確に区別することが困難であったため、すべて「碗」としてカウントした。

③口縁部残存率の算定方法

今回の分析で実施した口縁部計測法は、

- 口縁部を持つものすべてを対象とし、鈴・陶丸・錘等は計測不能とした。
- 口縁部が完存した場合を1(12/12)として、遺存している口縁部の割合を12分の1単位で計測した。小破片の資料化も試みたため12分の1以下を切り上げて算定している。(12分の0より大きく12分の1以下の破片を1、12分の11より大きく12分の12以下の破片を12とした)。
- 計測器具は、直径を1cm単位ずつ拡大した同心円とその中心から放射状に12等分した直線(角度は30°づつ)を、白または透明の用紙に印刷したものを計測器として用意し、口縁部残存資料を計測器具に当てて、残存する口縁部の長さが放射状に12等分された区画の幾つ分かを調べて口縁部残存率を求めた。

第2節 調査区全体のカウント結果(概要)

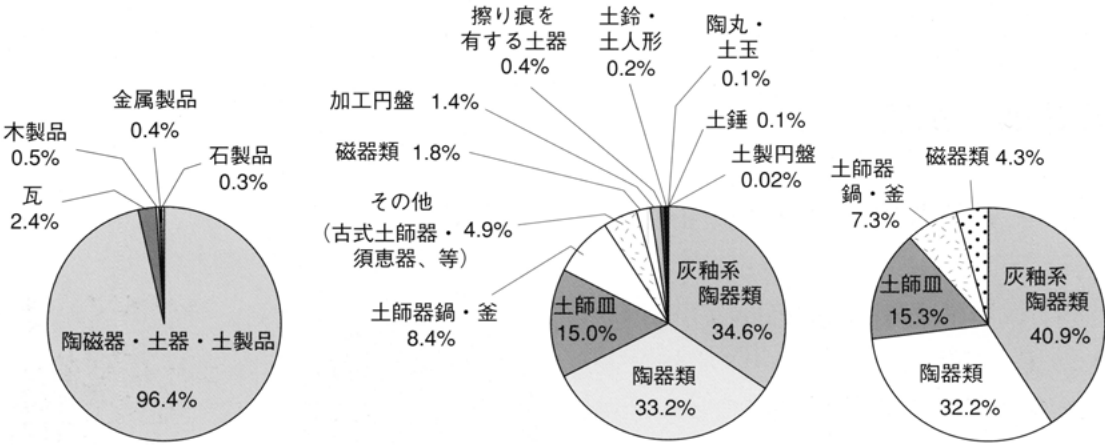
出土遺物の点数は、陶磁器・土器・土製品類の接合前の総破片数5,005点、瓦の総破片数125点、

	陶磁器 土器 土製品	瓦	木製品	金属製品	石製品	合計
点数	5,005	125	27	22	14	5,193

第 3 表 毛受遺跡材質別遺物破片数

	灰釉系 陶器類	陶器類	土師皿	土師器 鍋・釜 類	その他 古式土師器 須恵器、等	磁器類	加工円盤	擦り痕を 有する土器	土鈴・ 土人形	陶丸・ 土玉	土錘	土製円盤	合計
点数	1,733	1,662	749	418	245	88	71	20	11	4	3	1	5,005

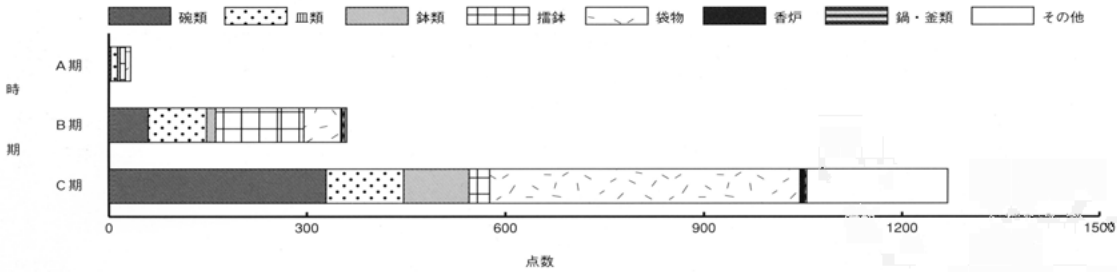
第 4 表 陶磁器・土器・土製品破片数



第 8 図 毛受遺跡出土遺物組成図

	碗類	皿類	鉢類	擂鉢	袋物	香炉	鍋・釜類	その他	合計
A 期	3	10	4	8	8	0	0	0	33
B 期	60	88	14	133	56	2	4	3	360
C 期	329	117	99	31	469	7	3	214	1,269

第 5 表 時期別陶器破片数



第 9 図 時期別破片数グラフ

木製品 27 点、金属製品 22 点、石製品 14 点であった（第 3 表）。また以下に示す破片点数は、すべて接合前の点数である。

出土した土器のカウント作業の結果、古墳時代前期の古式土師器、須恵器、灰釉陶器などが、少量ではあるが、確認された（4.9%）。中世の土器については、灰釉系陶器が最も多く出土した（34.6%）。また中世施釉陶器は、器類構成は少ないが、出土した該期の陶器類の約 2% の割合を占めた（第 4 表・第 8 図）。

他方、土師皿、土師器鍋・釜類については次のような結果を得ることができた。

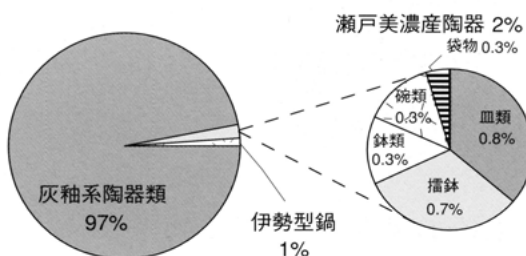
土師皿は総破片数で 749 点（15.0%）出土し、口縁部残存率は 234（1 / 12 単位とする。以下同様に表記する）である。特に B 区北側、C 区北側、D 区中央と、いずれも戦国期の大きな区画溝が検出されたあたりに集中している。土師器鍋・釜は総破片数 418 点（8.4%）出土し、口縁部残存率は 111 であった。そのうち内耳鍋・焙烙類が総破片数 377 点を数え、口縁部残存率が 86 ともっとも大きかった。

第 3 節 遺物

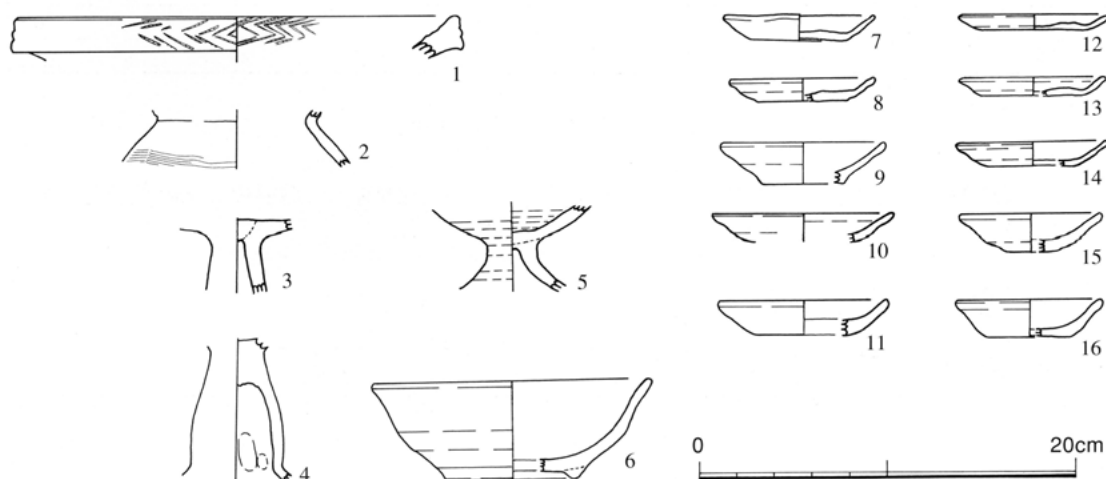
1 A 期の遺物（第 10 図 1 ～ 16）

ここでは、古墳時代から中世までの時期の遺物を一括して扱う。

1 ～ 4 は古墳時代の古式土師器である。1 は壺の口縁部である。口縁内面には平坦面を持ち、内面・外面に連続した羽状刺突紋が施されていることから、柳ヶ壺型土器の祖形タイプと考えられる。廻間Ⅱ式後半に属する。2 は壺の体部で、



第 11 図 中世土器口縁部残存率



第 10 図 A 期遺物実測図

櫛描沈線紋を施す。4世紀中頃（廻間Ⅲ式？）に位置づけられる。3・4は高坏である。3は古墳時代前期後葉に位置づけられ、4は松河戸Ⅰ式に属する。

5は須恵器の高坏である。

6～16は灰釉系陶器である。6は「北部系」（美濃窯）産の碗で、外面底部の回転糸切痕と高台部のモミ痕をナデ消している。5型式に属する。7～16は皿である。11は猿投窯産か知多窯産の製品と思われる。15・16はいわゆる「南部系」産の荒肌手の製品である。7～10、12～14はいずれも美濃窯産の均質手の製品で、7は完形である。これらはいずれも5型式～9型式に位置づけられる。灰釉系陶器の接合前の総破片数は1,733点で、口縁部残存率は624であった。また、該期の遺構が稀薄であったこともあり、ほとんどが二次堆積による覆土からの出土である。

そのほか、中世の遺物として、「伊勢型鍋」と呼ばれる土師器鍋は、口縁部破片数が9点、口縁部残存率は6であった。また古瀬戸中期～後Ⅲ期くらいに属する施釉陶器は破片数で26点が出土し、いずれも瀬戸美濃窯産である。器類は、碗類（平碗など）3点、皿類（卸皿、縁釉皿など）10点、鉢類（折縁深皿など）4点、播鉢8点、袋物（壺瓶類）1点であった。また口縁部残存率は碗類0.3、皿類0.8、鉢類0.3、播鉢0.7、袋物0.1であった（第11図）。

2 B期の遺物

出土した土器の割合は、全体の22%程度であるが、遺物の残存状態は比較的良好、また当該期の遺構からの出土量も一定の割合で見られたことから、各調査区の主な遺構毎に記述をすすめる。

（1）B区

SD11（第12図 17～29）

調査区の北西隅付近で検出された区画溝で、ここからは瀬戸美濃窯産の天目茶碗、腰折皿、縁釉小皿、播鉢、壺、匣鉢、常滑産の甕などの陶器類、土師皿、木製品が出土した。

土師皿（17～20）はいずれも口径6cm前後の非ロクロ成形で、体部にヨコナデを強く施している。19には口縁部にタールが付着している。21～23は瀬戸美濃窯産の播鉢である。22には廃棄された後に受けたと思われる被熱痕が見られる。21・22は古瀬戸後Ⅳ期新段階、23は大窯第1段階に属する。24は無釉の筒型製品である匣鉢、25は縁釉小皿である。常滑産の大型の甕である26は、口縁は「N」字状に折り返すもので、かなり縁帯に近い形となっている。

27は4ヶ所に穿孔をもつ折敷の底板である。28・29の板状の木製品は、ともに中央部に挟りを持ち、先端部に孔が穿たれている。これらは、出土地点が近接していたことや、また他遺跡の類例から、本来は十字形に組み合わされており、曲物桶などの容器を載せて吊した運搬具であったと想定される。

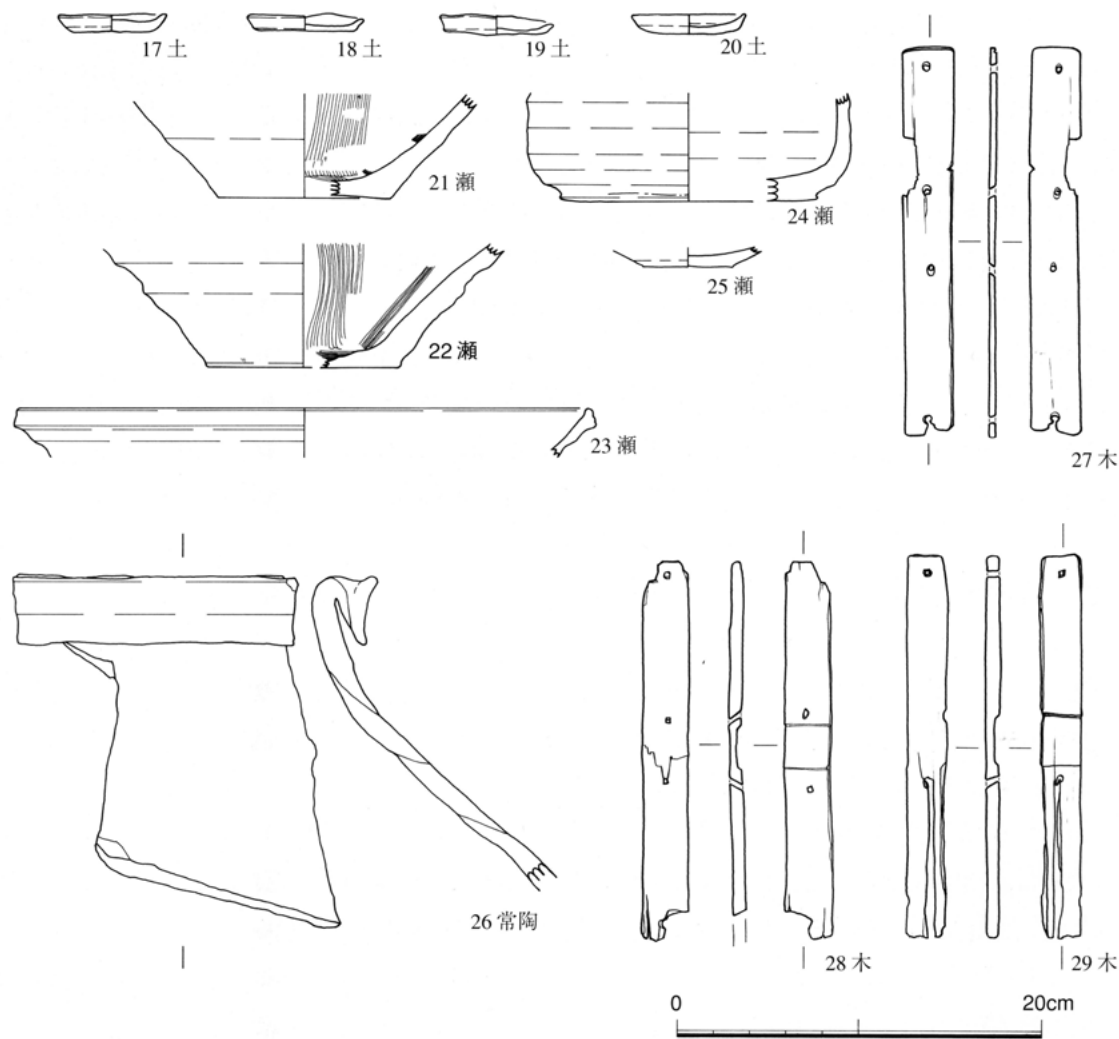
SD12（第13図 30～33）

調査区の中央をほぼ南北に走る大溝で、ここからは瀬戸美濃窯産の天目茶碗、播鉢、壺などの陶器類、土師器内耳鍋、そして最下層の灰色粘土質シルト層からは木胎漆器碗が出土した。

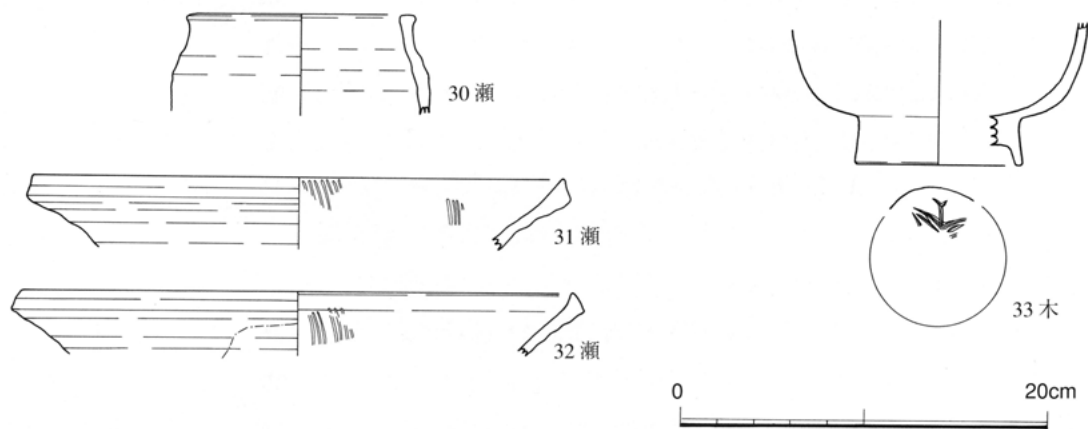
30は口広有耳壺で、外面に鉄釉をかけている。播鉢（31・32）は、口縁端部が内側に屈曲し上方に伸びているもの（32）と口縁断面が三角形のもの（31）とに分かれる。32は古瀬戸後Ⅳ期新段階、

31は大窯第1段階にそれぞれ属する。

木胎漆器椀 (33) は体部の器厚に比して底部の器厚が著しく厚く、高台も高い。また底部と体部



第12図 96B区 SD11 遺物実測図



第13図 96B区 SD12 遺物実測図

の外側に段差があることが断面形から窺えることから、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第1段階くらいに位置づけられる。底面には文様の刻書が施されている。

(2) C区

SD17 (第14図 34～39)

調査区内で、逆L字状の鉤手に屈曲する大溝で、堀割としての機能が推測される。出土遺物は、瀬戸美濃窯産の天目茶碗、重圈皿、卸目付大皿、内耳鍋、常滑窯産などの陶器類、土師皿、土師器内耳鍋、銅製紅皿、木胎漆器碗である。

34は銅製の紅皿である。法量は口径4.4cm、器高1.6cmを測る。35は灰釉系陶器碗の系譜を引いたと見られる瀬戸美濃窯産の重圈皿で、内面に螺旋状の凹線が巡り、口縁端部は内彎している。土師皿は非ロクロ成形のもの(36)とロクロ成形のもの(37)とが存在する。37は口径12.4cmを測り、体部下端部から口縁部まで直線上に逆「ハ」の字状に開くものである。内面にタールが付着していた痕跡を僅かに残している。38は中国窯産青花碗である。高台の残存形態からいわゆる「蓮子碗」と見られる。見込み部分には草花文らしき文様が描かれている。

39は木胎漆器碗である。外面には黒色漆、内面には赤色漆が塗布され、底部の器厚はやや厚いが、高台は低い。外面には赤色漆で鶴紋と亀紋がそれぞれ描かれている。鶴紋は鶴の羽を複数の細い線で平行に描いており、亀紋は亀の頭・足・尾が表現されている。また底面には十文字状の刻書が施されている。器形や文様形態などから、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第1段階くらいに位置づけられる。

SD18 (第15図・第16図 40～66)

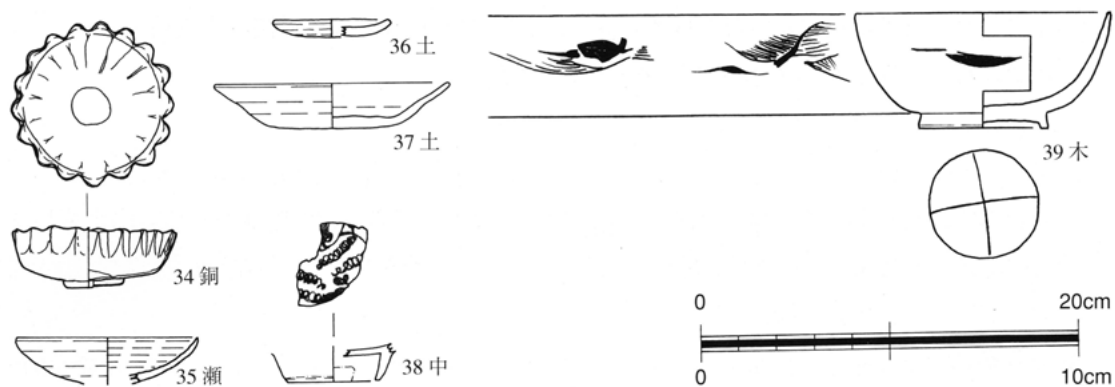
調査区をクランク状に屈曲しながら走る堀割と思われる溝で、SD19を切っている。該期の遺構の中では、最も遺物の出土量が多かった。ここからは、瀬戸美濃窯産の天目茶碗、腰折皿、折縁深皿、播鉢、常滑窯産の甕、中国窯産の青磁碗などの陶磁器類、土師皿、木胎漆器碗をはじめとする生活道具類の木製品などが出土した。

土師皿は、非ロクロ成形のもの(40～47)とロクロ成形(48～50)のものがある。非ロクロ成形の土師皿は、口径が6.0～7.0cmを測り、いずれも底部内面にナデ、体部に強いヨコナデを施している。ロクロ成形の土師皿は、口径が10.0cm～13.0cmを測り、体部下端部から口縁部まで直線的に逆「ハ」の字状に開く。48は口縁端部がつまむようにやや強いヨコナデがされている。41・49には口縁内面に、48には内面全体にタールが付着している。

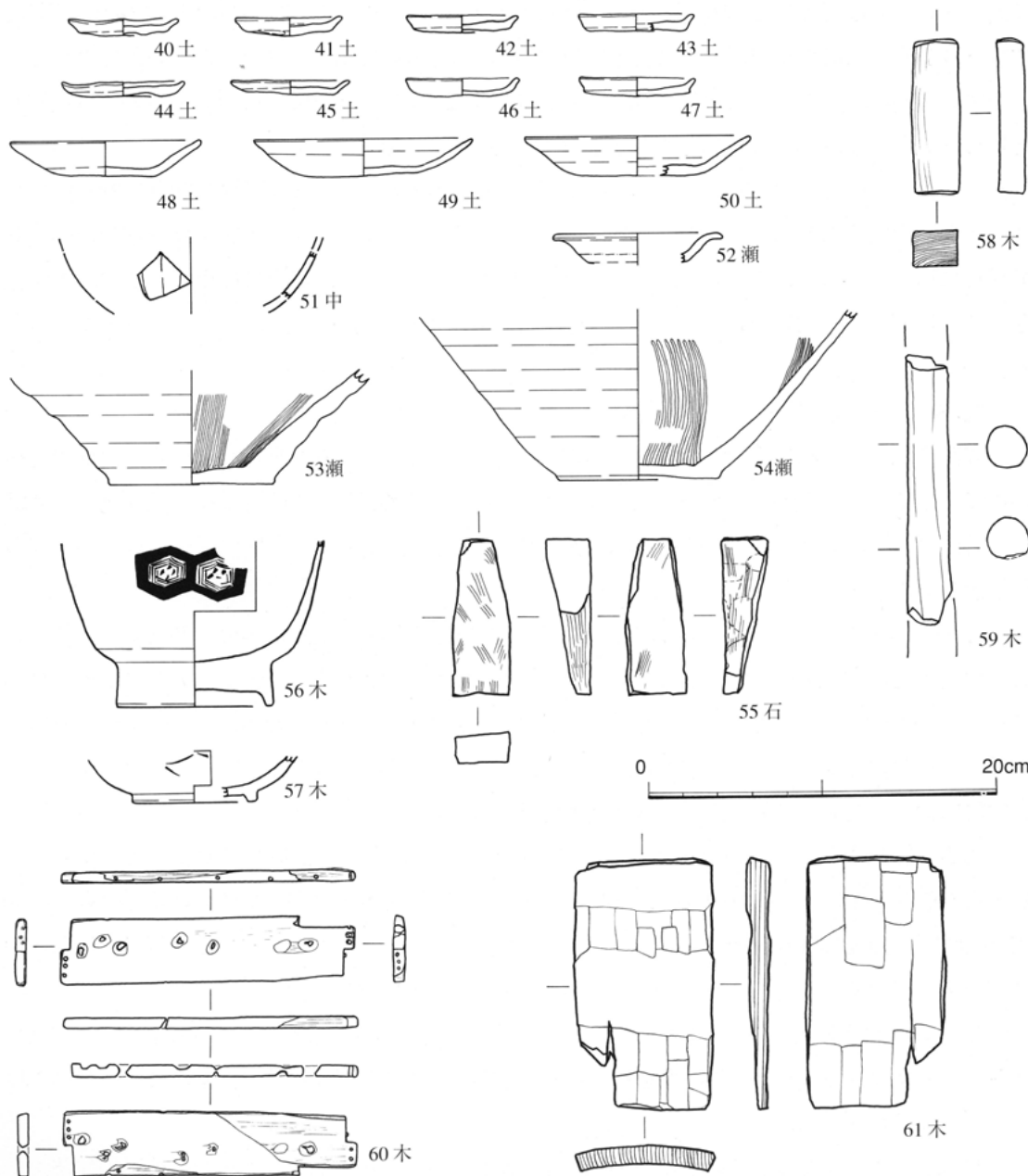
この溝から出土した土師皿は破片数112点を数え、今回の調査では最も多くまとまった資料となった。そのうちロクロ成形のものは101点(90.2%)、口縁部残存率39、非ロクロ成形のものは10点(0.09%)、口縁部残存率45であった。これらの破片数の約91%が、この溝の南西角付近に集中して出土していることから、意図的にこの付近へ廃棄されたと推定される。

51は浮彫状の蓮弁文を施した中国窯産青磁碗である。52は瀬戸美濃窯産の灰釉腰折皿で、古瀬戸後Ⅳ期新段階に属する。53・54は瀬戸美濃窯産の播鉢で、53は古瀬戸後Ⅳ期新段階、54は大窯第1段階に、それぞれ属する。

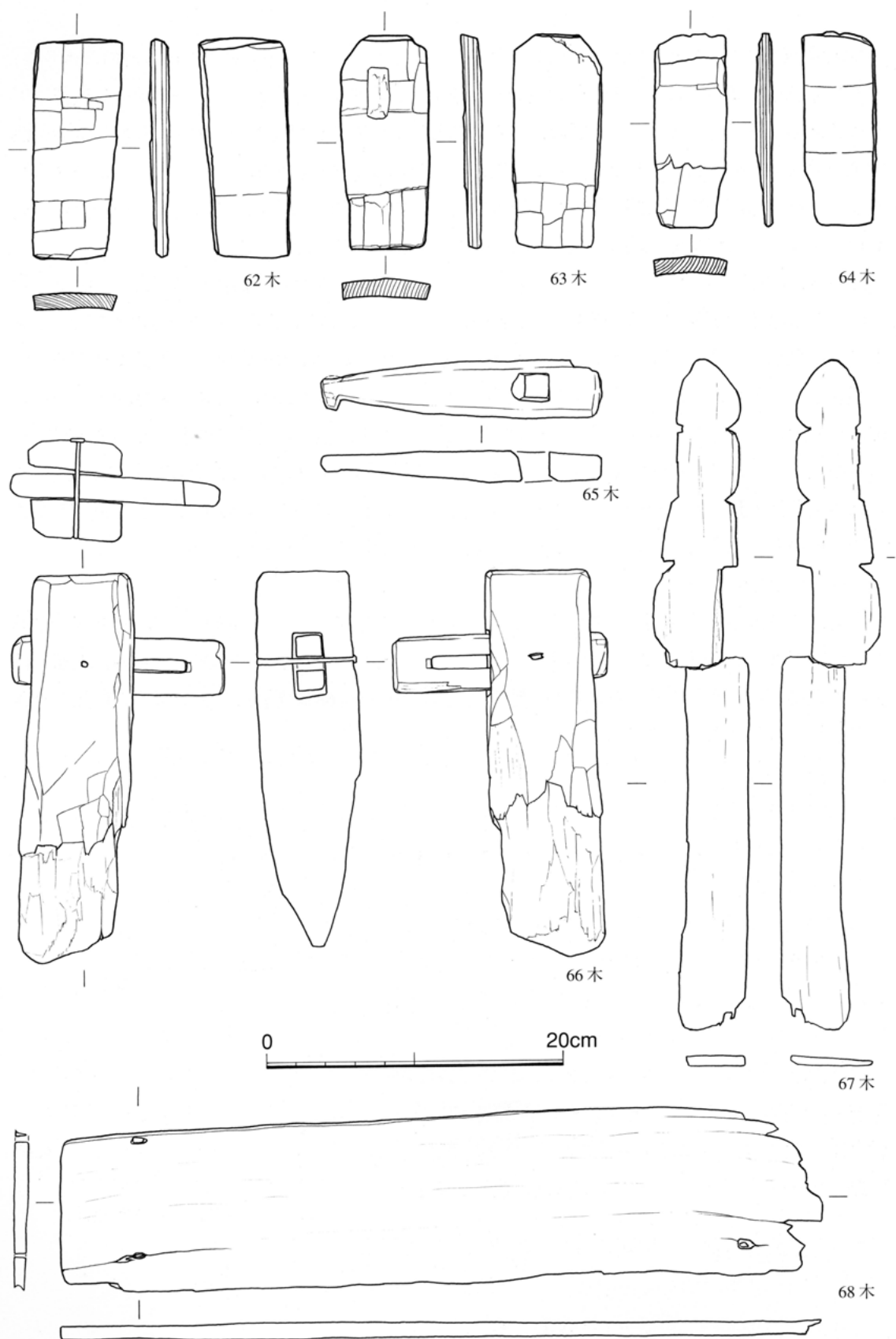
55は砥石で、一部欠損しているが、各面に使用痕が顕著に認められる。部分的に被熱の痕跡が見られる。石材は凝灰岩である。



第14図 96 C区 SD17 遺物実測図 (34は1:2、35～39は1:4)



第15図 96 C区 SD18 遺物実測図



第16図 96 C区SD18・SD20 遺物実測図

木胎漆器碗は3点出土したが、図化できたのは2点(56・57)である。いずれにも外面に黒色漆、内面に赤色漆が塗布されている。56は高い高台をもち、体部はやや直線上に立ち上がる。底部の器厚は体部のそれに比して厚く、断面形態から底部と体部の外側に段差が見られる。外面には赤色漆で亀甲紋が2つ並列された形で描かれ、亀甲紋の中央には4個の点が記されている。器形や文様形態などから、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第1段階くらいに位置づけらる。57は器厚のやや厚い低い高台をもつ。外面には赤色漆で鶴亀紋らしき紋様が描かれている。

58～66は生活道具と考えられる木製品である。59は搗り粉末状の棒状木製品である。60は指物と呼ばれる木箱の板材である。両端には、表面に3ヶ所ずつ、側面に3ヶ所ずつの目釘が打たれ、また長辺の側面の一方にも5ヶ所に目釘が打たれている。61～64は結桶の側板で、外面にタガの圧痕が残存している。この溝からは、結桶の側板は8点出土したが、ほとんどに被熱の痕跡が見られる。65はその形状から、囲炉裏に吊り下げられた自在鉤の高さを調整するために使われる小猿と呼ばれる木製品と思われる。66は用途不明の木製品である。構造は角柱の材に長方形の穴を削り抜き、そこに中央を長方形に削り抜いた小さな板材を差し込み、目釘を打つことによりこの差込板が可動式となっている。備え付けの器械類に付随する調整具の一種と考えられる。

SD20 (第16図 67～68)

調査区のほぼ中央を東西に走る溝で、ここからは瀬戸美濃窯産の天目茶碗、平碗、縁釉皿、播鉢などの陶器類、土師皿、土師器羽付鍋、木製品、が出土した。67は木製の卒塔婆である。表面には文字の痕跡がかるうじて認められるが、判読はできなかった。68は両端に2ヶ所ずつの穿孔がなされた板状木製品である。枹材の1つと考えられる。

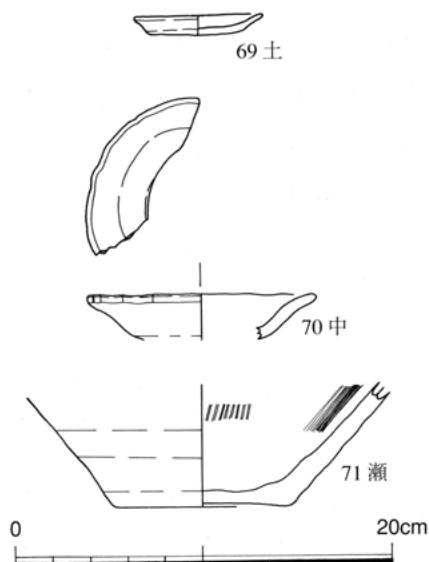
(3) D区

SB01・SD06・SK12 (第17図 69～71)

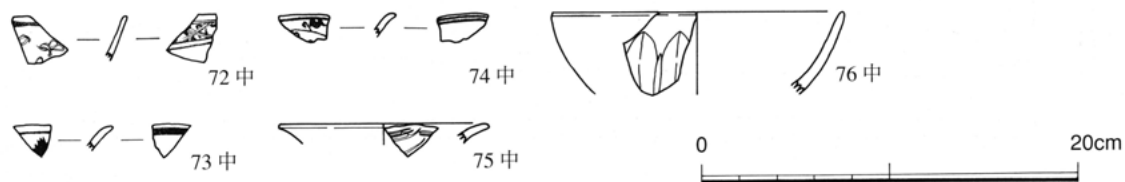
D区では、該期の遺構からのまとまった遺物の出土は見られなかった。

69はSB01の柱穴P7から出土した非ロクロ成形の土師皿で、体部外面のみに強いヨコナデを施している。正立した状態で出土したことから、地鎮のために埋納されたと考えられる。

SD06は堀割と考えられる大溝である。ここからは、中国窯産の青磁稜花皿(70)、瀬戸美濃窯産の重圈皿、卸目付大皿、播鉢、内耳鍋などの陶器類、常滑窯産の甕、土師皿、土師器羽付鍋が出土したが、該期の遺物量はさほ



第17図 96 D区遺物実測図



第18図 貿易陶磁器実測図

ど多くはなかった。

71はSK12から出土した瀬戸美濃窯産の播鉢である。大窯第1段階ないしは第2段階くらいに位置づけられる。

(4) 貿易陶磁器 (第18図 72～76)

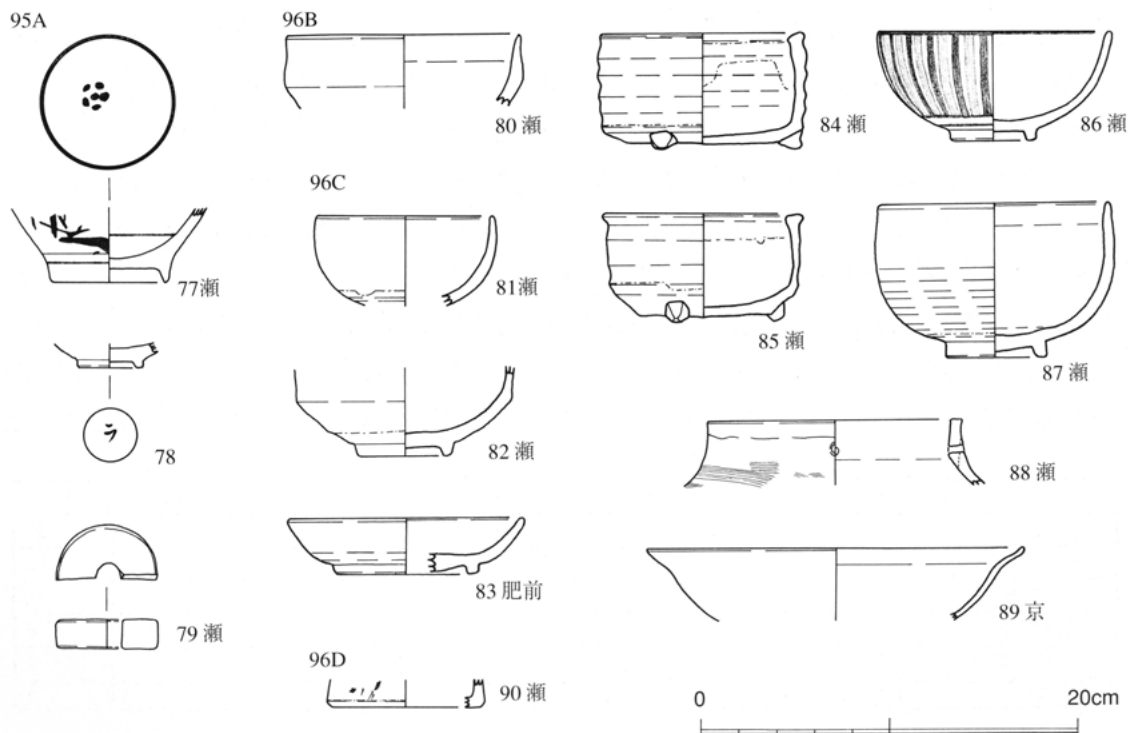
ここでは、今回の調査で出土した貿易陶磁器の破片数8点のうち、遺構外から出土した5点について記述する。出土した遺物には口縁部から体部にかけて残存する良好な資料はなく、すべて破片である。72～74は青花、75～76は青磁で、産地はいずれも中国窯産である。

72は碗。外面体部には毛彫りが施され、内面口縁部に菱格子帯文が描かれている。73・74は端反皿で、外面体部に牡丹唐草文らしき文様が描かれている。75は稜花皿で、口縁部内面に波状文が施されている。76は外面体部に浮彫状の蓮弁文を施した碗である。

3 C期の遺物 (第19図 77～90)

C期の陶器類の総破片点数は、今回の調査で出土した陶磁器のおよそ77%で、B期のそれに比べて器種構成もかなり豊富になっている。中でも、「赤物」と呼ばれる常滑窯産の甕に代表される大形の袋物が最も多くの破片点数を数え、この時期の出土陶器の約37%を占める。しかし、遺構に伴う遺物の量は少なく、多くは遺構外出土のものである。しかも日常雑器類の主体となる碗皿類の残存状況は決して良好とはいえず、どの器種においてもほとんどが破片資料である。

77～79は、A区から出土した遺物である。77は美濃窯産の広東茶碗の底部で、内面底部は丸み



第19図 C期遺物実測図

を持って凹んでいる。連房窯第10小期に属する。78は生産窯地不明の丸碗の底部である。外面底部には「㊦」という墨書がされている。79は戸車である。

80はB区から出土した瀬戸美濃窯産の天目茶碗である。連房窯第2小期に属する。

81～89はC区からの出土遺物である。C区は、数条の近世期の区画溝などの遺構が広く展開しており、当該期の遺物の出土量も調査区全体の中で最も多かった。81は連房窯第8・9小期に属する丸形湯呑茶碗である。SD02から出土した。82は連房窯8小期に属する瀬戸窯産の腰折碗である。83はSD21から出土した18世紀後半くらいに位置づけられる肥前窯産の青磁皿である。84・85は筒型の灰釉香炉である。84は瀬戸窯産で連房窯第8小期に属し、85はSK19から出土した、連房窯第3・4小期に属する瀬戸美濃窯産である。86は瀬戸窯産丸碗で、外面体部は麦藁手文様が施されている。連房窯第8小期に属する。87はSD02から出土した瀬戸窯産の灰釉丸碗で、連房窯第8・9小期に属する。88は羽付釜の口縁部で、口縁部に穿孔がされており、口縁部内外面にはタールの付着痕が見られる。SK19出土。89は関西系窯産陶器の鉢である。

D区では、SD01から碗皿類の小型製品から「赤物」などの大型製品にいたる陶磁器類、瓦など多くの遺物が出土した。この溝から出土した90は、連房窯第1小期に属する瀬戸美濃窯産の織部向付である。

4 その他の遺物

A 加工円盤（第23図・第24図 91～162）

陶器の破片を素材としてそれに加工を施した陶製品のうち、多角形に打ち欠き円形状に成形した小型製品を、「加工円盤」としてここで取り扱う。なお天目茶碗によく見られるような、底が丸く抜けてしまったため自然に円形にできあがった可能性があるものについては除外した¹⁾。

本調査で出土した加工円盤は71点で、材質は、瓦2点を含め、すべて陶器を使用している。これらの資料を、1) 素材、2) 加工技法、3) 法量、の3項目について観察、測定を行った²⁾。

1)素材 素材となっている陶器を器種別に見ると、碗類、皿類、鉢類、播鉢、壺類、甕類、常滑窯産の赤物などの大型製品、瓦、器種不明の9種類に分けられ、このうち69%に当たる49点が鉢類、播鉢、壺類、甕類、大型製品、といった器厚が比較的厚い器種を用いている。使用されている部位は、口縁部を含めた体部を転用する場合(63点)と高台部を含めた底部を転用する場合(8点)の2つの場合がある。これら陶器の産地については、瀬戸窯産27点、瀬戸美濃窯産23点、美濃窯産

	碗類	皿類	鉢類	播鉢	壺類	甕類	大型製品	瓦	器種不明	計
瀬戸窯産	6		2	16		3				27
瀬戸美濃窯産	7	1	4	6	1	2	1		1	23
美濃窯産	5		4		3			1		13
常滑窯産					1	4	1			6
産地窯不明				1				1		2
計	18	1	10	23	5	9	2	2	1	71

第6表 産地別加工円盤転用器種分類表

13点、常滑窯産6点、産地窯不明2点であった(第6表)。また所属時期は、近世(連房窯期)のものが60点と最も多く全体の84.5%を占めており、他、中世2点、古瀬戸後期～大窯期4点、時期不明5点、というように分けられた。

2) 加工技法 周縁部を打ち欠いたものと、その破面をさらに研磨しているものとの2つのタイプが見られる。周縁部の打ち欠きについては、破面の観察から、①陶器の内側から加撃をした後、②陶器の外側から加撃をし、整形をする、という一定の工程があったものと推定される。研磨痕については、周縁部の一部に見られるもの(92・102・143・158・160・161)と、全周を研磨しているもの(94・96・111・116・119・127・147・159)とがあり、体面にも研磨痕が見られるもの(102・137・146)もある。周縁部に研磨を施したものは全体の約20%程度にあたる14点しか出土していないことから、円く整形するために破面に研磨を施したのではなく、搗り具のような別の用途に用いられた結果として、より正円に近い円盤状に成形されたとも考えられる。

3) 法量 法量は、長径・短径・重量について測定した。長径・短径の計測は、転用された部位の上下位置を定めたのち、中心点を通る最長線を基準線とし、便宜上、基準線に直交する線間の最大値を長径、平行する線間の最大値を短径とした。重量測定は電子計量器を使用し、小数点第一位を有効数値とした。

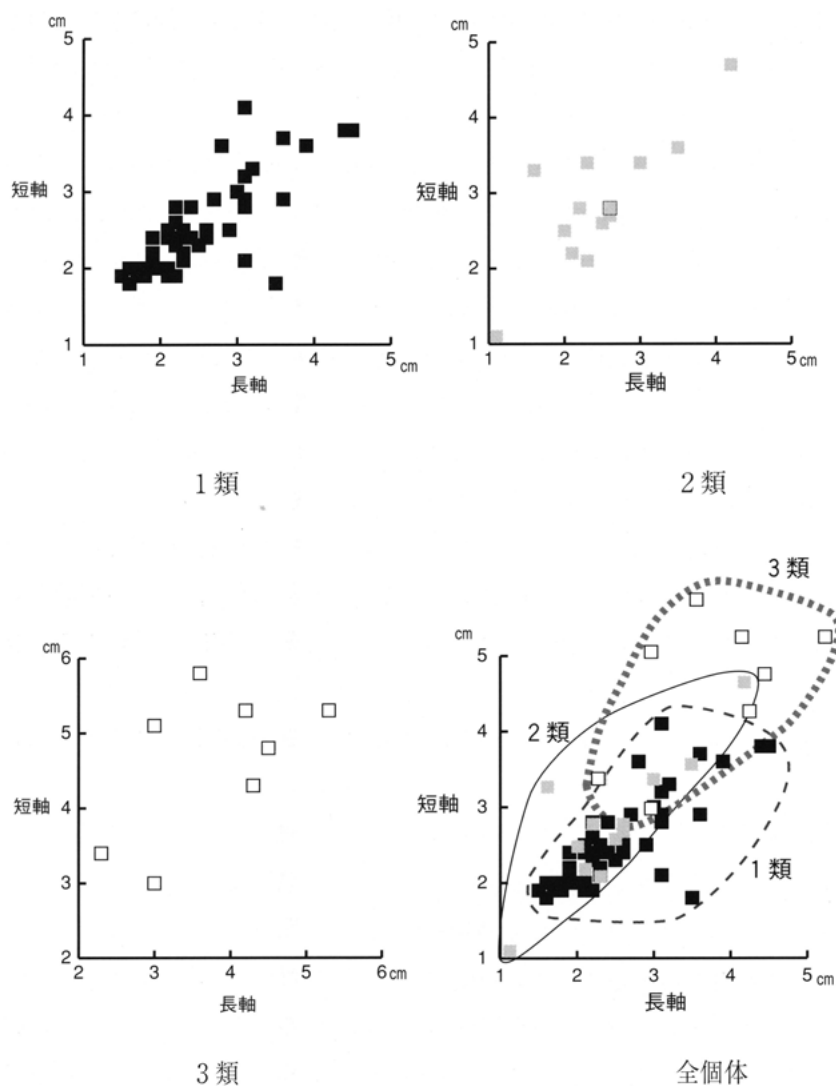
以上述べた素材からの転用された部位と、加工技法の組み合わせから、当該資料は次のように類別される。

- 1類 陶器の体部を転用し、周縁部は打ち欠きよる整形だけにとどまる。
- 2類 陶器の体部を転用し、周縁部は打ち欠きによる整形を行った後、研磨を施す。
- 3類 陶器の底部を転用し、周縁部は打ち欠きによる整形だけにとどまる。
- 4類 陶器の底部を転用し、周縁部は打ち欠きによる整形を行った後、研磨を施す。

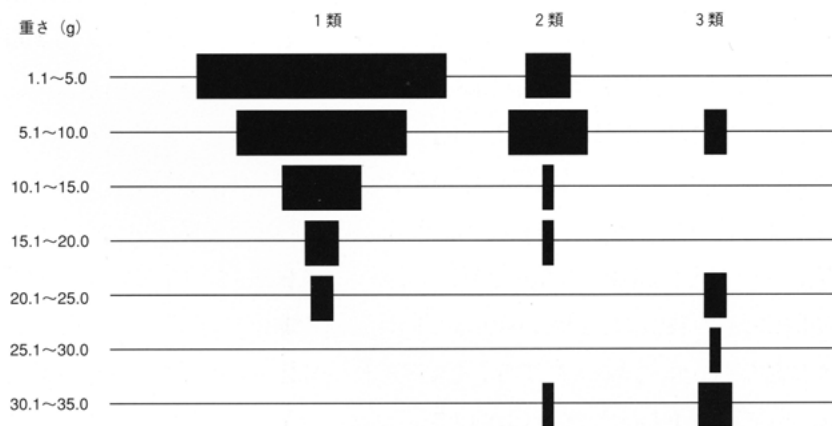
これらの分類に該当する資料点数は、1類49点、2類14点、3類8点となり、4類についての該当資料は見いだせなかった(第7表)。以下、これらの分類に基づいて、規格・素材について述べていく。

1) 規格 分類毎に計測値の分布を見ていくと、1類は長径、短径ともに2.1～3.0cmの範囲を中心に、1.1～3.0×1.1～3.0cm以内に数が集中する。長幅比(長径/短径)は1.01である。重量は4.1～5.0gを中心に広がるグループと、8.1～11.0gに広がるグループとの2つのピークが見られる。2類は長径、短径ともに2.1～3.0cmに大きなピークがあるが、長径は2.1～4.0cmに、短径は1.1～3.0cmに数が集中する。長幅比は1.15と、1類に比べ、多少のバラツキが見られる。重量においても4.1～5.0gと8.1～9.0gとに小さなピークが見られるが、全体としてのバラツキは大きい。これらの点から1類に比べてやや大型化する傾向が窺える。3類は長径5.1～6.0cmにピークをもち、短径は2.1～3.0cmと4.1～5.0cmとに小さなピークが見られ、長幅比は1.22である。重量も20g以上に6点が集中する。類別に見ていくと、1・2類は大きさが1～5×1～5cm以内に収まり、重量平均でも1類が7.5g、2類が9.7g、と共に10g未満であることから、小型製品としてグループ化をすることができる。これに対し、3類は大きさが2～6×2～6cm以内とやや大形であり、重量平均も23.2gであることから、資料中最も大型のグループであるといえる。(第20図・第21図)

2) 素材 1類では1.1～10.0gの領域に、49点中37点が分布する。転用された陶器では搗鉢が



第20図 加工円盤 法量共変図



第21図 加工円盤重量分布図

第7表 加工円盤 類別表

遺物番号	類別
91	○
92	●
93	○
94	●
95	○
96	●
97	○
98	○
99	○
100	○
101	○
102	●
103	○
104	○
105	○
106	○
107	○
108	○
109	○
110	○
111	●
112	○
113	◆
114	○
115	○
116	●
117	◆
118	○
119	●
120	○
121	○
122	○
123	○
124	○
125	○
126	◆
127	●
128	○
129	○
130	○
131	◆
132	○
133	○
134	◆
135	○
136	○
137	○
138	○
139	◆
140	○
141	○
142	○
143	●
144	○
145	◆
146	○
147	●
148	○
149	○
150	○
151	◆
152	○
153	○
154	○
155	○
156	○
157	○
158	●
159	●
160	●
161	●

○=1類 ●=2類 ◆=3類

最も多く、5.1～10.0 gを中心に広く分布している。鉢類、壺類、甕類も擂鉢とはほぼ同様の分布領域を示す。また碗類は1.1～5.0 gの領域にほとんどの点数が集中する。2類でも重量分布は1類とさほど変わらないが、転用されている陶器に碗類は選択されていないようである。研磨を行うには器厚の厚い器種が素材としてより適していたためであろう。逆に3類では碗類、皿類といった、比較的小形で器厚の薄い器種が使用され、擂鉢や甕などの器種は使用されていない。底部の高台を表面に残しながら、その輪郭にほぼ沿うような形で、円形に成形していることから、高台をもたない器種は適用できない素材として用いられなかったと考えられる。1・2類では、使用されている器種は比較的重量のある大形のものであるが、小規格で軽量の加工円盤として転用されている。しかし、3類では、軽量の器種である碗類・皿類が用いられているが、1・2類に比べて約2倍ほどの重さがある。このことから、素材から転用される陶器の部位の加工技法によって、加工円盤の大きさや重量が規制されていることがいえる。また、素材となる器物が使い込まれた後に円盤形の製品として加工をされたことを示す例³⁾は、擂鉢以外には見いだせなかった(第22図、第8表)。

毛受遺跡の加工円盤は、陶器の体部を用いるものを主体とし、周縁部を円形に打ち欠いて整形しただけの1類が最も多く、他の遺跡で多く見られるような、打ち欠いた周縁部を研磨して整形した2類は、あまり出土していない。他方、灰釉系陶器を用いた加工円盤において特徴的に見られる形態である高台部を利用した3類は少量しか見られなかった。加工円盤の素材となる器種やその部位について、意図的な選択がなされていたかどうかは、他の遺跡の資料の様相ともあわせて、今後さらに検討を要するところでもある。

使用時期は、遺構からの出土が少なく必ずしも特定できない。しかし、使用(転用)されている陶器から、資料の多くが近世の段階に製作されたと考えた方が妥当であろう。

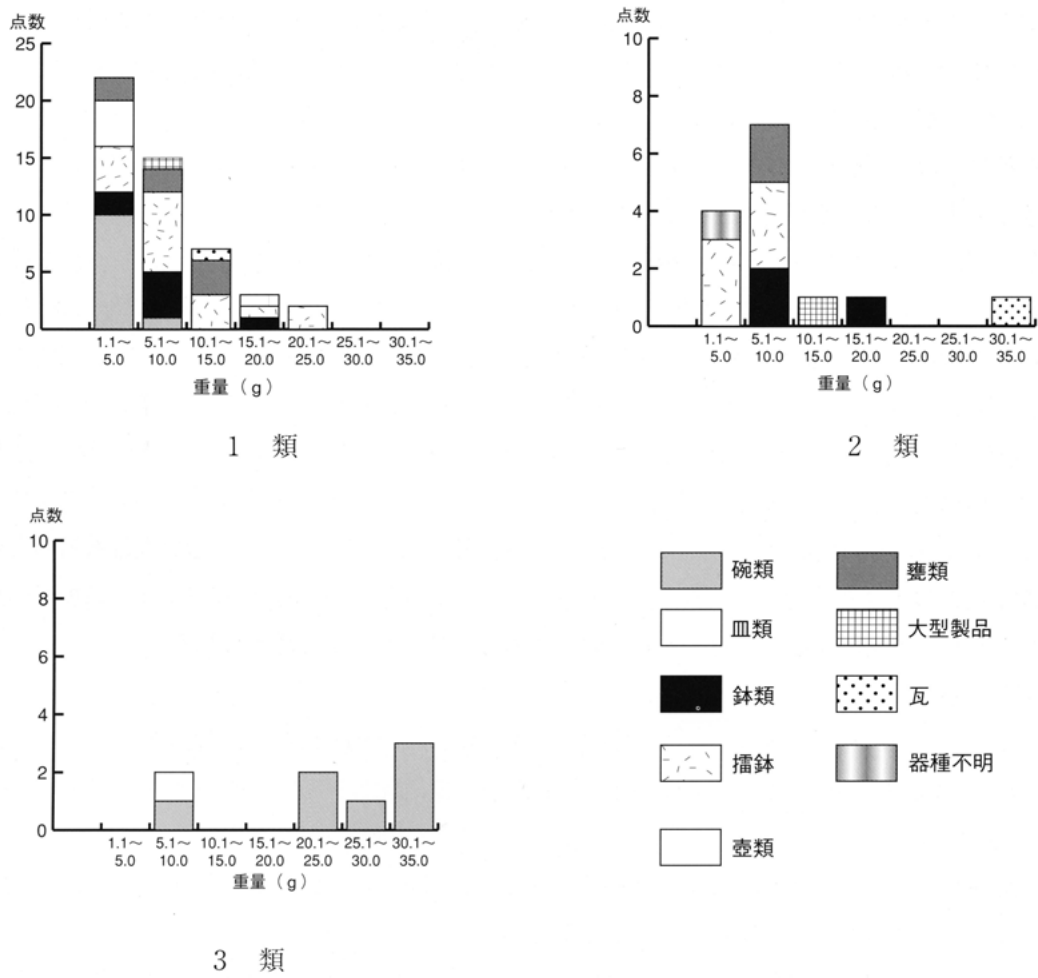
加工円盤については、計量具、飛礫(つぶて)、「おはじき」「石蹴り」などの遊戯具の一種、祭祀具といったように、さまざまな用途が考えられている⁴⁾。資料の観察から、成形の際の加撃にも、内面から行った後、外面から行うという一定の工程を経ていたと見られることから、意図的な企画に基づいた一つの道具として製作されたと考えることができる。また出土地点を空間的に復元すると、居住空間を区画する溝や井戸といった、境界を示す遺構の付近からの出土が最も多く、さらに溝からの出土地点を見てみると、居住区側にあたる内側からの例が多い(第29図)。この点については、当該期の清洲城下町遺跡や、その周辺の外町遺跡などにも見られ、中世の灰釉系陶器を用いた加工円盤の場合と共通している⁵⁾。これらのことから、戦国期から近世においても、加工円盤は境界の外からの悪霊や悪穢に対する除災のための呪術具であったと考えられる。

<注・参考文献>

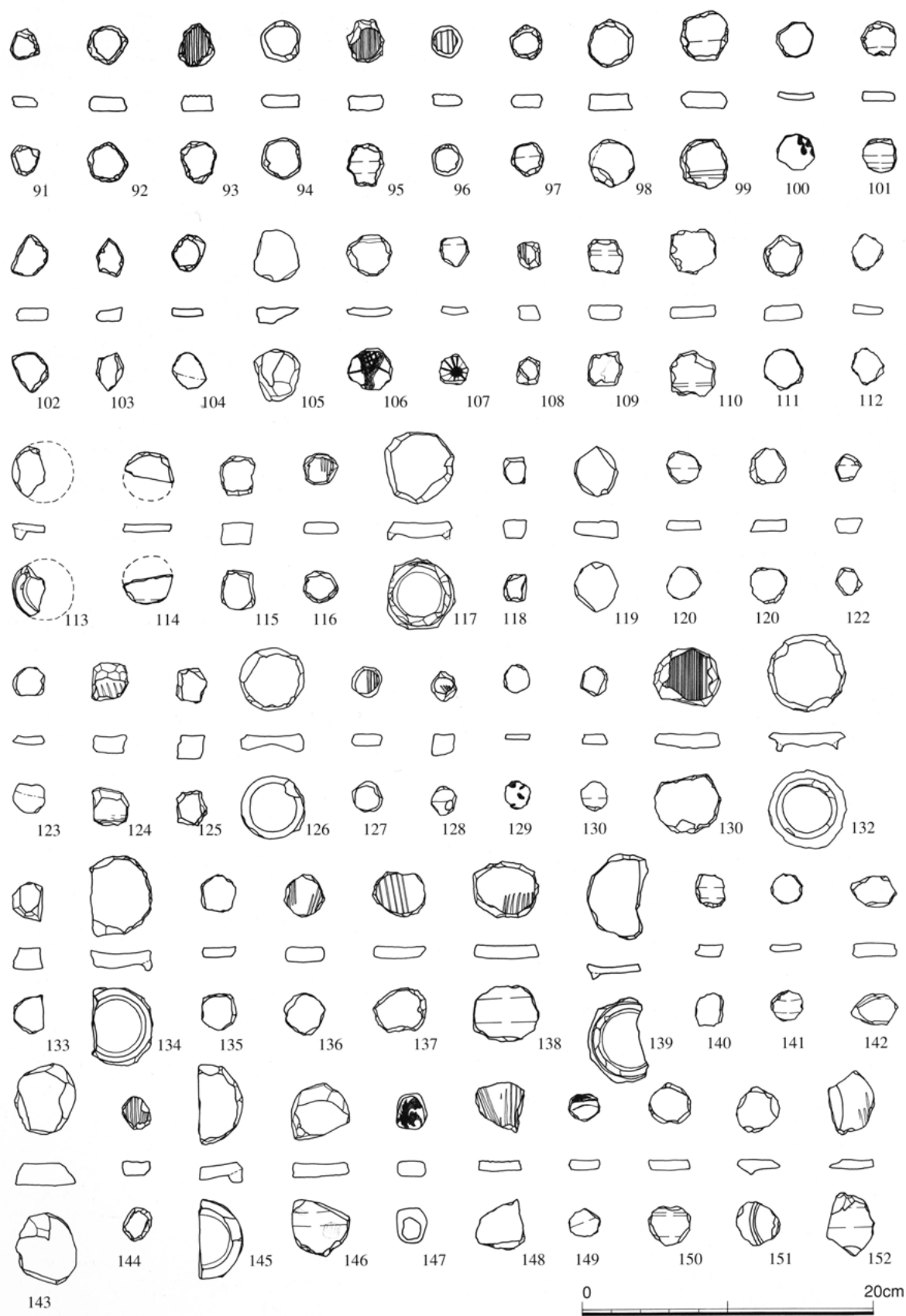
- 1) この点については、「天目茶碗の成形に起因するのであって、意図したものとは言えない」とする説にしたがった。(岡本直久 1998 「加工円盤」『上品野蟹川遺跡』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第16集)
- 2) 渡邊康行氏の分類を参考にした。(渡邊康行 1986 「加工痕を有する陶・磁器」『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会)
- 3) 例えば、一宮市に所在する大毛池田遺跡などに見られる。(八木佳素美 1997 「c.加工円盤・陶丸」『大

	重量 (g)	碗類	皿類	鉢類	播鉢	壺類	甕類	大型製品	瓦	器種不明	計
1 類	～5.0	10		2	4	4	2				22
	5.1～10.0	1		4	7		2	1			15
	10.1～15.0				3		3		1		7
	15.1～20.0			1	1	1					3
	20.1～25.0				2						2
	25.1～30.0										0
	30.1～35.0										0
2 類	～5.0				3					1	4
	5.1～10.0			2	3		2				7
	10.1～15.0							1			1
	15.1～20.0			1							1
	20.1～25.0										0
	25.1～30.0										0
	30.1～35.0								1		1
3 類	～5.0										0
	5.1～10.0	1	1								2
	10.1～15.0										0
	15.1～20.0										0
	20.1～25.0	2									2
	25.1～30.0	1									1
	30.1～35.0	3									3
4 類	～35.0	該 当 資 料 な し									0
計		18	1	10	23	5	9	2	2	1	71

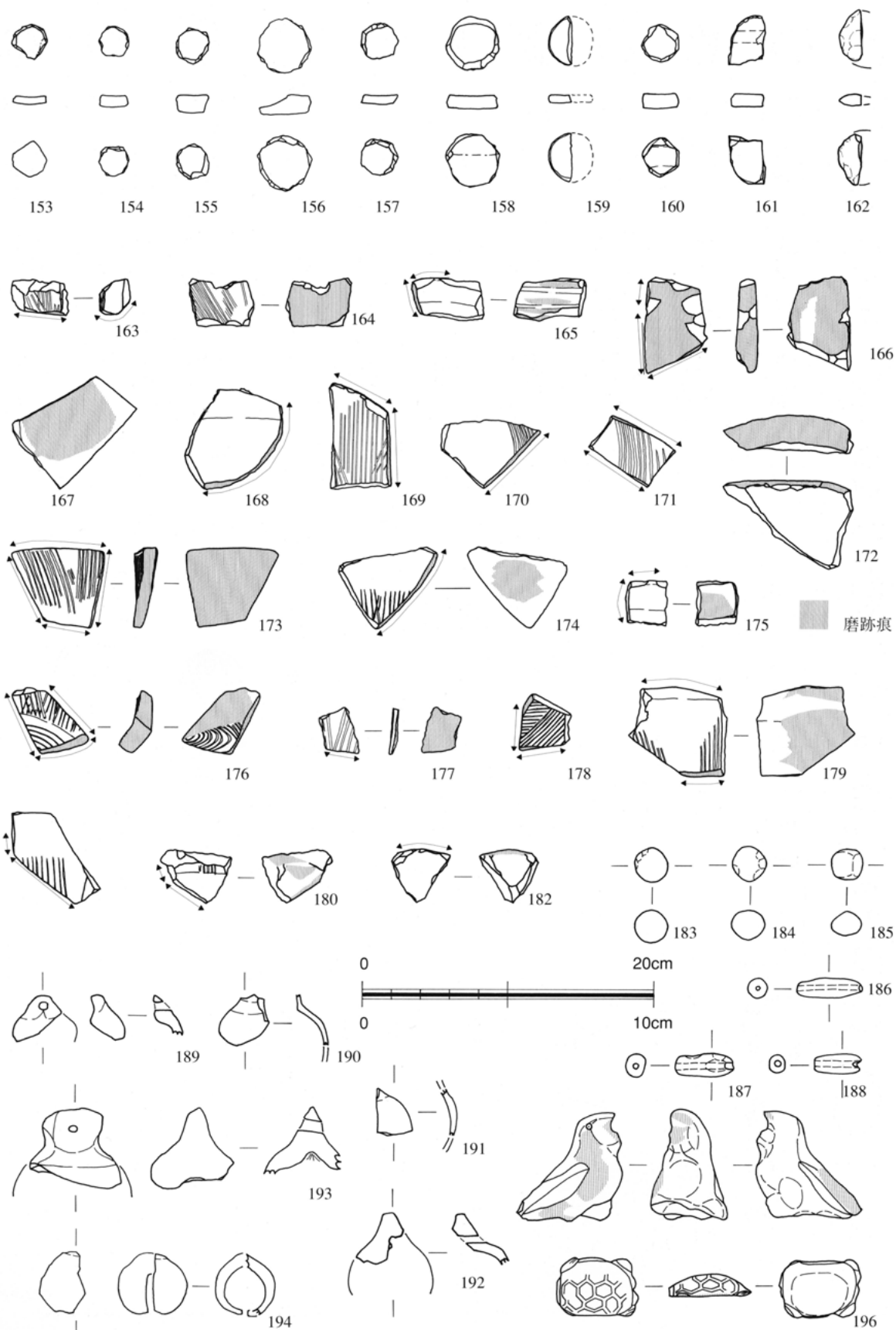
第 8 表 加工円盤 重量別転用陶器分布表



第 22 図 加工円盤 重量別転用陶器分布図



第23図 その他の遺物実測図(1)



第24図 その他の遺物実測図(2) (189~196は1:2、そのほかは1:4)

毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第72集)

なお筆者が『考古学フォーラム』9(1998)において発表した「加工円盤について」の中で『大毛池田遺跡』中の「c.加工円盤・陶丸」を参考にしたが、この文責は岡田智子氏ではなく、八木佳素美氏の誤りであったことを、この場を借りて訂正しておく。

- 4) 本稿でいう加工円盤の用途については、川吉謙二氏の論考が参考となる。

川吉謙二 1996「土製円板小考」『紀要』創刊号 (財)のぎじく文化財保護研究財団

また、加工円盤のような「小型円板」の付着物の観察から、灯明具として認定しうるものがあるとの指摘もされている。

山口 格 1997「2.陶磁器の2次加工品について - 「小型円板」再考」『四ツ野C遺跡発掘調査報告』津市教育委員会・津市埋蔵文化財センター

- 5) 拙稿 1998「加工円盤について」『考古学フォーラム』9 考古学フォーラム

B 土製円盤 (第24図 162)

土師質の円盤状土製品である。手捻りで成形した後、表面をナデ調整している。C区SD11から出土した。

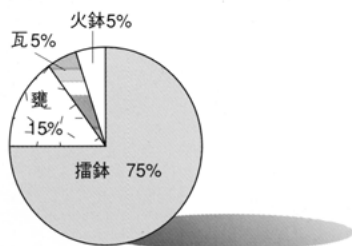
C 擦り痕を有する土器 (第24図 163～182)

陶器の破片の一部に二次的な擦り痕が見られる土器を、「擦り痕を有する土器」として、ここで取り扱う。

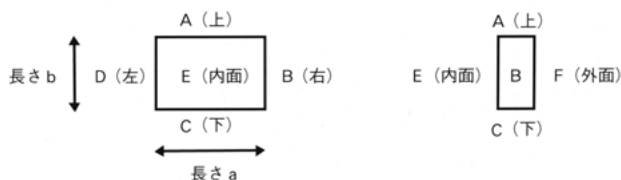
今回の調査では20点が出土した。材質は瓦を用いたものが1点、他はすべて陶器を使用している。これらの資料を、1) 素材、2) 痕跡、3) 法量の3項目について観察、測定を行った。

1) 素材 素材となっている陶器は、擂鉢が15点と最も多く、甕が3点、瓦と火鉢が各1点を数え、いずれも器厚が比較的厚い器種が用いられている。転用されている陶器の部位には口縁部(172)、体部(163～175・178～182)、底部(176)がある。これらの陶器の産地は、瀬戸窯産13点、瀬戸美濃窯産5点、常滑窯産は1点、生産窯不明1点であった(第25図)。またこれらの所属時期も、168が大窯期に属する以外は、すべて近世(連房窯期)に属する。

2) 痕跡 使用された陶器片の面を6区画に設定し(第26図)、擦られた痕跡の有無を観察した。その結果、6面すべてに痕跡をもつ土器は見られなかった。5面に痕跡が見られたのは3点で、以下



第25図 転用土器割合



第26図 擦り痕を有する土器部位名称

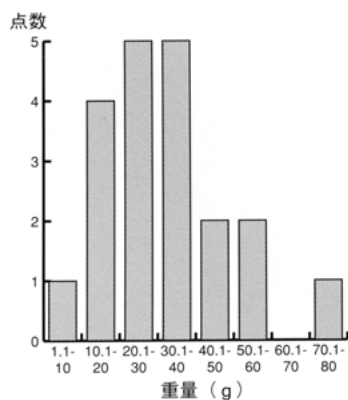
遺物番号	擦り痕部位
163	C
164	F
165	A・D・F
166	A・B・D・E・F
167	F
168	B
169	A・B
170	B
171	A・C
172	A
173	A・B・C・D・F
174	B・F
175	A・B・F
176	A・B・C・D・F
177	C・F
178	A・C・D
179	A・F
180	B・C
181	A
182	B・C・D・F

残存部位

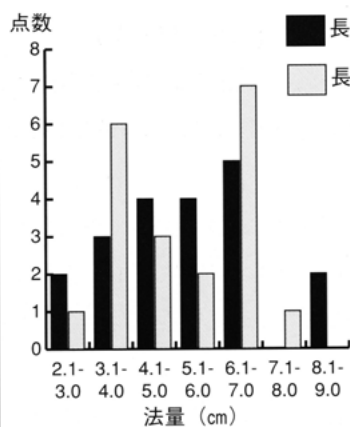
面数	点数
1面	7
2面	6
3面	3
4面	1
5面	3
6面	0
計	20

残存面数

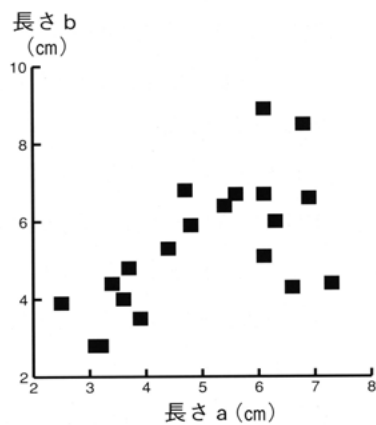
第9表 擦り痕残存状況一覧表



第28図 擦り痕を有する土器重量分布図

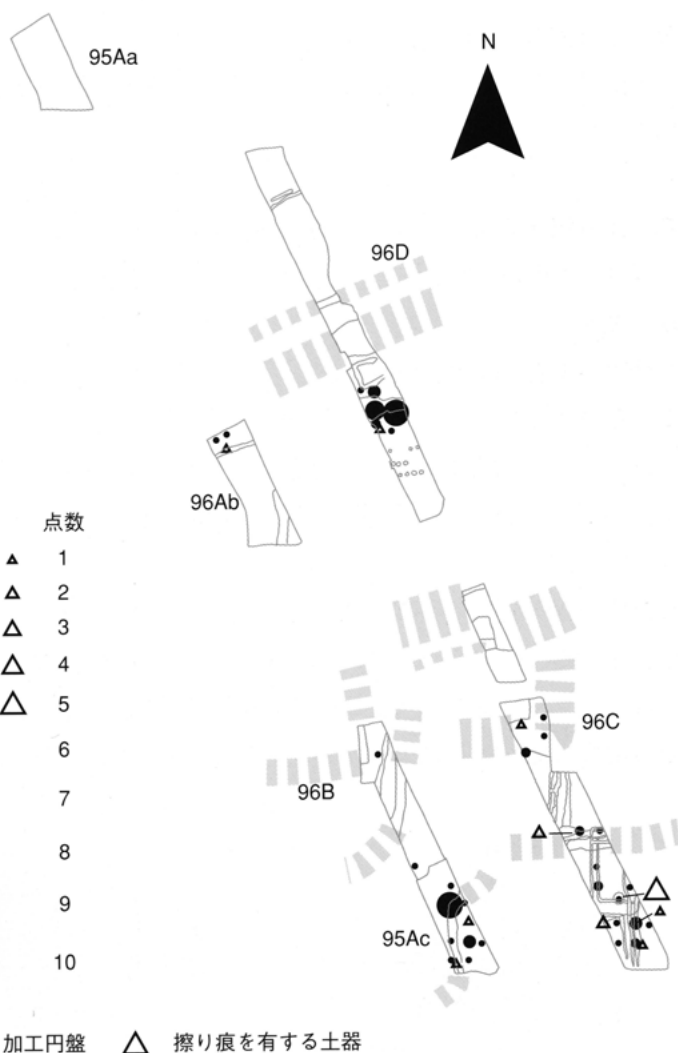


法量分布図



法量共変図

第27図 擦り痕を有する土器法量図



第29図 加工円盤・擦り痕を有する土器出土分布図 (1:2000)

4面1点、3面3点、2面7点、1面6点である。陶器の表面にのみ擦り痕が見られるのは167だけで、それ以外のものは側面のいずれかに擦り痕が見られた（第9表）。

3) 法量 長さ・重量について測定した。資料のほとんどは不整形であるため、長さについては、使用されている陶器片の上下位置を定めたのち、最長辺をそれぞれ基準線とし、基準線に平行する線間の最大値を長さa、直交する線間の最大値を長さbとした。重量測定は電子計量器を使用し、小数点第一位を有効数値とした。

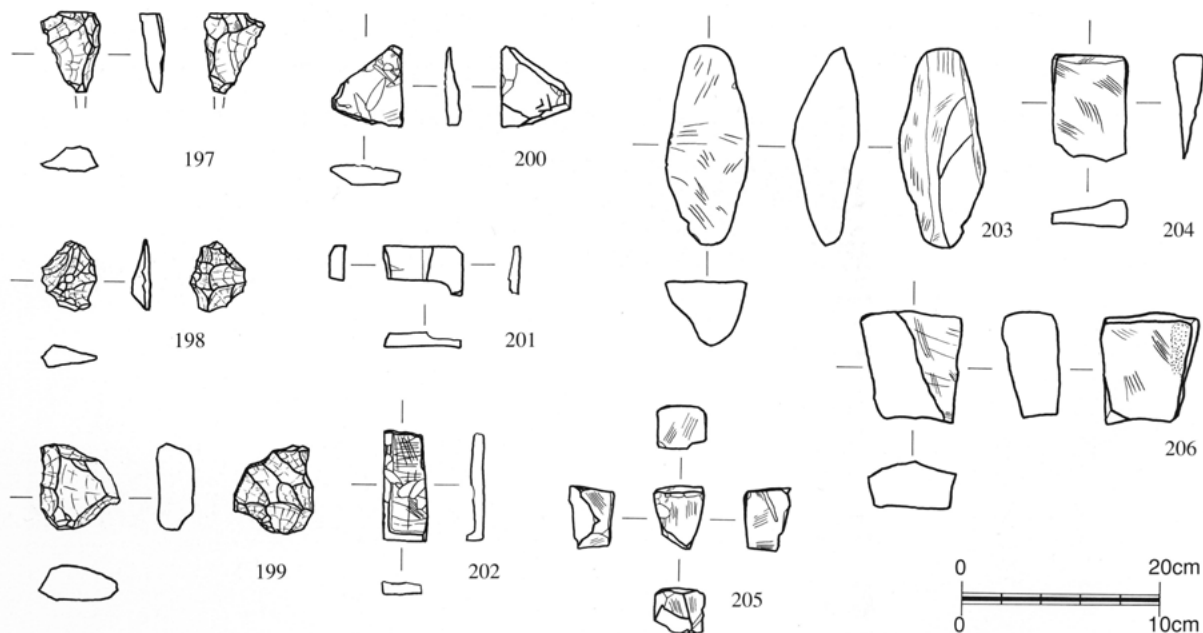
「擦り痕を有する土器」の長幅比（長さa／長さb）は1.07であるが、長さbでは3.1～4.0cmと6.1～7.0cmとにピークが見られる（第27図）。また重量では、20g～40gの間に全点数の半数が集中している（第28図）。

これらは、C期の居住区域と見られるC区の溝や井戸などから多く出土しており（第29図）、また素材として使用されている陶器の時期から、近世（連房窯期）に属すると見られる。

陶器の破片に二次的な加工痕が見られる点では加工円盤と同様であるが、加工円盤が陶器片の周縁を打ち欠いて円形状に成形を行っているのに対し、「擦り痕を有する土器」では規格化した形状には整えられず、擦られている箇所あるいは面数もバラバラで統一性は見られない。このことから、企画性をもって二次的な加工を受けたとは考えにくい。また擦り痕が器厚の比較的厚い陶器にのみ見られることなどから、使用される陶器についてはある程度の選択がなされていたと思われる。したがって、適当な大きさの破片を砥石のような擦り道具として用いられたと考えられる。

D 陶丸・土玉（第24図 183～185）

球状に成形された灰釉系陶器質の製品である陶丸は、2点（183・184）出土した。大きさは直径2.3cmほどで、重量はともに11.9gであった。土師質の土玉（185）は、2点出土した。大きさは陶丸とさほど変わらないが、重量は陶丸の約1/2となる。



第30図 石製品実測図（197～199は1：2、そのほかは1：4）

E 土錘 (第24図 186～188)

出土した3点の土錘は、いずれも土師質の管状土錘である。孔径は、186が0.5mm未満とやや狭い。また重量は、いずれも10g未満と軽量である。

F 土鈴・土人形 (第24図 189～196)

土鈴は調査区全体で8点出土したが、いずれも破片である(189～194)。紐部分の残片が、巾着状にたたみ込まれるもの(189)、角状に振り上げられるもの(192)、方形を呈するもの(193)、とに分けられることから、複数の形態があったと見られる。(紐の分類については『清洲城下町遺跡V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第54集に依った)

土人形は2点出土した。195は鳥を象ったもので手捻りで成形されている。196は亀を象ったもので型成形後、裏面を指オサエ調整している。

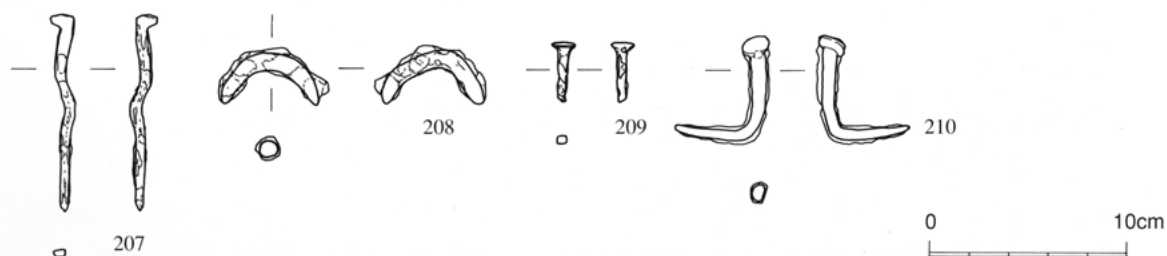
G 石製品 (第30図 197～206)

今回の調査で出土した石製品は石器を含めて14点である。石材の材質鑑定はすべて肉眼でおこなった。197は下呂石製の石錐の頭部、198は縁辺に微小剥離が認められるチャート製の剥片石器である。199は燧石で、表面観察から養老山系で産出されるチャートである。D区SD01から出土した。200～202は96C区から出土した硯で、石材はいずれも凝灰質泥岩である。203～206は砥石で、いずれにも各面に使用痕が顕著に見られる。B区から出土した203は凝灰質泥岩で、被熱痕跡が見られる。C区から出土した204は凝灰質泥岩、205・206は凝灰岩である。

H 金属製品 (第31図 207～210・図版17 211～216)

207～210は、いずれも鉄製の釘である。208は、その形状から、鏝のようなものと見られる。

銅製銭貨は6点出土した。このうち、銭種が特定できるのは3点で、211は「祥符元寶」、212は「元符通寶」、213は「寛永通寶」である。211と212は、本来の初鑄年が中国の北宋時代(1008年と1098年)であることから、中世に流通した輸入銭であろう。214は欠損が著しく、また215、216は同種の銅銭である。いずれも銭種を特定することはできなかった(215・216は「□元通寶」と読めるか)。216は埋没環境によって2枚の銅銭が重なり合っている。これらの銭貨は、検出段階での出土であるため詳細は不明であるが、中世のある時期からこの付近でも貨幣が使用(流通)されていたことを窺わせるものといえる。



第31図 金属製品実測図

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 毛受遺跡及び、周辺の遺跡出土の中世土師器の 蛍光X線分析

奈良教育大学

三辻 利一

1. はじめに

伊勢の斎宮近くにある北野遺跡には古代の土師器窯跡が多数発見されている。ここから出土する土師器は変を大量に分析した結果、窯跡出土須恵器や埴輪と同様、K-Ca、Rb-Srの両分布図で集中して分布することがわかった。このことは窯生産で古代土器を集中して焼成する場合には、素材粘土も一定の場所で集中して採取していることを示唆している。

ところが、一般的に、消費遺跡から出土する土師器を胎土分析すると、かなりばらつく場合が多い。このことは須恵器に比べて手軽に製作が出来る土師器は製作している場所も多く、あちこちから供給されるためであろうと推察されてきた。しかも、ほとんど場合、製作場所（窯跡）は残っていないので、土師器の産地問題の研究はきわめて難しい、中世の土師器といえども、同様である。

しかし、元素分析のデータから何も情報が得られないかというと、そうではない。同時期の近辺の遺跡から出土する土師器の胎土を比較することによって、少しではあるが土師器の生産と供給に関する情報は得られる。

このような考え方から、毛受遺跡から出土した中世は時期の分析データと比較し、その生産と供給について考察した結果について報告する。

2. 分析結果

今回分析した全資料の分析値は表1にまとめられている。このデータに基づいて、K-Ca、Rb-Srの両分布図を作成し、各遺跡出土土師器の化学特性を比較していく訳であるが、どの遺跡の土師器を比較対照資料に選択するかである。ここでは分析資料数のもっとも多い、毛受遺跡の土師器を対照資料とすることにした。そこで、毛受遺跡の土師器が両分布図で集中して分布し、まとまるかどうかである。図33には毛受遺跡の土師器の両分布図を示す。T-6、8の2点を除いて他の土師器はまとまって分布しており、同質の胎土を持つ土師器と考えられる。これらをすべて包含するようにして、毛受領域を描き、比較対照のための領域とした。表9をみると、T-6はNa因子でも他の土師器と異なっており、外部からの搬入品である可能性を持つ。T-8もCa、Sr量が少ない点で異質の胎土である。そうすると、他の13点の土師器はNa、Fe因子でも類似しており、同一産地の製品であると考えられる。ロクロ成形、非ロクロ成形の技法の問題は胎土には無関係のようである。同じと

ここで両方の技法で土師器を製作したと推察される。このようにして、毛受遺跡の土師器は大部分のものが技法に関係なく同じ胎土をもつところから、比較対照のための資料としては適していることがわかる。もし、これらがまとまらずに、ばらばらに分布すると、つまり、あちこちから持ち込まれた土師器の集団であると、とても比較対照の資料としては使えなくなるからである。次に、同時期の他の遺跡から出土した土師器の胎土を毛受遺跡のものと比較してみた。

図34には大毛池田遺跡出土土師器両分布図を示す。毛受領域内に分布するものは1点もないことがわかる。したがって、大毛池田遺跡の土師器は毛受遺跡の土師器とは別の場所で製作されたものであると考えられる。T-18を除く、他の4点の土師器の胎土は類似しており、同一産地の製品である可能性が高い。しかし、T-18はNa因子でも他の4点とは異なっており、別産地の製品であろう。この遺跡でも、ロクロ成形、非ロクロ成形の土師器形成技法は胎土とは関係がないことがわかる。

次に、16世紀前半と推定される岩倉城遺跡出土土師器の両分布図を図35に示す。すべての資料はよくまとまって分布しており、同一産地の製品であることを示している。しかも、ほとんどの資料が毛受領域に分布しており、Na、Fe因子でも毛受毛受遺跡出土土師器胎土に類似しているところから、その産地は近接しているものと推察される。

次に、清洲城下町遺跡(T)63E(以下、清洲城下町遺跡63Eと表記)出土の土師器の両分布図を図36に示す。T-27、29の2点を除く3点の資料(T-26、28、30)は全因子で類似しており、同一産地の製品である。T-26は非ロクロ成形であり、T-28、30はロクロ成形である。ここでも、ロクロ成形の技法は胎土とは無関係である。そして、同一産地の製品とみられるT-26、28、30の3点は、両分布図で毛受領域に分布するのみならずNa、Fe因子でも類似していることから、毛受遺跡の主成分の土師器と同じところで製作された土師器である可能性がでてきた。なお、Na27にはFe量が多く、T-29と同質の胎土であるとは言い難い。

図37には清洲城下町遺跡90C出土土師器の両分布図を示す。T-31、32とT-33、34、35はそれぞれ別々に分かれてまとまって分布する。T-31、32は非ロクロ成形の土師器であり、T-33、34、35はロクロ成形の土師器である。この場合は技法と胎土が関係があることになる。

T-31、32はNa因子でも類似しており、なおかつ、毛受領域によく対応する。したがってT-31、32は清洲城下町遺跡63EのT-26、28、30とともに、毛受遺跡の主成分の土師器と同一産地の製品である可能性を持つ。また、T-33、34、35のロクロ成形土師器は同じ清洲城下町遺跡63EのT-29のロクロ成形土師器と全因子で類似しており、同一産地の製品である可能性が高い。

図38には名古屋城三の丸遺跡から出土した中世土師器の両分布図を示す。Ca、Srの少ないT-37、39とCa、Sr量がやや多いT-36、38、40の2群に分かれる。Na、Fe因子にもその傾向がある。両群とも毛受領域には対応しない、別産地の製品である。

Ca、Sr、Na、Fe量が少ないのは猿投窯群の須恵器の化学特性であり、同系統の粘土を使ったとすると、T-37、39は名古屋市内の製品ということになる。Na37はロクロ成形であり、T-39は非ロクロ成形であることから、この場合も、技法と粘土とは無関係であるということになる。

次に、年代が少し古い、15世紀代半ばと推定される郷上遺跡出土土師器の両分布図を図39に示す。いずれも、毛受領域には対応しない。T-41、44、45の3点は全因子で類似しており、同一産地の製品である。したがって、少なくとも、3ヶ所の製品があることになる。しかし、いずれも技法

はロクロ成形である。

最後に、16世紀前半～後半と推定される吉田城遺跡出土土師器の両分布図を図40に示す。
T-49、50とT-47の3群に分かれ、別々の3ヶ所から供給された土師器と考えられる。

須恵器に比べて手軽に作れる土師器はあちこちで製作されたものと推察される。したがって、1つの遺跡にはあちこちの製品が出土することは容易に理解できる。今回分析した遺跡の中でも、胎土が単色であったのは岩倉城遺跡のみで、他の遺跡からは2～3色の胎土が検出された。その場合、同時期の近接した遺跡からは同質の胎土をもつ土師器が出土することも十分に考えられる。清洲城下町遺跡63E出土のT-29と同じ清洲城下町遺跡90C出土のT-33、34、35が同質の胎土であり、同じところで製作された土師器があることを立証したのがその例である。

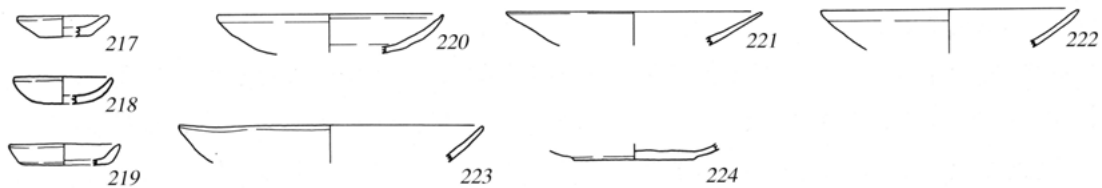
他方、ロクロ成形、非ロクロ成形の技法は一般に、胎土とは無関係であることを今回のデータは示した。

1遺跡から数点の資料抽出、合計8遺跡から出土した土師器の分析データから引き出された情報は以上の通りである。このようなデータを今後も集積していくことによって、中世土師器の生産と供給について、もう少し詳しい情報は引き出せるものと期待される。

資料番号	遺物番号	遺跡名・調査区	遺構番号	成型法	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	所属時期	備 考
T-1	223	毛受遺跡96Ca	SD18	ロクロ成形	(16.2)	—	—	15C後半～16C前半	
T-2	222	毛受遺跡96Ca	SD18	ロクロ成形	(13.6)	—	—	15C後半～16C前半	
T-3	220	毛受遺跡96Ca	SD18	ロクロ成形	(11.9)	—	—	15C後半～16C前半	
T-4	221	毛受遺跡96Ca	SD18	ロクロ成形	(13.6)	—	—	15C後半～16C前半	
T-5	224	毛受遺跡96Ca	SD17	ロクロ成形	—	—	(6.4)	15C後半～16C前半	
T-6	218	毛受遺跡96Ca	SD17	非ロクロ成形	(5.7)	(1.4)	—	15C後半～16C前半	
T-7	219	毛受遺跡96D	SD01	非ロクロ成形	(5.9)	(1.1)	(5.0)	15C後半～16C前半?	
T-8	217	毛受遺跡96D	SD06	非ロクロ成形	(4.8)	(1.1)	(2.8)	15C後半～16C前半	
T-9	17	毛受遺跡96B	SD11	非ロクロ成形	(5.8)	1.0	4.1	15C後半～16C前半?	
T-10	69	毛受遺跡96D	SB01	非ロクロ成形	(6.6)	(1.1)	(4.3)	15C後半～16C前半	
T-11	37	毛受遺跡96Ca	SD17	ロクロ成形	(12.4)	2.4	6.0	15C後半～16C前半	
T-12	49	毛受遺跡96Ca	SD18	ロクロ成形	12.4	2.2	5.9	15C後半～16C前半	内面煤付着
T-13	40	毛受遺跡96Ca	SD18	非ロクロ成形	(6.2)	1.0	(5.0)	15C後半～16C前半	
T-14	44	毛受遺跡96Ca	SD18	非ロクロ成形	(7.0)	0.9	(4.2)	15C後半～16C前半	
T-15	45	毛受遺跡96Ca	SD18	非ロクロ成形	6.8	0.9	5.1	15C後半～16C前半	
T-16	225	大毛池田遺跡94J	SD01	非ロクロ成形	(6.7)	1.2	(5.2)	15C後半～16C前半	
T-17	226	大毛池田遺跡95Aa	SD02	非ロクロ成形	7.0	1.2	5.7	15C後半～16C前半	
T-18	227	大毛池田遺跡94J	SD01	非ロクロ成形	(11.8)	(1.8)	(8.0)	15C後半～16C前半	
T-19	229	大毛池田遺跡95Aa	SD02	ロクロ成形	(12.4)	2.3	(7.4)	15C後半～16C前半	
T-20	228	大毛池田遺跡94G	SD05	ロクロ成形	(11.2)	1.7	(7.1)	15C後半～16C前半	
T-21	231	岩倉城遺跡62A	SD03	非ロクロ成形	6.4	1.1	5.6	16C前半	ほぼ完形
T-22	230	岩倉城遺跡62A	SD03	非ロクロ成形	5.7	1.0	4.9	16C前半	
T-23	232	岩倉城遺跡62A	SD03	非ロクロ成形	(6.4)	(1.5)	(5.2)	16C前半	
T-24	234	岩倉城遺跡89A・B	SD03	ロクロ成形	(12.2)	(2.5)	(6.7)	16C前半	
T-25	233	岩倉城遺跡89A・B	SD03	ロクロ成形	(12.3)	(2.3)	(6.6)	16C前半	
T-26	236	清洲城下町遺跡63E	SD136	非ロクロ成形	6.4	1.2	5.3	15C後半～16C前半	
T-27	235	清洲城下町遺跡63E	SD136	非ロクロ成形	6.0	1.3	4.5	15C後半～16C前半	
T-28	237	清洲城下町遺跡63E	SD136	ロクロ成形	9.2	1.9	5.0	15C後半～16C前半	
T-29	238	清洲城下町遺跡63E	SD136	ロクロ成形	14.0	2.2	7.8	15C後半～16C前半	
T-30	239	清洲城下町遺跡63E	SD136	ロクロ成形	14.3	2.6	7.6	15C後半～16C前半	
T-31	241	清洲城下町遺跡90C	NR4001	非ロクロ成形	6.8	1.2	4.6	15C後半～16C前半	
T-32	240	清洲城下町遺跡90C	NR4001	非ロクロ成形	(5.7)	1.2	(4.2)	15C後半～16C前半	
T-33	242	清洲城下町遺跡90C	NR4001	ロクロ成形	(12.8)	(2.6)	(5.9)	15C後半～16C前半	
T-34	243	清洲城下町遺跡90C	NR4001	ロクロ成形	(15.0)	(2.2)	(7.6)	15C後半～16C前半	
T-35	244	清洲城下町遺跡90C	NR4001	ロクロ成形	(14.4)	(2.2)	8.0	15C後半～16C前半	
T-36	248	名古屋城三の丸遺跡91	SD401	ロクロ成形	—	—	5.6	16C第3四半期	
T-37	246	名古屋城三の丸遺跡91	SD401	ロクロ成形	—	—	(5.0)	16C第3四半期	
T-38	249	名古屋城三の丸遺跡91	SD401	ロクロ成形	—	—	(7.0)	16C第3四半期	
T-39	247	名古屋城三の丸遺跡91	SD401	非ロクロ成形	—	—	(7.0)	16C第3四半期	
T-40	245	名古屋城三の丸遺跡91	SD401	ロクロ成形	—	—	4.0	16C第3四半期	
T-41	251	郷上遺跡97A	SD011	ロクロ成形	—	—	7.0	15C半ば	内面煤付着
T-42	250	郷上遺跡97A	SD011	ロクロ成形	—	—	6.0	15C半ば	
T-43	252	郷上遺跡97C	SD48下層	ロクロ成形	(12.6)	3.1	6.3	15C半ば	
T-44	253	郷上遺跡97C	SD48下層	ロクロ成形	(12.8)	(3.5)	(8.3)	15C半ば	
T-45	254	郷上遺跡97C	SD48下層	ロクロ成形	(12.2)	(2.7)	(9.9)	15C半ば	
T-46	258	吉田城遺跡90	SD102	非ロクロ成形	(15.4)	1.4	8.9	16C前半～後半	
T-47	259	吉田城遺跡90	SD102	非ロクロ成形	(14.8)	—	(13.0)	16C前半～後半	
T-48	256	吉田城遺跡90	SD102	非ロクロ成形	(10.4)	—	—	16C前半～後半	
T-49	257	吉田城遺跡90	SD102	非ロクロ成形	(9.6)	—	—	16C前半～後半	
T-50	255	吉田城遺跡90	SD102	非ロクロ成形	(9.2)	—	—	16C前半～後半	

第10表 蛍光X線分析データ一覧表

* () は推定値



毛受遺跡



大毛池田遺跡



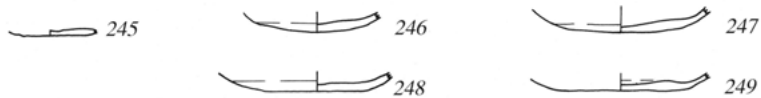
岩倉城遺跡



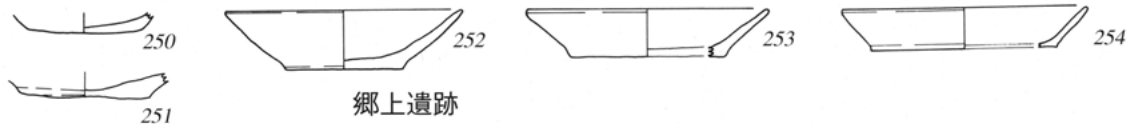
清洲城下町遺跡 63E



清洲城下町遺跡 90C



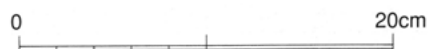
名古屋城三の丸遺跡



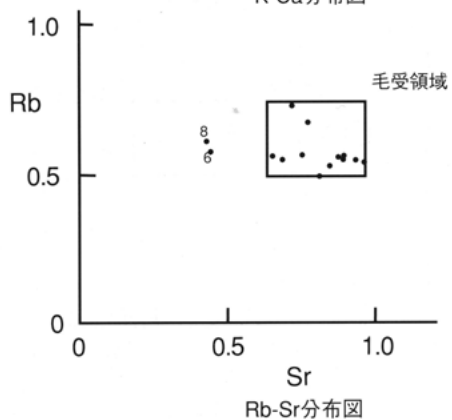
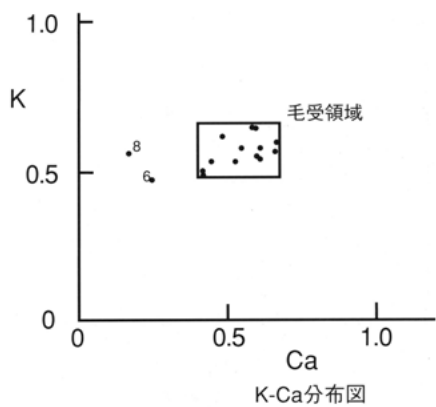
郷上遺跡



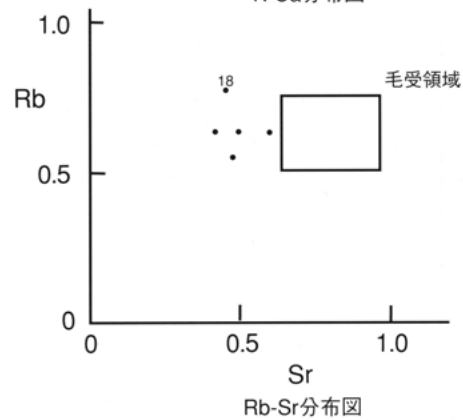
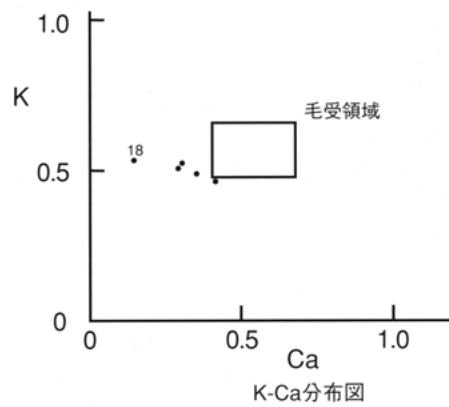
吉田城遺跡



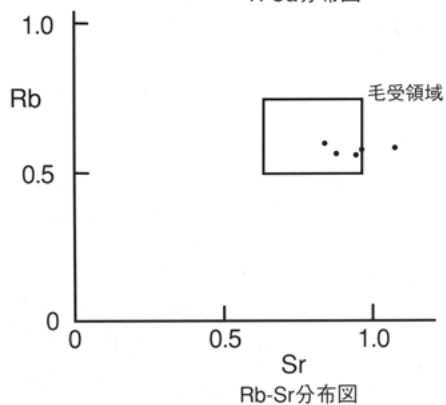
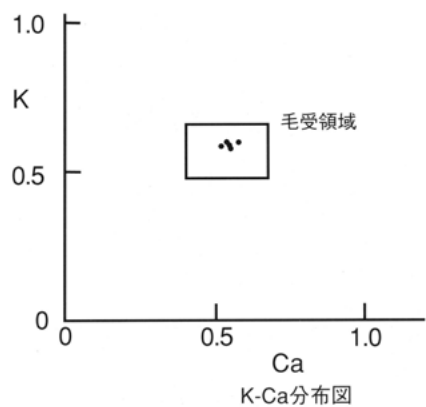
第 32 図 土師皿分析資料



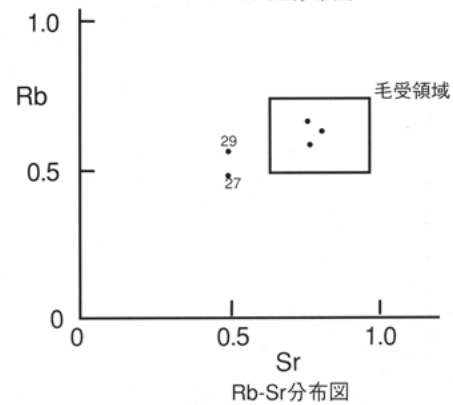
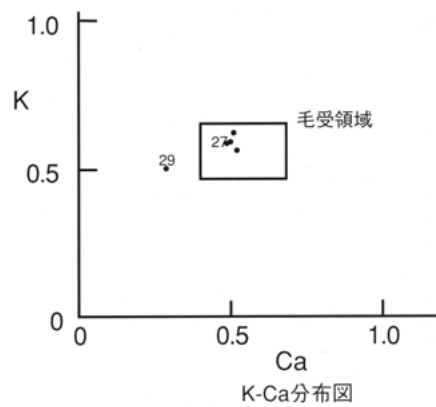
第33図 毛受遺跡出土土師皿の両分布図



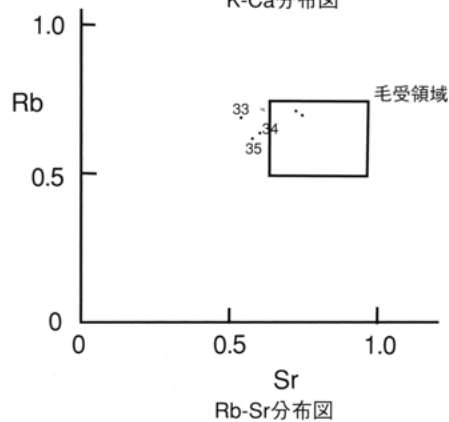
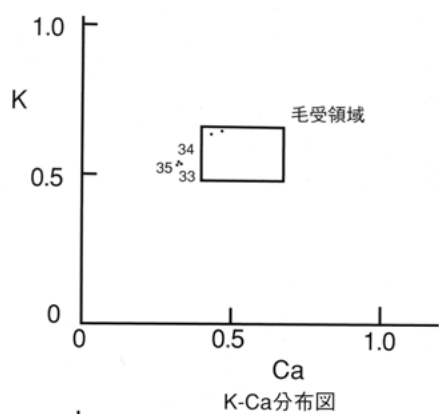
第34図 大毛池田遺跡出土土師皿の両分布図



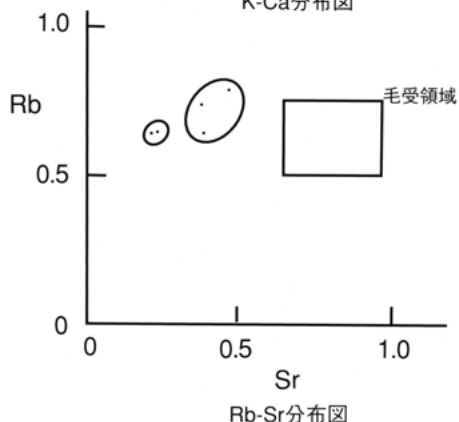
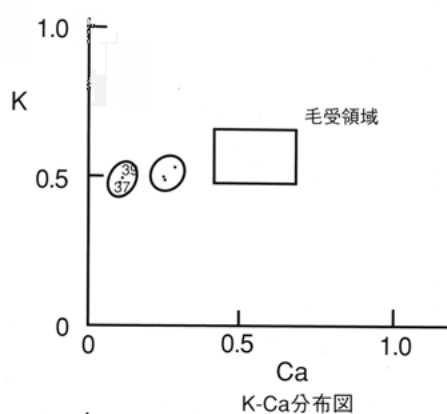
第35図 岩倉城遺跡出土土師皿の両分布図



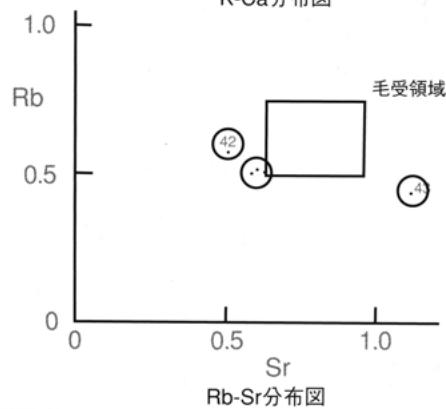
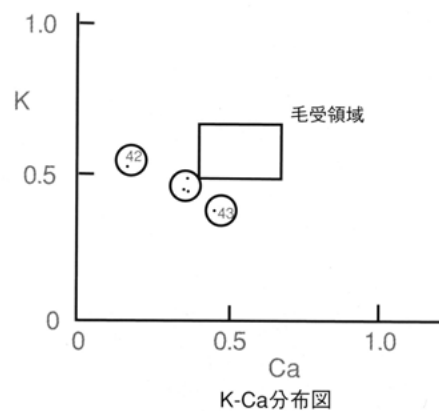
第36図 清洲城下町遺跡(T)63E出土土師皿の両分布図



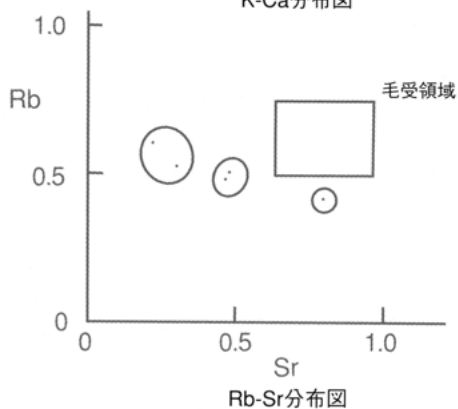
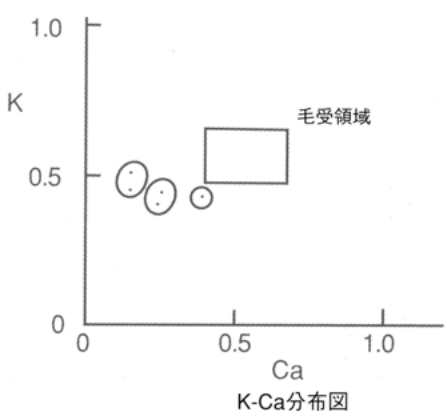
第37図 清洲城下町遺跡90C出土土師皿の両分布図



第38図 名古屋城三の丸遺跡遺跡出土土師皿の両分布図



第39図 郷上遺跡出土土師皿の両分布図



第40図 吉田城遺跡出土土師皿の両分布図

第2節 毛受遺跡の堆積土珪藻分析

毛受遺跡では今から約500年前の室町時代後期に、いくつかの屋敷地（居館）とそれらを取り囲む居住域の存在が推定されている。その区画溝のひとつを埋積する堆積物中の珪藻微化石分析を行ない、当時の自然環境について考察を加えたいと思う。なお、試料は96D区より検出された区画溝であるSD06より採取した。また、本試料を用いて昆虫遺体分析も行なっている（第3節）。

珪藻分析方法 乾燥重量1gをトールピーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行なった。岩片除去ののち、水洗を4～5回繰り返しながら同時に比重選別を行なった。分離した試料を希釈し、マウントメディア（和光純薬製）にて封入した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個体の珪藻殻を同定した。珪藻の同定についてはKrammer & Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b)を参考にした。

分析結果 試料中より出現した珪藻遺骸は22属50種（1変種を含む）であった。そのリストを第11表に示す。試料全体についてみると、pHに対する適応性では不定性種の占める割合が48%と高く、次いで真・好酸性種が26.5%、好アルカリ性種が22.5%であった。水流性については不定性種が63%と最も多く、真・好流水性種が28%、真・好止水性種が6%であった。生態性では底生種と付着生種が多産し、底生種が56.5%、付着生種が41.5%を占めた。塩分に対する適応性では94%が不定性種で占められた。多産した種として底生種の *Navicula radiosa* が16.5%、真酸性種・好流水性種・底生種の *Gyrosigma acuminatum* が13%、好アルカリ性種・流水不定性種・底生種の *Pinnularia gibba* が7%を占めた。

考察 約500年前、室町時代後期の屋敷地を区画する溝内試料の珪藻微化石分析を行なった。試料から珪藻化石が多産することと、*Hantzschia amphioxys*などの陸生珪藻とよばれる耐乾性種群の出現頻度が低いことから考えて、溝内は水の関与する環境であったことがわかる。また、本遺構が絶えず帯水し、放棄されるまでその幅と深さにほとんど変化がなかったと仮定すれば、水域の表層に浮遊する浮遊性珪藻の多産が期待される。ところが、遺構から検出される珪藻化石は *Navicula radiosa*、*Gyrosigma acuminatum*などの底生種が多産した。これは試料採取層準において、かなり水深が浅くなっていたことを示すものである。また、*Fragilaria ulna*や *Cymbella*属、*Eunotia*属といった付着生種も底生種に次いで多く確認される。珪藻の付着基物となる植物が、溝内に繁茂していた事実を示すものである。以上のことから、居館を区画する溝は、少なくとも試料採取層準において、比較的水深が浅く水生植物が繁茂する環境であったと推定される。また、同じ試料をもとに行なわれた昆虫遺体分析から、ゲンゴロウやマメガムシといった水生昆虫がみつかる事実とも矛盾しない。

文献

- Krammer, K., and Lange-Bertalot, H.,1986, Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K., and Lange-Bertalot, H.,1988, Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae, Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K., and Lange-Bertalot, H.,1991a, Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae, Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K., and Lange-Bertalot, H.,1991b, Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergaezungen zu Navicul (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.

学 名	pH	流水性	生態性	塩分	96D SD06
<i>Achnanthes convergens</i> Kobayasi	Ind	Ind	Epip	Ind	2
<i>Achnanthes linearis</i> (W.Smith) Grunow	Ind	Ind	Epip	Ind	2
<i>Achnanthes minutissima</i> Kutzing	Ind	Ind	Epip	Ind	3
<i>Actinella brasiliensis</i> Grunow	Ac-ph	Li-ph	Epip	Ind	1
<i>Amphora libyca</i> Ehrenberg	Al-ph	Ind	Bent	Ind	1
<i>Anomooneis brachysira</i> Pfitzer	Ind	Ind	Bent	Ind	2
<i>Caloneis silicula</i> (Ehrenberg) Cleve	Ac-ph	Ind	Bent	Ind	2
<i>Caloneis</i> sp.	—	—	—	—	1
<i>Cocconeis placentula</i> Ehrenberg	Al-ph	Ind	Epip	Ind	2
<i>Cymbella aspera</i> (Ehrenberg) Cleve	Al-ph	Ind	Epip	Ind	2
<i>Cymbella leptoceros</i> (Ehrenberg) Kutzing	Ind	Li-ph	Epip	Ind	1
<i>Cymbella minuta</i> Hilse	Ind	R-ph	Epip	Ind	6
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ind	Ind	Epip	Ind	4
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ind	R-ph	Epip	Ind	7
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ind	Ind	Epip	Ind	4
<i>Diatoma mesodon</i> (Ehrenberg) Grunow	Al-ph	Li-ph	—	Ind	1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ind	Ind	Bent	Ind	2
<i>Epithemia</i> sp.	—	—	—	—	1
<i>Epithemia turgida</i> (Ehrenberg) Kutzing	Al-ph	Li-ph	Epip	Ind	1
<i>Eunotia lunaris</i> Brebisson	Ac-ph	Ind	Epip	Hp-ho	2
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kutzing) Rabenhorst	Ac-ph	Ind	Epip	Hp-ho	2
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ac-ph	Ind	Epip	Hp-ho	1
<i>Fragilaria arcus</i> (Ehrenberg) Cleve	Al-ph	R-ph	Epip	Ind	2
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange- Bertalot	Al-ph	Ind	Epip	Ind	12
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwaites) De Toni	Al-ph	Ind	Epip	Ind	1
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ind	Liph	Epip	Ind	5
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Epip	Ind	7
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Al-ph	R-ph	Epip	Ind	3
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ind	Li-ph	Epip	Ind	1
<i>Gomphonema parvulum</i> Kutzing	Al-ph	R-ph	Epip	Ind	9
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kutzing) Rabenhorst	Ac-bi	R-ph	Bent	Ind	26
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehrenberg) Grunow	Al-ph	Ind	Bent	Ind	1
<i>Navicula americana</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	Ind	4
<i>Navicula capitata</i> Ehrenberg	—	—	Bent	Ind	1
<i>Navicula cryptocephala</i> Kutzing	Al-ph	Ind	Bent	Ind	2
<i>Navicula elginensis</i> (Gregory) Ralfs	Al-ph	R-bi	Bent	Ind	3
<i>Navicula laevissima</i> Kutzing	Ind	Ind	Bent	Ind	2
<i>Navicula radiosa</i> Kutzing	Ind	Ind	Bent	Ind	33
<i>Navicula rynchocephala</i> Kutzing	Al-ph	Ind	Bent	Ind	1
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehrenberg) Krammer	Ind	Ind	Bent	Ind	4
<i>Nitzschia levidensis</i> (Wm.Smith) Van Heurck	—	—	—	Meha	1
<i>Nitzschia palea</i> (Kutzing) Grunow	Ind	Ind	Bent	Ind	2
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ind	Ind	Bent	Ind	1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	Ind	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ac-ph	Ind	Bent	Ind	14
<i>Pinnularia interrupta</i> W.Smith	Ind	Ind	Bent	Ind	1
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehrenberg) Cleve	Ac-ph	Ind	Bent	Ind	4
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ind	Li-bi	Bent	Ind	2
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehrenberg) O.Muller	Al-ph	Ind	Epip	Ha-ph	1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehrenberg) O.Muller	Al-ph	Ind	Epip	Meha	1
<i>Surirella ovata</i> Kutzing	Al-ph	Ind	Bent	Ind	2
<i>Surirella</i> sp.	—	—	Bent	—	2
<i>Tabellaria fenestrata</i> (Lyngbye) Kutzing	Ac-ph	Ind	Epip	Ind	1
Total					200

第 11 表 珪藻分析結果

第3節 毛受遺跡の昆虫群集－500年前の夏の夜のできごと

森 勇一（愛知県立明和高等学校）

はじめに ここに一枚の昆虫リストがある。それは、木曽川の支流・日光川上流部に存在したとされる一宮市毛受遺跡の室町時代後期の区画溝（SD06という）から発見されたものである。室町時代後期というと、応仁の乱（1467～1477年）で京都が荒れ放題になり、日本各地に戦国大名が登場しつつあった頃のことだ。今から遡ることおよそ500年前、濃尾平野の一角にどんな昆虫がいて、人々は虫にどんな想いを抱いていたのだろうか。分析方法や昆虫群集の解析のしかたなどは、これまで筆者が書いてきたものを見ていただくとして、昆虫の特性と見いだされた昆虫群集が語る毛受遺跡付近の情景について述べてみよう。

虫が有効な 虫にも色々なものがある。昆虫の住みか（生息環境）は水中・地表面・植物上など多岐にわたり、食わけ べ物（食性）では、植物の葉や根のみならず樹液を吸ったり、花粉を失敬したり、動物食では腐肉や動物の糞などのほか、他の虫を捕食したりその体液を吸うものもいる。昆虫化石の場合、昆虫が生息していた場所からあまり移動することなく見つかるケースが多いことから、当時の環境を推定するのに都合がよい。土の中から発見された昆虫の種がわかると、昆虫が生活していた場所の環境が手にとるようにわかるってわけだ。

多くの昆虫は、植物の葉を食べて生活している。植物は、大切な光合成器官である葉を食べられたくないから、葉に毒を盛ったり味をまずくしたり、さまざまな忌避物質を身につけて防衛している。この過程で、有毒物質を解毒する酵素を身につけた特定の昆虫のみが、ある種の植物の葉を食べることを許されたのである。このため食植性昆虫に注目することにより、そこに存在したホストプラントを推定することができるのだ。

生えていた植 最も多く産出したヒメコガネ、これは成虫が各種広葉樹の葉を、幼虫が主に大豆はじめ各種畑作物の物を推理する 根を加害する人里昆虫の代表種だ。ヒメコガネは、マメ科植物やブドウ・カキなど、多くの植物の葉を食べる広食性昆虫のため、本種の存在だけでそこに生えていた植物を特定することはできない。つぎに多いサクラコガネ属・ドウガネブイブイなどを含めて考えると、毛受遺跡周辺に畑作物が植栽されていたことは明らかだ。これらの推定は、中世のころ、毛受遺跡近傍の一宮市大毛沖・大毛池田両遺跡などから得られた昆虫組成ともよく一致している。畑作地に多いセアカヒラタゴミムシ・ハネカクシ科・マグソコガネなどの地表性歩行虫の産出は、こうした推定をさらに補強する。ハムシ科の中のダイコンハムシは、成虫・幼虫ともにダイコンや白菜など、アブラナ科植物の害虫として知られ、クワハムシはクワの葉を好んで食べることから、いずれもホストプラントの推定に役立つ。

このほか、クロコガネ・クロカミキリ・ノコギリカミキリ・スジコガネは、アカマツ林に多い昆虫であり、毛受遺跡周辺にアカマツが生えていたことがわかる。また、ヤナギリハムシはヤナギの葉を加害するハムシとして有名であり、ほかにヤナギに由来する昆虫にアカアシクワガタ・ヒゲコガネなどが見つかった。コカブトムシやクロコガネ・クワガタムシ科の出現は、遺跡付近に朽木が存在したことを示している。こうしていくつかの食植性昆虫の名を列挙するだけで、毛受遺跡付近に生えていた植物を推定することができる。

灯りめがけて 昆虫群集にゲンゴロウやミズスマシ・コガシラミズムシなどの食肉性の水生昆虫と、セマルガムシ・メガムシ・ガムシなどの食植性の水生昆虫が伴われている。いずれも水田や水田周辺の水路・水たまりなどに多い水田指標昆虫ばかりだ。食糞性のコブマルエンマコガネやマグソコガネ・コマグソコガネは、遺跡周辺に動物性の糞便が存在したことを示している。おそらく人糞だろう。

さてさて、これらがいっしょに産出したのをどう理解すべきだろうか。これには、ライトトラップという昆虫採集の経験が大いに役立つ。盛夏のころ、周囲に畑作地を控えた郊外の水田地帯に出かけ、ブラックライトを灯して夜間採集を行うと、今回得られた昆虫群集とよく似た昆虫を採集することができる。夜間採集標本にあって、毛受遺跡の昆虫群集に欠けるものがあるとすればガの仲間（鱗翅目）だけだが、これも電子顕微鏡下で土を丹念に観察すれば、ガのはねから離脱した夥しい数の鱗片を識別することができるだろう。そして、この形態や構造色などから、そこに飛来したガの種類を特定することも理論上できないことではない。

もう紙面がなくなった。そろそろまとめに入らなければならない。毛受遺跡では、盛夏のころ、屋敷地の一角に灯火が灯されていたと考えられる。その日は月のないむし暑い夜だった。多くの昆虫が灯火めがけて飛んできていた。あるものは灯火に飛び込み体を焼かれて負傷した。また、あるものは一晩中飛び続け、壁や木の枝に体をぶつけて落下した。この下にやや深い溝があり、多くの虫たちを捕捉して、やがて絶命させた。虫体のいくつかをレベルアップした名大年代測定資料研究センターのタンデトロンの加速器質量分析計にかければ、この虫たちが水中に落下した実年代を推定することも困難ではない。いずれにしても、これらの昆虫群集が長い間かかって蓄積されたものでないことだけは確かだ。せいぜい一夏か二夏のこと、あるいは一晩か二晩の夏の夜のできごとだったのかもしれない。

アドリブ 500年前の一時期、毛受遺跡付近に畑作物が植栽されていた。その中には、マメ科植物やダイコンなどのアブラナ科植物、クワが混じっていた。屋敷地周辺にアカマツが生え、水辺にはヤナギが生えていたことだろう。近くに人の生活空間が存在したものの、昆虫化石を産出した溝は生活污水が流入するような汚れた環境ではなかった。

驚くべきことでありまた当然ともいえることだが、500年前の昆虫相は、近現代において濃尾平野北西部でライトトラップ法により採集される昆虫群集と酷似しており、今日見るような昆虫相が、すでに中世後期のころ完璧なまでに完成していたのである。このことは、筆者にとって非常に新鮮な発見だった。

		和 名	学 名	検出部位および点数	Sum.	
水	食 肉 性	ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> Sharp	E1.A1	2	
		ゲンゴロウ科	Dytiscidae	E2.A6	8	
		ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	E1.A1	2	
		コガシラミズムシ科	Haliplidae	A1	1	
		コガシラミズムシ	<i>Peltodytes intermedius</i> (Sharp)	E3.A1	4	
生	食 植 性	セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	P1	1	
		マメガムシ	<i>Regimbartia attenuata</i> (Fabricius)	P3.E4	7	
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	L1	1	
地 表 性	食 糞 ・ 食 屍 性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	P1	1	
		コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse	E1	1	
		マグソコガネ属	<i>Aphodius</i> sp.	P1	1	
		コマグソコガネ	<i>Aphodius pusillus</i> (Herbst)	E1	1	
		マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	H2.P3.E1	6	
	食 肉 食 屍 性	エンマムシ科	Histeridae	P4	4	
		オサムシ科	Carabidae	H3.P2.E4.T3.A6	18	
		セアカヒラタゴミムシ	<i>Dolichus halensis</i> (Schaller)	E1	1	
		ゴモクムシ亜科	Harpalinae	H1	1	
		ハネカクシ科	Staphylinidae	P3.E1.A3	7	
陸	食	シデムシ科	Silphidae	E1	1	
		コガネムシ科	Scarabaeidae	H1.E1.L2	4	
		スジコガネ	<i>Mimela testaceipes</i> Motschulsky	E2.T1	3	
		コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal	E2.A1	3	
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	S1.P5.E6.T2.A1.L10	25	
		ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	E7.T3.A6.L5	21	
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	H3.S2.P11.E19.T1.A5.L10	51	
		ヒゲコガネ	<i>Polyphylla laticollis</i> Lewis	H1.L1	2	
		マメコガネ	<i>Popillia japonica</i> Newmann	H1.P1.L3	5	
		クロコガネ	<i>Holotrichia kiotoensis</i> Brenske	P1	1	
		アオドウガネ	<i>Anomala albopilosa</i> Hope	H1.P6	7	
		カナブン	<i>Rhomborrhina japonica</i> Hope	H1	1	
	植	コカブトムシ	<i>Eophileurus chinensis</i> (Faldermann)	L1	1	
		コメツキムシ科	Elateridae	A1	1	
		カミキリムシ科	Cerambycidae	P1.E2.L1	4	
		ノコギリカミキリ	<i>Prionus insularis</i> Motschulsky	E1.L1	2	
		クロカミキリ	<i>Spongylis buprestoides</i> Linne	P1	1	
		クワガタムシ科	Lucanidae	An1	1	
		アカアシクワガタ	<i>Nipponodorcus rubrofemoratus</i> Vollenhoven	E1	1	
		性	ハムシ科	Chrysomelidae	E9.T1.L1	11
			ヤナギルリハムシ	<i>Plagiodera versicolora</i> Laicharting	E8	8
			クワハムシ	<i>Fleutiauxia armata</i> Baly	E2	2
			ダイコンハムシ	<i>Phaedon brassicae</i> Baly	E6	6
			ゾウムシ科	Curculionidae	E2	2
その他	不明甲虫		Coleoptera	P1.E1.T1.A2.L1.O9	15	
	カメムシ目	Hemiptera	P1	1		
	アリ科	Formicidae	H5	5		
	双翅目	Diptera	C2	2		
総 計				254		

(検出部位凡例)

H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大腮 S(Scutellum):小楯板 P(Pronotum):前胸背板
C(Chrysalis):囲蛹 E(Elytron):鞘翅 T(thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Others):その他

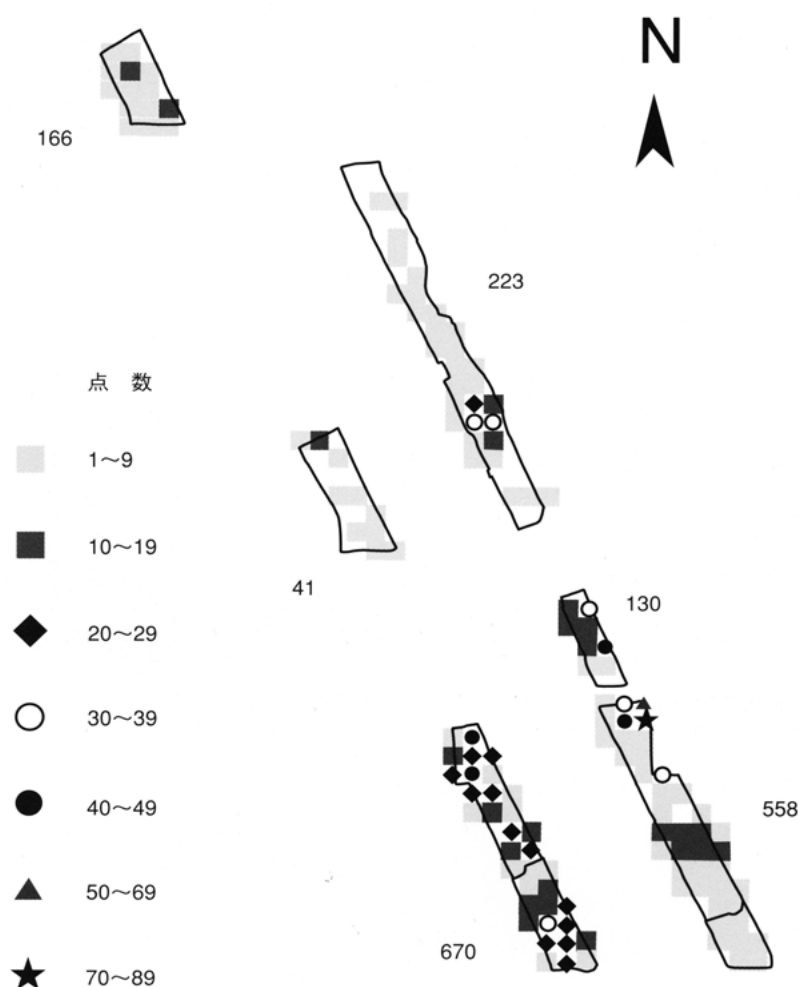
第 12 表 毛受遺跡から産出した昆虫化石

第V章 考察

毛受遺跡では古墳時代から近世にかけての遺物が出土した。そのうち所属時期が明らかな遺構は、B期とC期の各種遺構で、そのほかについては遺物のみの検出にとどまった。ここでは検出された遺構の変遷から、A期、B期、C期の各時期の毛受遺跡についてまとめていきたい。特にB期については、検出された大溝と遺跡の名称とも関わる毛受（めんじょう）城との整合性について述べていきたい。

1 A期の遺構・遺物の様相

C区SD19のみが戦国期以前の中世に属する溝と考えられる以外は、該期の遺構は検出されなかった。そこで、出土した遺物から概観していくこととする。



第45図 灰釉系陶器出土分布図 (1:2000) *数字は破片点数

各調査区からは、古墳時代前期～中期に属する古式土師器や古墳時代後期に属する須恵器、平安時代に属する灰釉陶器などが出土したが、いずれも少量であった。そのため、これらの遺物を伴う時期の遺跡の様相や、各遺物の時間的な継続性の有無については確認できないが、周辺では、少なくとも古墳時代の早い段階には人々の生活が開始されており、古代にかけても生活が営まれていたであろうと考えられる。

またカウントした結果から、本遺跡から出土した陶磁器・土器・土製品の中で、最も破片数が多い中世以前の遺物は灰釉系陶器（いわゆる山茶碗）

であり、全体の約35%を占めている。所属時期は、主にC区から出土した第5型式(13世紀前後)に属するものが、出土した中では最も古い段階に位置づけられるが、数量的には、第6型式(13世紀前半)～第11型式(15世紀半ば)までに属する、いわゆる「北部系」と呼ばれる美濃(東濃)窯産の均質手の製品が圧倒的に多く見られた。このことから、遅くとも13世紀半ば頃には、当地周辺で灰釉系陶器の流通、消費活動が行われていたと考えられる。そこで、調査区内を5m×5mのグリッドで区切り、調査区全体の中で灰釉系陶器どのような出土分布状況であるのかを検討していく(第45図)。各調査区からの出土破片点数はAa区166点、Ab区41点、Ac区・B区670点、C区718点、D区223点であった。B期の比較的規模の大きな遺構が展開する地域(Ac区・B区、C区)に重なるようにして資料数が集中している箇所が幾つか見られるが、二次堆積による覆土からの出土資料であるため、その属性を明らかにすることはできない点には、注意をしなければいけない。次に1㎡から出土した割合を見ていくと、Aa区0.36点、Ab区0.08点、Ac区・B区0.54点、C区0.39点、D区0.14点となり、Aa区、Ac区・B区、C区の3調査区において高い割合を示し、逆に低い割合を示したAb区、D区では分布状況もおしなべて稀薄である。これらのことから、Ac区・B区からC区にかけての周辺には、中世半ばくらいの頃には集落が立地していた可能性があり、またそれに隣接する形でAa区付近にも人々の生活が営まれていた可能性が高いことが窺える。

また、毛受遺跡及びその周辺の、中世以前の各時期における動向を考えていくためには、本遺跡の南約1kmに位置し、弥生時代から中世にかけて当地域の中心的な遺跡である八王子遺跡の動向を射程に入れておく必要がある。これまでの成果から、中世から戦国期にかけての時期に、八王子遺跡の北辺から毛受遺跡方面にかけて想定される遺構の展開状況¹⁾は、毛受遺跡での灰釉系陶器の出土のあり方とも関わる問題でもあり、留意しておかなければならない。

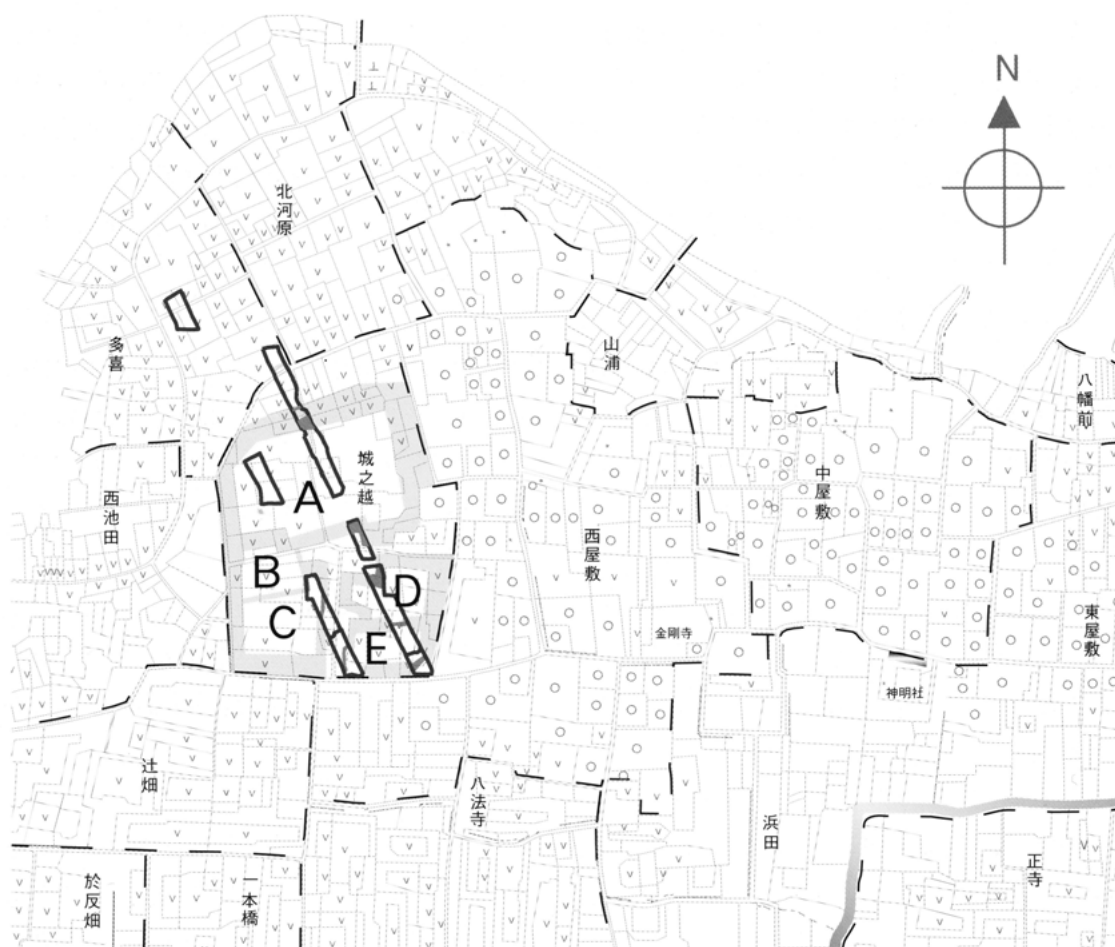
2 B期の遺構・遺物の様相

A 遺構の展開

B期の遺構の特徴としては、溝により方形に区画される空間が幾つか見られるということである。検出した溝は、日光川の南流する方向する方向にほぼ並行していることから、立地地形にいくらか規制されたためと見られる。これらはいずれも規模が大きく、特にC区SD17・SD18、D区SD06については、幅5m以上を測る大規模なもので、掘形などから清洲城下町遺跡などで見られる堀を想定させる。C区のSD17は他の溝と方向性を違えていることから、近接するSD18とは、溝を共有していた可能性もあり、また「横矢」と呼ばれる防御機能を持たせるために溝間に道を設けて分離していたとも考えられる²⁾。

検出された遺構を明治17年に作成されたの地籍図に重ね合わせた図が、第46図である。田畠の地割から、次のような各区画が復元できる。

- A C区SD18とD区SD06とを結んだ方形の区画(区画A)。
- B 調査区よりさらに西へ広がる、B区SD11により想定される区画(区画B)。
- C B区SD12を東辺として想定される区画(区画C)。



第46図 毛受遺跡 B期屋敷地割推定図(1:5000)

D C区SD17・SD20とを結んでつくられる区画(区画D)。

E A区SD20とC区SD20・SD24とを結んでつくられる区画(区画E)。

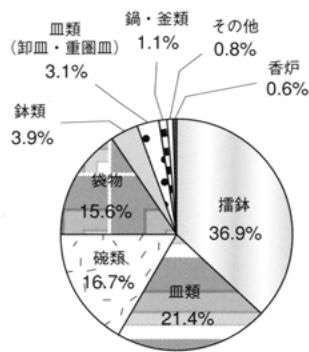
これらの区画を形成している溝からは、該期の陶器や木製品(木胎漆器碗)などが出土しており、また区画Aからは掘立柱建物が検出されていることから、これらの区画は屋敷地であったと見られる。

最も大きな区画Aは、東西約100m(1町)、南北約50m(0.5町)の規模を測る。また、当地の「城之腰(越)」という小字名が、かつての城館趾の存在を示す城館地名として有力である場合が多いとされる³⁾。これらの点から、区画Aには当地を治めていた領主クラスの居館の存在が想定できる。そして南に展開する幾つかの小区画には、この区画Aを主郭として、領主に服属する家臣団、もしくは職人たちの屋敷地が展開していたと考えられる⁴⁾。

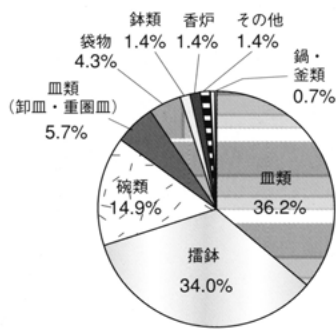
B 遺物の様相

B期の陶器の総破片数は360点(内、貿易陶磁器8点)を数え、毛受遺跡から出土した陶器類総破片数の21.6%にあたる。

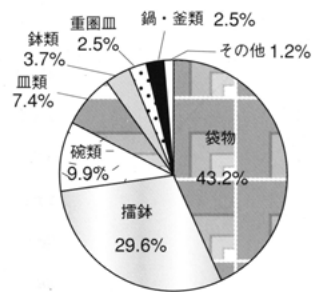
該期の遺物の様相を見してみる。まず、調査区全体から出土した陶器組成については第47図に示



総破片数

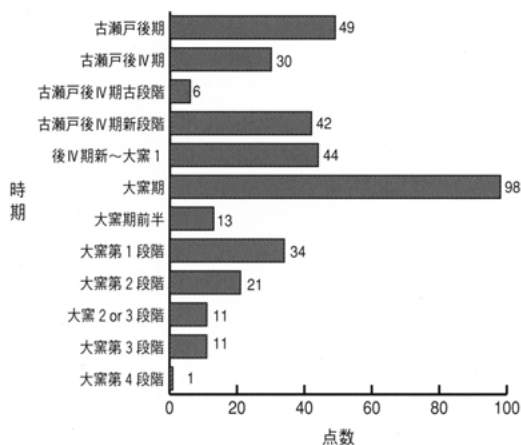


口縁部残存率

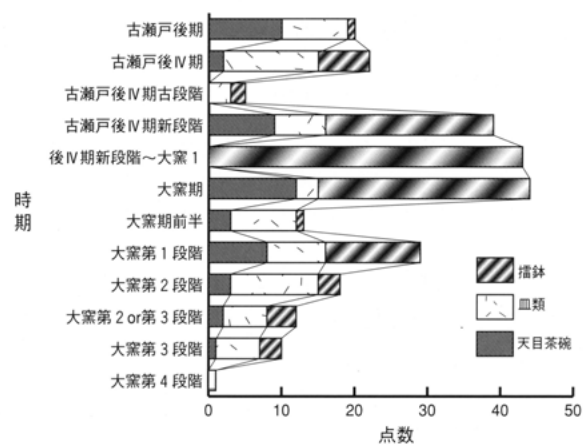


遺構出土破片数

第47図 B期遺物組成図



全体



天目茶碗・皿類・播鉢

第48図 B期遺物数量分布図

		古瀬戸後期	古瀬戸後Ⅳ期	古瀬戸後Ⅳ期古段階	古瀬戸後Ⅳ期新段階	後Ⅳ期新～大窯Ⅰ	大窯期	大窯期前半	大窯第Ⅰ段階	大窯第Ⅱ段階	大窯第Ⅱ or Ⅲ段階	大窯第Ⅲ段階	大窯第Ⅳ段階	合計
天目茶碗	点数	10	2	0	9	0	12	3	8	3	2	1	0	50
	%	20.0	4.0	0	18.0	0	24.0	6.0	16.0	6.0	4.0	2.0	0	100
皿類	点数	9	13	3	7	0	3	9	8	12	6	6	1	77
	%	11.7	16.9	3.9	9.1	0	3.9	11.7	10.4	15.6	7.8	7.8	1.3	100
播鉢	点数	1	7	2	23	43	29	1	13	3	4	3	0	129
	%	0.8	5.4	1.6	17.8	33.3	22.5	0.8	10.1	2.3	3.1	2.3	0	100

第13表 B期天目茶碗・皿類・播鉢破片数

したとおりである。出土点数では播鉢がもっとも点数が多く、皿類、碗類がこれに続く。口縁部残存率では、皿類が51、播鉢が48と他の器類に比べて高い比率を示している。また、所属する時期別に見てみると、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第Ⅰ段階への過渡期段階のものが14%見られ、これを境に古瀬戸後期の段階のものが41%であり、特に後Ⅳ期新段階に急激に増加している。そして大窯期の段階のものが45%であった。さらに大窯期の中でも確実に第Ⅰ・第Ⅱ段階ないしは前半段階に属

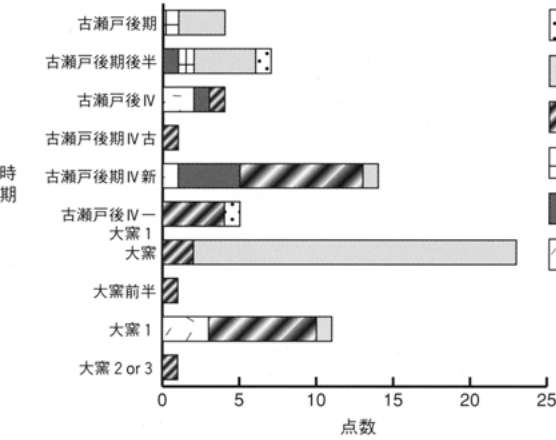
するものが48%であるのに対し、第2段階ないしは第3段階～第4段階までの後半段階の時期に属するものは16%であった。このことから該期の毛受遺跡では、古瀬戸後Ⅳ期～大窯期前半期にかけて1つのピークがあり、大窯期の後半段階以降は急激に衰退していく様子が読みとれる（第48図）。

次に、数量的にもまとまっていた器種である碗・皿類・播鉢を対象としてさらに分析を行うこととする。これらは、他の同時期の遺跡からも比較的多量に、しかも普遍的に出土していることから、比較をしていく上でも有効であると思われる⁵⁾。なお、碗については出土割合の高かった天目茶碗のみを取り上げ、平碗などは除外した。皿類については縁釉小皿、端反皿、丸皿、稜皿などの小皿類とし、卸皿、重圈皿（灯明皿）などは含めない。器種別に見ると、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第1段階への過渡期段階の資料としては播鉢しか見られなかった（33.9%）が、古瀬戸後期後半の段階では碗42.0%、皿類41.5%、播鉢25.2%であったのに対し、大窯期では碗58.0%、皿類58.4%、播鉢40.9%であった。また各器種とも大窯期の前半段階に比べて後半段階の方が出土率はほぼ半減しており、大窯第4段階においては皿（志野丸皿）1点のみが見られる程度である。こうした傾向は、全器類（器種）に見た場合と、ほぼ同じ様相を示している（第48図、第13表）。

遺構から出土したこれらの器種を時期別にみると、いずれも古瀬戸後Ⅳ期段階のものから出土している。特に後Ⅳ期新段階に属する播鉢の点数が最も多いことと比例して、総計でもこの時期のも

のが59%を占め、古瀬戸後期の段階のものが大窯期の段階のものよりも数量的に多くなっている。またC区SD18で大窯第2段階ないしは第3段階の播鉢が1点見られる以外では、碗・皿類・播鉢とも大窯第1段階までのものしか見られない。

今回分析に用いた碗・小皿類・播鉢については、「天目茶碗や小皿類に比べて、播鉢は新しい時期のものが多く出土すること」が指摘されており⁴⁾、「使用期間が短く、城館址の存続期間に近い年代観を示すと思われる播鉢」に注目してみると、



第 49 図 B 期遺構出土陶器器種別数量分布

	古瀬戸後期	古瀬戸後期後半	古瀬戸後Ⅳ期	古瀬戸後Ⅳ期古段階	古瀬戸後Ⅳ期新段階	古瀬戸後Ⅳ期新～大窯1	大窯期	大窯前半	大窯第1段階	大窯第2 or 第3段階
碗類			2		1				3	
皿類		1	1		4					
鉢類	1	1								
播鉢			1	1	8	4	2	1	7	1
袋物	3	4			1		21		1	
鍋・釜		1				1				

第 14 表 B 期遺構出土遺物時期別数量分布表

遺構から出土した資料は多くが大窯第1段階までに属するもので、大窯第3段階まで下がるものはほとんど見当たらない。

このことから、大窯第2段階ないしは第3段階の古い時期（16世紀半ば）には、屋敷地を囲む区画溝の機能は停止していたと思われる。またこれらの溝が掘削されたのは、碗・小皿類・播鉢をはじめとする日常消費財にかかわる器種が普遍的に見出すことができる古瀬戸後Ⅳ期の段階（15世紀後半）と考えられる（第49図、第14表）。

C 毛受城との整合性

毛受城については、『尾陽雜記』に「中島郡毛受村に新八家老浅井玄蕃屋敷跡有り」との記述がされている。新八とは織田信長の家臣で苅安賀城主となった浅井新八郎政高である。そして浅井玄蕃は浅井新八郎の弟（浅井氏系図）もしくは舎弟（『張州府志』）とされる人物で、永禄8年（1565）に妙興寺に銅磬を寄進している。また『尾張志』には（一宮城主）関十郎右衛門（長安か）の項に「刈安賀の浅井氏と志ば志ば合戦す」と記されている。このことから毛受城は、日光川を挟んで一宮城の関氏と対峙するために、苅安賀城主であった浅井新八郎が弟の浅井玄蕃に命じてこの地に築かせた砦としての機能を持った支城であったと思われる。そして築城年代は、苅安賀城が永禄4（1561）年に築かれていることから、ほぼ同時期の16世紀後期前葉頃に比定できよう。

一方、『寛文村々覚書』には「先年浅井玄蕃居城之由、今ハ百姓屋敷ニ成」と記されており、『尾張志』にも、「今城跡に林平という農民住て其末孫也といへり」という記述が見られる。『寛文村々覚書』の編纂が江戸時代前半の寛文年間（1661～1673）であることから、毛受城が築かれた場所は、江戸時代の初期にはすでに農家の屋敷地へと替わっていたようである。

次に、発掘成果を見ていく。戦国期の遺構から出土した遺物から、検出された屋敷地を区画する大溝は、古瀬戸後Ⅳ期段階～大窯第1段階（15世紀後期後葉～16世紀前期）を中心に展開しており、大窯第3段階（16世紀半ば）には終息していたと考えられる。

以上のことから、今回の調査において居館趾と想定される区画については、次のような点が考えられる。

①該期の遺構から出土した遺物の所属時期の消長から見て、毛受城の存続時期とは明らかに年代のズレが生じているといえる。このことから、毛受城が築かれる以前の当地を治めていた国人クラスの在地領主の居館が築かれていたと考えられる。そして浅井玄蕃によって当地に毛受城が築かれたことにより、それまでの機能を失い、廃絶されたと見られる。

この視点に立った場合、当地を支配していた在地領主として考えられるのが、『尾張名所図絵』に描かれている「義教公詠歌の松」⁶⁾に登場する鵜飼頼定を祖とする鵜飼氏である。鵜飼氏が当地に住み始めたのは、応永元（1394）年に頼定が「七十余反の別業の地」をこの地に開いたことに始まると見られる。そして永禄元（1558）年の浮野合戦の際には、6代鵜飼勝孝が織田信長に兵糧を送り恩賞を受けたという記録や、慶長13（1608）年「頃には鵜飼毛受家の敷地は三反余に縮地され、金剛寺の西に隣り三方に築地があつて南側に門を存し」⁷⁾ていたことなどから、15世紀前後くらい～16世紀代（半ばくらい）までは、この鵜飼氏が在地領主としてこの地域を支配していたと考えられる。しかし、文献史料などの諸資料の裏付けに欠けているため、戦国期の鵜飼氏の動向について

は今後検討をしていかななくてはならない。

また、毛受城趾が、江戸時代初期の段階で、農家の屋敷地となっていたという後世の伝承記録などから、毛受城の築城場所は、本遺跡とは別の地点（現在の毛受集落内か？）であったと思われる。

②該期の遺物の消長から見て、毛受城が築かれたと見られる16世紀半ばに「場の機能」が変化したと考えられる。すなわち16世紀前半頃までは在地領主の居住空間であった場が、毛受城の築城に伴って惣構の中に取り込まれたことにより、非居住空間へと変化したと見るものである。このことは16世紀後半（大窯第3段階・第4段階）に属する出土遺物が、遺跡全体を見ても、16世紀前半（大窯第1段階・第2段階）に比べて急激に少量化しており、また屋敷地を囲む区画溝からはほとんど出土していないことから窺うことができる。したがってこの時期にはそれまでの溝はすでに埋没していたと考えられる。しかし出土遺物が少量であることや、遺構が稀薄であることから、具体的な空間機能を想定することは難しい。

3 C期の遺構・遺物の様相

A 遺構の展開

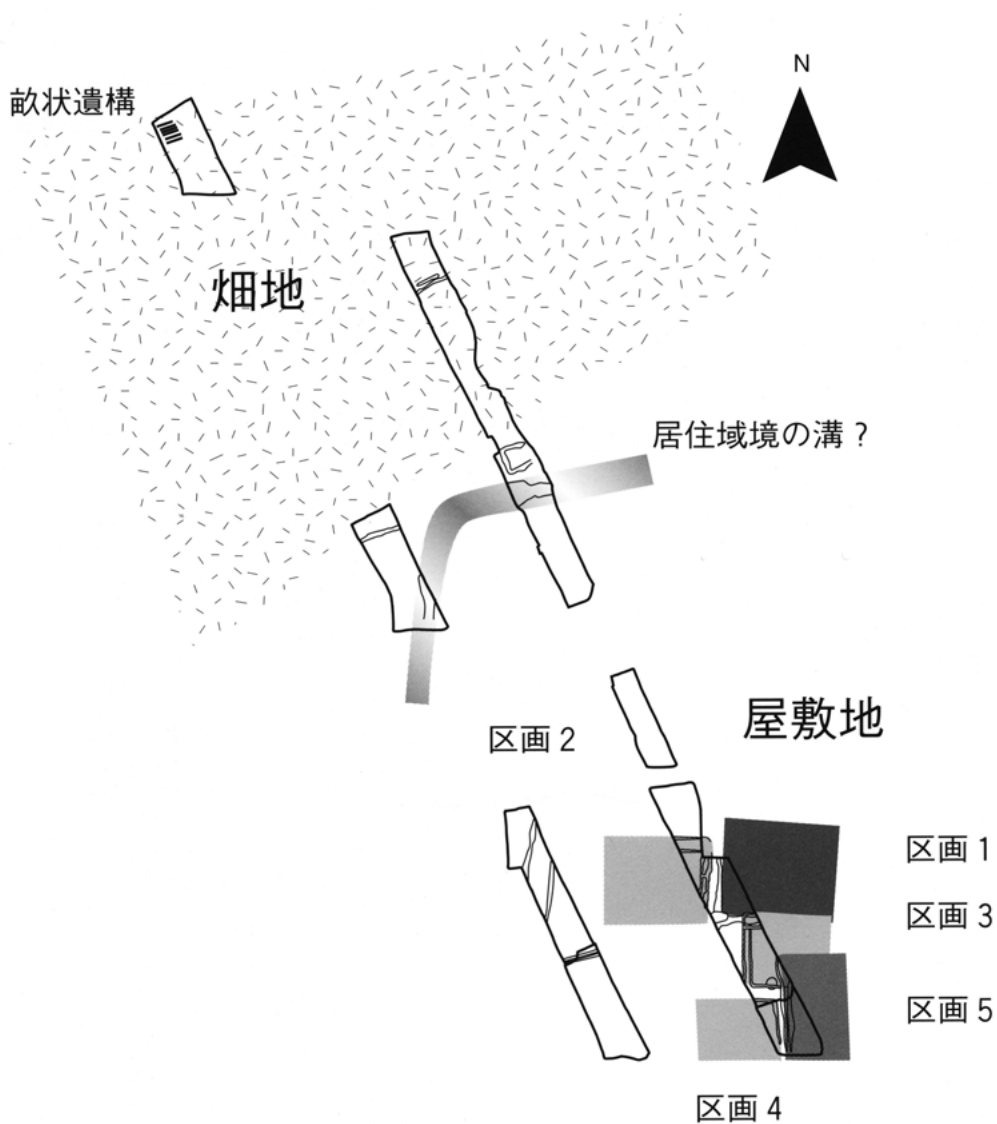
主にC区を中心に展開する。この付近では幅1m前後の溝が方形に巡り、区画を形成していることから該期には屋敷地が広がっていたと思われる。今回の調査区においては、屋敷地として5つの区画が想定できる（第50図）。これらの区画は、いずれも主軸はほぼ南北方向であり、また遺構の前後関係から、区画1が最も古く、区画5が最も新しいことが窺える。検出した溝はいずれも調査区外へ延びているため、東西方向の区画の規模は確認し得ないが、南北方向については、大きいもので15m～20m程度の長さを測る。調査区の南端で溝が収束してしまうのは、後世の削平を受けたためと見られる。これらの溝は、出土遺物から、18世紀後半頃には掘削されていたと考えられる。またAa区では畝状遺構が検出されたことから、この付近では、近世後半段階には畑地が広がっていたと思われる。これらのことは天保12（1841）年に描かれた村絵図からも裏付けられる（第52図）。

今回の調査では、近世（江戸時代）後半期における毛受村の集落の西端を確認できたといえる。

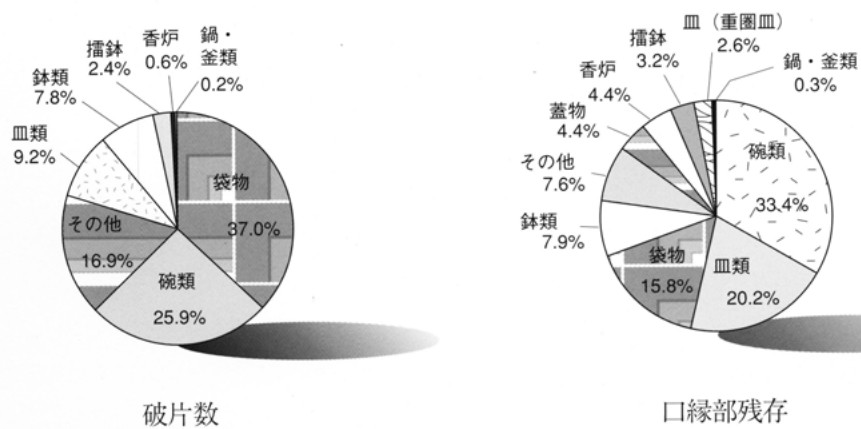
B 遺物の様相

陶器類は、近世期のものがもっとも多くを占める。各器類（器種）の出土割合を戦国期と比べてみると、播鉢の比率がかなり少なくなっており（3.4%）、小皿類も10%程度に減少している。逆に碗類・鉢類の割合が増えている。口縁部残存率でも、碗類114、皿類69、鉢類27であった。また赤物と呼ばれる常滑産の甕などの大形の袋物製品（壺・甕類）が比較的多い。

戦国期の屋敷地が廃絶されて間もない17世紀前半頃には、一時的に遺物の量が減少していることから、このあたりは集落の周縁部であったと考えられる。しかし毛受の集落が西に展開してくる18世紀代になると、再び遺物の量は増加し、器種構成も豊富になってくる。このことは、該期の遺構が調査区内に展開していることから明らかである。周辺が毛受集落の日常的な生活領域となっていたことによるためであろう。



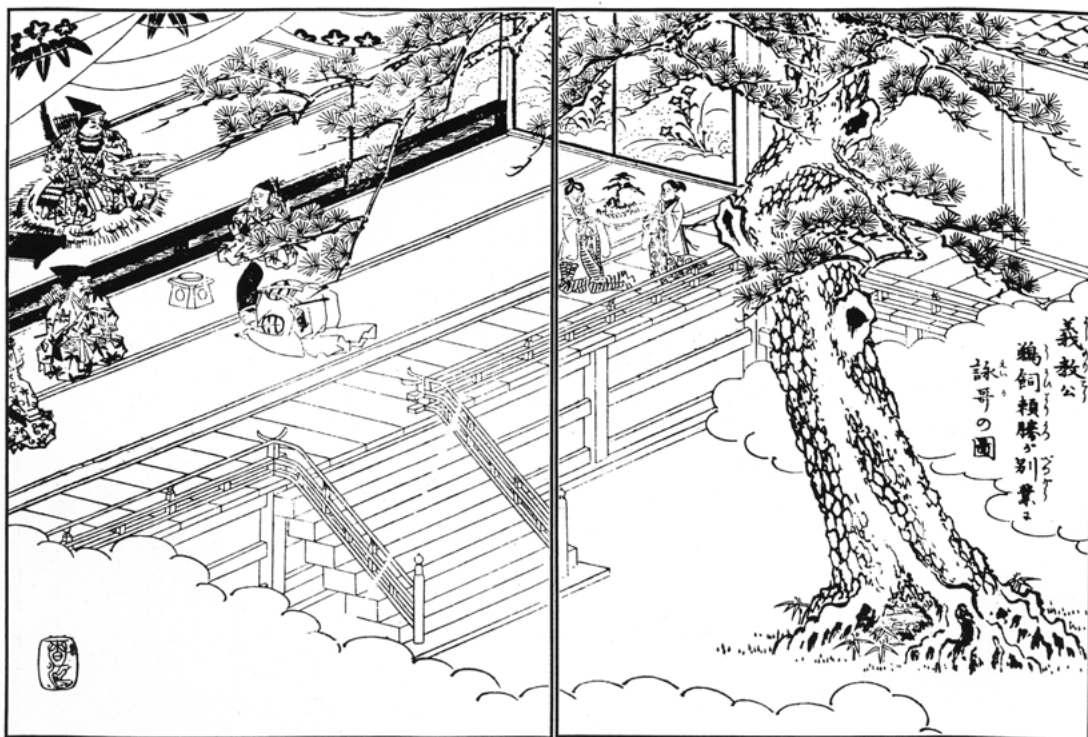
第 50 図 C 期遺構配置図



第 51 図 C 期遺物組成図

<注・参考文献>

- 1) 樋上 昇 1997 「八王子遺跡」『年報』平成8年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター
- 2) 千田嘉博氏のご教示による。
- 3) 小島道裕 1997 『城と城下』 新人物往来社
- 4) 千田嘉博 1991 「村の城館をめぐる五つのモデル」『年報 中世史研究』第16号 中世史研究会
前川 要 1999 「考古学から見た戦国期城下町の原型」『歴史地理学』第41巻1号
- 5) 藤澤良祐 1991 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」石井 進・萩原三雄編『中世と城の考古学』
新人物往来社
- 6) 「義教公詠歌の松」は、室町幕府第6代將軍足利義教が永享4(1432)年の富士遊覧の帰途に、毛受村の頼
定の館に立ち寄った場面を描いたものである
- 7) 毛受英次 1983・『鶴飼毛受家譜』
また、鶴飼氏については、毛受英彦氏より、多くの有益な助言をいただいた。
- 8) 徳川林政史研究所須田 肇氏の御厚意により、同研究所所蔵の『中島郡浜田庄毛受村村絵図』を実見さ
せていただいた。



「義教公詠歌の図」『尾張名所図絵』より

第Ⅵ章 まとめ

今回の毛受遺跡の調査において得られた成果を各時期毎にまとめる。

1 A期…遺構の展開はほとんど見られなかったが、古墳時代の土師器、須恵器、古代の灰釉陶器、中世の灰釉系陶器と、幅広い時代時期にわたって遺物が出土した。このことから、当地周辺では、古墳時代の早い段階には人々の生活が営まれていたと見られる。また多くの破片点数の出土を見た灰釉系陶器のあり方から、近隣に中世村落の存在が示唆される。なお、中世の様相については、本遺跡の南約1kmに所在する八王子遺跡の該期の様相とも絡めて考えていく必要がある。

2 B期…東西約1町、南北約半町の規模をもつ区画を主郭として、その南に幾つかの屋敷地が展開していたことが確認できた。出土遺物からこれらの遺構の消長時期のピークは15世紀後半～16世紀前半代と考えられる。これに対し、遺跡の名称に関わる毛受城は、『尾陽雜記』や『寛文村々覚書』などの記載事項から16世紀後半に想定される。すなわち、調査の結果得られた時期と、伝承されている毛受城が築城された想定時期とは年代観上のズレが見られた。それに対する考え方として以下の2点が提示できる。

①16世紀前半頃までは、当地を支配していた在地領主（鶴飼氏？）の居館を主郭とする屋敷地が展開していたが、毛受城が築城されると同時に廃絶されたと考えられる。

②在地領主層の屋敷地の区画が、16世紀半ば頃の毛受城築城にともない、その惣構の中に取り込まれた。そのため日常的な場から、非日常的な場へと機能が変化したと考えられる。

3 C期…近世後半段階における毛受村の広がり西端を確認することができた。



毛受村の猿曳の図（『尾張名所図絵』より）

1 遺構一覧表

* () は、調査区内で確認できた最大計測値

* < > は、復元推定値

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧遺構番号	備考
A	SD01	IXG14o・15o-	(1160)	80	9	C	95Aa-SD01	
A	SD02	IXG14m・14n	389	68	20	C	95Aa-SD02	
A	SD03	IXG14m・14n	(410)	32	19	C	95Aa-SD03	
A	SD04	IXG13m・14m	204	22	17	C	95Aa-SD04	
A	SD05	IXG13m・14m	309	31	17	C	95Aa-SD05	
A	SD06	IXG13m・14m	402	50	16	C	95Aa-SD06	
A	SD07	IXG14m・14n	360	28	18	C	95Aa-SD07	
A	SD08	IXG14m・14n	335	26	16	C	95Aa-SD08	
A	SD09	IXG16o	152	16	-		95Aa-SD09	
A	SD10	XH15c	(257)	52	14		95Ab-SD10	
A	SD11	XH14d・15d	(454)	38	-		95Ab-SD11	
A	SD12	XH14d・15d	487	12	11		95Ab-SD12	
A	SD13	XH14d-	(650)	53	17		95Ab-SD13	
A	SD14	XH15d・15e-	(1090)	76	20		95Ab-SD14	
A	SD15	XH17g・17h-	(1100)	280	12		95Ab-SD15	
A	SD16	ITH17o-	(975)	130	10		95Ac-SD16	96B-SD0
A	SD17	ITH18o-	(950)	115	11		95Ac-SD17	96B-SD10
A	SD18	ITH18p-	(445)	(218)	40		95Ac-SD18	
A	SD19	ITH19p-	(2020)	87	5		95Ac-SD19	
A	SD20	ITH19p-	(1880)	230	42	B	95Ac-SD20	
A	SK01	IXG13m	123	29	16		95Aa-SK01	
A	SK02	IXG14n	99	74	22		95Aa-SK02	
A	SK03	IXG14n	-	(44)	-		95Aa-SK03	
A	SK04	IXG13m	74	32	8		95Aa-SK04	
A	SK05	IXG14o	-	80	10		95Aa-SK05	
A	SK06	IXG15o	83	73	15		95Aa-SK06	
A	SK07	IXG15n	69	62	13		95Aa-SK07	
A	SK08	IXG14m	50	49	21		95Aa-SK08	
A	SK09	IXG16o	46	22	6		95Aa-SK09	
A	SK10	IXG17n	79	46	20		95Aa-SK10	
A	SK11	IXG17n-	(226)	(124)	28		95Aa-SK11	
A	SK12	IXG16n-	280	(100)	-		95Aa-SK12	
A	SK13	IXG17p	69	52	33		95Aa-SK13	
A	SK14	IXG14n	(280)	189	-		95Aa-SK14	
A	SK15	IXG15n	125	105	15		95Aa-SK15	
A	SK16	IXG15p	48	37	11		95Aa-SK16	
A	SK17	IXG17p	53	38	36		95Aa-SK17	
A	SK18	IXG17o	103	71	30		95Aa-SK18	
A	SK19	IXG16n	(204)	(114)	24		95Aa-SK19	
A	SK20	XH15d	42	34	15		95Ab-SK20	
A	SK21	XH15d	166	56	26		95Ab-SK21	
A	SK22	XH18f・18g	66	60	6		95Ab-SK22	
A	SK23	XH20e・20f	(290)	(295)	40		95Ab-SK23	
A	SK24	IH18p	190	190	63		95Ac-SK24	

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧遺構番号	備考
B	SD01	IHI1K-	(883)	105	30			

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧遺構番号	備考
B	SD02	IH11l-	(690)	47	8			
B	SD03	IH11k・12k	410	40	6			
B	SD04	IH12n-	(1550)	(113)	32			
B	SD05	IH17n-	(400)	152	12			95A-SD16
B	SD06	IH16n-	(900)	120	12			
B	SD07	IH10l-	(480)	96	9			
B	SD08	IH12l-	(1300)	185	22			
B	SD09	IH11m-	(318)	(45)	-			
B	SD10	IH17n-	(135)	(155)	21			95A-SD17
B	SD11	IH10k-	(960)	(190)	70	B		
B	SD12	IH11m-	(1600)	(180)	146	B		
B	SD13	IH12n・13n	(415)	(80)	68	B?		
B	SK01	IH11l	153	105	29			
B	SK02	IH16m・16n-	(356)	(146)	57			
B	SK03	IH12k	(156)	136	30			
B	SK04	IH13k・13l-	(172)	(106)	15			
B	SK05	IH13l・14l-	(495)	(151)	4			
B	SK06	IH14m	70	56	17			
B	SK07	IH14m	(186)	(143)	12			
B	SK08	IH10k	65	52	10			
B	SK09	IH11l	44	42	13			
B	SK10	IH10l	62	28	13			
B	SK11	IH12l	65	54	10			
B	SK12	IH13m	59	44	17			
B	SK13	IH13m	(50)	(38)	5			
B	SK14	IH13m	83	72	25			
B	SK15	IH15n	120	73	40			
B	SK16	IH15n	126	107	73			
B	NR01	IH11m-	(1640)	(205)	28			

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧調査区	備考
C	SD01	I117e-Ⅱ12f	(2510)	74	35	C	96Ca・Cb	
C	SD02	I120d-Ⅱ12e-	(1780)	76	33	C	96Ca・Cb	
C	SD03	I116d-Ⅱ119d-	(2970)	59	18	C	96Ca	
C	SD04	I118e・18f	(432)	53	16		96Ca	
C	SD05	I119d-	(530)	58	13		96Ca	
C	SD06	I115d-	(1780)	50	16	C	96Ca	
C	SD07	I117d-	(640)	35	10		96Ca	
C	SD08	I117e	260	21	9		96Ca	
C	SD09	I115b-	(1155)	171	30		96Ca	
C	SD10	I117c-	(335)	29	7		96Ca	
C	SD11	I119f-Ⅱ12f	(1870)	120	38	C	96Ca・Cb	
C	SD12	I112b-	(1460)	180	32	C	96Ca	
C	SD13	I112b-	(1200)	128	23	C	96Ca	
C	SD14	IH12t-	(1020)	82	22	C	96Ca	
C	SD15	IH12t-	(620)	122	18	C?	96Ca	
C	SD16	IH11t-	(592)	111	28	C?	96Ca	
C	SD17	I19a-	(1750)	780	236	B	96Ca	
C	SD18	IH3g-	(1890)	720	150	B	96Ca	
C	SD19	IH5r-	(380)	271	38	A	96Ca	
C	SD20	I116b-	(1115)	320	54	B	96Ca	
C	SD21	I112a-	?	(600)	38	C	96Ca	
C	SD22	Ⅱ11e	405	41	12		96Ca	
C	SD23	Ⅱ11g・2g	615	48	7		96Ca	

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧調査区	備考
C	SD24	I120e-	(900)	670	18	B	96Ca	
C	SK01	II118e・19e	316	282	150	C	96Ca	井戸
C	SK02	II15b	(406)	268	50		96Ca	
C	SK03	II114b・15b	(103)	137	15		96Ca	
C	SK04	II118f・19f	148	122	25		96Ca	
C	SK05	II15d	72	59	14		96Ca	
C	SK06	II19d	(106)	(58)	(14)		96Ca	
C	SK07	II18d	106	83	12		96Ca	
C	SK08	II17e	33	30	7		96Ca	
C	SK09	II16c	159	105	17		96Ca	
C	SK10	II15c	71	50	16		96Ca	
C	SK11	II15c	62	47	10		96Ca	
C	SK12	II15c	61	52	18		96Ca	
C	SK13	II18d	74	62	15		96Ca	
C	SK14	II11e	64	56	10		96Cb	
C	SK15	II11g	82	60	37		96Cb	
C	SK16	II11g	94	54	34		96Cb	
C	SK17	I120f- II11f-	(150)	182	30		96Cb	
C	SK18	I120f	(210)	230	116	C	96Cb	井戸
C	SK19	I120e・II11e	235	222	42		96Cb	

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧遺構番号	備考
D	SD01	IX H13k-	(1055)	670	73	C		
D	SD02	X H10k・11k-	(1850)	125	14			
D	SD03	X H2g・1h-	(468)	311	102			
D	SD04	X H2g・1h	312	82	12			
D	SD05	X H9j-	(815)	107	30			
D	SD06	X H9j-	(815)	1020	207	B		
D	SD07	X H7i・7j	614	184	104	B		
D	SK01	X H3h・4h	536	250	40			
D	SK02	X H2h	540	330	50			
D	SK03	X H2g	204	163	18			
D	SK04	X H1f・1g-	58	26	16			
D	SK05	X H1111	32	112	54			
D	SK06	X H12m	(100)	(50)	36			
D	SK07	X H8k	260	(194)	19			
D	SK08	X H12k・12l	(280)	(130)	11			
D	SK09	X H2g・3g	442	190	35			
D	SK10	X H7i	464	(188)	56			
D	SK11	X H17o	172	169	51			
D	SK12	X H17o	280	(180)	23	B		
D	SB01-P1	X H15m	71	71	9	B	Pit1	礎板有り
D	SB01-P2	X H15n	81	70	22	B	Pit2	
D	SB01-P3	X H15n	<74>	62	42	B	Pit3	礎板有り
D	SB01-P4	X H16m	108	86	24	B	Pit4	礎板有り
D	SB01-P5	X H16n	102	84	83	B	Pit5	
D	SB01-P6	X H16m	<81>	62	40	B	Pit6	
D	SB01-P7	X H16n	88	70	10	B	Pit7	礎板有り
D	SB01-P8	X H16n	127	96	38	B	Pit8	礎板有り
D	SB01-P9	X H16n	108	72	17	B	Pit9	
D	P10	X H16o	126	105	36	B	Pit10	
D	SB01-P11	X H16m	<136>	<120>	24	B	Pit11	礎板有り

2 遺物一覧表

A期の遺物

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
10	1	C-SD18	土師器	壺	推23.2	残2.3		刺突羽状紋	刺突羽状紋	黄褐色		E-1	96Ca
10	2	C-SD17	土師器	壺		残2.8		ナデ	ナデ	灰白色		E-2	96Ca
10	3	A-検出	土師器	高坏		残3.9		ナデ	ナデ	淡黄色		E-3	95Aa
10	4	C-SD17	土師器	高坏		残7.4		紋り	ナデ	淡黄褐色		E-4	96Ca
10	5	C-トンチ	須恵器	高坏		残5.5		横ナデ	横ナデ、回転ヘラケズリ				
10	6	C-検出	灰釉系陶器	碗	推14.6	残5.2	推6.2	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕、モミ痕	灰白色		E-6	
10	7	A-検出	灰釉系陶器	皿	8	1.4	4.9	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰白色		E-7	95Ac
10	8	A-検出	灰釉系陶器	皿	推7.6	1.2	推4.6	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰白色		E-8	95Ac
10	9	B-SD12	灰釉系陶器	皿	推8.6	残2.2	推4.4	横ナデ	横ナデ	灰白色		E-9	
10	10	C-トンチ	灰釉系陶器	皿	推9.4	残1.4	推5.7	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰白色		E-10	
10	11	C-検出	灰釉系陶器	皿	推8.8	残1.8	推5.0	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰色		E-11	
10	12	C-SD17	灰釉系陶器	皿	推7.6	0.8	推4.6	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰白色		E-12	96Ca
10	13	C-SD17	灰釉系陶器	皿	推7.4	残1.0	推5.4	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰白色		E-13	96Ca
10	14	C-SD17	灰釉系陶器	皿	推7.6	残1.3	推4.6	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰白色		E-14	96Ca
10	15	C-SD21	灰釉系陶器	皿	推7.4	残2.0	推2.4	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰白色		E-15	96Ca
10	16	C-SK01	灰釉系陶器	皿	推7.6	残2.0	推4.0	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	灰白色		E-16	96Ca

B期の遺物

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
12	17	B-SD11	土師器	皿	推5.8	残1.0	推4.1	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	灰白色	非ロクロ成形	E-17	
12	18	B-SD11	土師器	皿	6.3	0.8	5.3	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	灰白色	非ロクロ成形		
12	19	B-SD11	土師器	皿	6	1.1	5	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	ニブイ黄褐色	非ロクロ成形	E-18	
12	20	B-SD11	土師器	皿	6.2	4	1.1	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	灰白色	非ロクロ成形	E-19	
12	21	B-SD11	瀬戸美濃	描鉢		残5.7	推9.6	鉄釉	鉄釉	ニブイ黄褐色		E-20	
12	22	B-SD11	瀬戸美濃	描鉢		残6.7	推10.4	鉄釉	鉄釉	浅黄褐色		E-21	
12	23	B-SD11	瀬戸美濃	描鉢	推31.0	残2.7		鉄釉	鉄釉	灰白色		E-22	
12	24	B-SD11	瀬戸美濃	匣鉢		残5.8	推14.1	無釉、露胎	無釉、露胎、回転糸切痕?	ニブイ褐色		E-23	
12	25	B-SD11	瀬戸美濃	縁軸小皿		残0.9	4.8	無釉	無釉、回転糸切痕	灰白色		E-24	
12	26	B-SD11	常滑	甕		残19.2		鉄釉	鉄釉	ニブイ赤褐色		E-25	
12	27	B-SD11	木	折敷底板	残長21.3		残幅2.7				孔4ヶ所	W-1	
12	28	B-SD11	木	十字形木製品	残長20.6		残幅2.5				孔4ヶ所	W-2	
12	29	B-SD11	木	十字形木製品	残長20.8		残幅2.3				孔2ヶ所	W-3	
13	30	B-SD12	瀬戸美濃	口広有耳壺	推11.1	残5.3		鉄釉	無釉	浅黄褐色		E-26	
13	31	B-SD12	瀬戸美濃	描鉢	推28.8	残3.8		鉄釉	鉄釉	灰白色		E-27	
13	32	B-SD12	瀬戸美濃	描鉢	推30.0	残3.4		鉄釉	鉄釉	灰白色		E-28	
13	33	B-SD12	木	木胎漆器碗		残7.8	推9.0	赤色漆	黒色漆、底面刻書			W-4	
14	34	C-SD17	銅	紅皿	4.4	1.6	1.7					M-1	96Ca
14	35	C-SD17	瀬戸美濃	重圈皿	推9.6	残2.2		無釉	無釉	灰白色	同心円の圈線4本	E-29	96Ca
14	36	C-SD17	土師器	皿	推6.0	残0.9		指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	ニブイ黄褐色	非ロクロ成形	E-30	96Ca
14	37	C-SD17	土師器	皿	推12.4	2.4	6	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	ニブイ褐色	ロクロ成形	E-31	96Ca
14	38	C-SD17	中国・青花	碗		残1.9	推4.9	青花	白磁(青花?)	白色	碗1類	E-32	96Ca
14	39	C-SD17	木	木胎漆器碗	推13.5	6.2	6.8	赤色漆	黒色漆、文様赤色漆、底面刻書			W-5	96Ca
15	40	C-SD18	土師器	皿	推6.2	1	5.1	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	ニブイ黄褐色	非ロクロ成形	E-33	96Ca
15	41	C-SD18	土師器	皿	6	1.1	5.1	指押サエ後、ナデ、タール	指押サエ、横ナデ	灰白色	非ロクロ成形	E-34	96Ca
15	42	C-SD18	土師器	皿	推6.3	残0.9	推5.4	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	灰白色	非ロクロ成形	E-35	96Ca
15	43	C-SD18	土師器	皿	推6.4	残1.0	推5.4	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	ニブイ褐色	非ロクロ成形	E-36	96Ca
15	44	C-SD18	土師器	皿	推7.0	残0.9	推4.2	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	灰白色	非ロクロ成形	E-37	96Ca
15	45	C-SD18	土師器	皿	推6.8	0.9	5.1	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	灰白色	非ロクロ成形	E-38	96Ca
15	46	C-SD18	土師器	皿	6.4	1	5.7	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	ニブイ褐色	非ロクロ成形	E-39	96Ca
15	47	C-SD18	土師器	皿	推6.5	残1.1	推6.1	指押サエ後、ナデ	指押サエ、横ナデ	灰白色	非ロクロ成形	E-40	96Ca
15	48	C-SD18	土師器	皿	10.8	2.1	5.6	横ナデ、タール	横ナデ、回転糸切痕	浅黄褐色	ロクロ成形	E-41	96Ca
15	49	C-SD18	土師器	皿	12.4	2.2	5.9	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	浅黄褐色	ロクロ成形	E-42	96Ca
15	50	C-SD18	土師器	皿	推12.8	残2.3	推7.1	横ナデ	横ナデ、回転糸切痕	ニブイ褐色	ロクロ成形	E-43	96Ca
15	51	C-SD18	中国・青磁	蓮弁紋碗		残2.7		青磁	青磁	灰色		E-44	96Ca
15	52	C-SD18	瀬戸美濃	腰折皿	推9.4	残1.7		灰釉	灰釉、露胎	灰白色		E-45	96Ca
15	53	C-SD18	瀬戸美濃	描鉢		残6.6	推9.2	鉄釉	鉄釉	灰白色		E-46	96Ca
15	54	C-SD18	瀬戸美濃	描鉢		残9.7	推8.9	鉄釉	鉄釉	灰白色		E-47	96Ca
15	55	C-SD18	石	砥石	残長9.0		残幅3.3		被熱		凝灰岩	S-1	96Ca
15	56	C-SD18	木	木胎漆器碗		残9.5	推8.8	赤色漆	黒色漆、文様赤色漆			W-6	96Ca
15	57	C-SD18	木	木胎漆器碗		残2.5	推7.8	赤色漆	黒色漆、文様赤色漆			W-7	96Ca
15	58	C-SD18	木	角柱状木製品	長9.8	厚1.5	幅2.6					W-8	96Ca

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
15	59	C-SD18	木	棒状木製品	残長15.3		径2.4					W-9	96Ca
15	60	C-SD18	木	木箱(指物)	長16.6		幅3.4				孔7ヶ所、 木釘16ヶ所	W-10	96Ca
15	61	C-SD18	木	結桶側板	長14.5		幅7.9		刃圧痕		柁目板	W-11	96Ca
16	62	C-SD18	木	結桶側板	長14.8		幅5.8	被熱	刃圧痕、被熱		柁目板	W-12	96Ca
16	63	C-SD18	木	結桶側板	長14.5		幅6.0	被熱	刃圧痕、被熱		柁目板	W-13	96Ca
16	64	C-SD18	木	結桶側板	長14.2		幅4.8	被熱	刃圧痕、被熱		柁目板	W-14	96Ca
16	65	C-SD18	木	子猿形木製品	長18.8		幅4.0				孔1ヶ所	W-15	96Ca
16	66	C-SD18	木	不明木製品	残長20.4	厚6.8	幅7.0		被熱		木釘1ヶ所	W-16	96Ca
16	67	C-SD20	木	卒塔婆	残長45.0		幅5.6		墨書痕有り			W-17	96Ca
16	68	C-SD20	木	板財	残長51.2		残幅10.8				孔3ヶ所	W-18	96Ca
17	69	D-SB01	土師器	皿	6.6	1.1	4.2	指押 [#] 後、+デ	指押 [#] 、横+デ	灰白色	非ロクロ成形	E-48	Pit07
17	70	D-SD06	中国・青磁	椀花皿	推12.0	残2.4		青磁	青磁	灰色		E-49	
17	71	D-SK12	瀬戸美濃	描鉢		残6.4	8.9	鉄軸	鉄軸	浅黄橙色		E-50	
18	72	D-検出	中国・青花	碗		残長2.0		青花	青花、毛彫	白色		E-51	
18	73	D-検出	中国・青花	端反皿		残長1.8		青花	青花	白色		E-52	
18	74	D-SD01	中国・青花	端反皿		残長1.8		青花	青花	白色		E-53	
18	75	D-検出	中国・青磁	椀皿		残1.1		青磁	青磁	灰白色		E-54	
19	76	A-SD20	中国・青磁	蓮弁紋碗	推15.4	残4.3		青磁	青磁	灰色		E-55	95Ac

C期の遺物

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
19	77	A-トレン	瀬戸美濃	広東茶碗		残3.9	5.9	灰軸、呉須絵	灰軸、呉須絵	灰白色		E-56	95Ac
19	78	A-検出	不明陶器	丸碗		残1.3	3.4	灰軸	灰軸、高台部露胎、底面に墨書	灰白色	瀬戸美濃窯以外	E-57	95Ac
19	79	A-検出	瀬戸美濃	戸車	"径7.5"	1.6		灰軸	灰軸	灰白色		E-58	95Ac
19	80	B-SD01	瀬戸美濃	天目茶碗	推12.3	残3.8		鉄軸	鉄軸	灰白色		E-59	
19	81	C-SD02	瀬戸美濃	丸形湯呑茶碗	推9.2	残4.8		鉄軸	鉄軸	灰白色		E-60	96Ca
19	82	C-表土剥き	瀬戸美濃	腰折碗		残4.7	4.4	灰軸	灰軸、高台部露胎	灰白色		E-61	96Ca
19	83	C-SD21	肥前・青磁	皿	推12.2	3	推7.3	青磁	青磁、底面露胎、 回転糸切痕	灰白色		E-62	96Ca
19	84	C-表土剥き	瀬戸美濃	香炉	推10.5	6.2	推10.1	灰軸	灰軸	灰白色		E-63	96Ca
19	85	C-SK19	瀬戸美濃	香炉	10.2	5.8	7.4	灰軸	灰軸	灰白色		E-64	96Cb
19	86	C-検出	瀬戸美濃	丸碗	12.1	5.8	4	長石軸	麦藁手文様	灰白色		E-65	96Ca
19	87	C-SD02	瀬戸美濃	丸碗	推12.0	8.2	4.9	灰軸	灰軸、高台部露胎、 回転糸切痕	灰白色		E-66	96Ca
19	88	C-SK19	瀬戸美濃	釜	推13.4	残3.5		無軸、タール	無軸、タール	ニブイ黄橙色		E-67	96Cb
19	89	C-表土剥き	関西系陶器	鉢	推19.8	残3.8		透明軸	透明軸	浅黄色		E-68	96Cb
19	90	D-SD01	瀬戸美濃	織部向付		残1.5	推7.8	長石軸	長石軸、鉄絵	灰白色		E-69	

加工円盤

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	転用器種	長軸 (cm)	短軸 (cm)	重量 (g)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
24	91	A-検出	瀬戸	鉢類?	2	1.7	2.7	鉄軸	鉄軸			E-70	95Aa
24	92	A-検出	瀬戸	甕	2.7	2.6	8.5	鉄軸	鉄軸			E-71	95Aa
24	93	A-検出	瀬戸	描鉢	2.8	2.2	8.2	鉄軸	鉄軸			E-72	95Aa
24	94	A-表土剥き	瀬戸	描鉢	2.8	2.6	8.5	鉄軸	鉄軸			E-73	95Ab
24	95	A-表土剥き	瀬戸	描鉢	2.8	2.4	8.1	鉄軸	鉄軸			E-74	95Ab
24	96	A-検出	瀬戸	描鉢	2.2	2.1	4.2	鉄軸	鉄軸			E-75	95Ab
24	97	A-検出	瀬戸	描鉢	2.3	2.2	4.5	鉄軸	鉄軸			E-76	95Ab
24	98	A-表土剥き	瀬戸美濃	甕	3.2	3.1	12.5	鉄軸	鉄軸			E-77	95Ac
24	99	A-トレン	瀬戸	描鉢	3.3	3.2	15.5	鉄軸	鉄軸			E-78	95Ac
24	100	A-検出	瀬戸	湯呑茶碗(ながの)	2.5	2.6	3.6	灰軸	灰軸			E-79	95Ac
24	101	A-検出	瀬戸	甕	2.3	2.2	4.4	鉄軸	鉄軸			E-80	95Ac
24	102	A-検出	瀬戸	描鉢	2.8	2.2	6.4	鉄軸	鉄軸			E-81	95Ac
24	103	A-検出	瀬戸美濃	碗類	2.4	1.9	4.4	灰軸	無軸(露胎)			E-82	95Ac
24	104	A-検出	瀬戸	碗類	2.4	2.1	3.7	鉄軸	鉄軸(一部露胎)			E-83	95Ac
24	105	A-検出	美濃	瓦	3.6	2.8	10.4					E-84	95Ac
24	106	A-検出	瀬戸	箱形湯呑茶碗	2.8	3.1	5.6	灰軸	灰軸			E-85	95Ac
24	107	A-検出	美濃	箱形湯呑茶碗	2	1.9	2.6	灰軸	灰軸			E-86	95Ac
24	108	A-検出	瀬戸美濃	描鉢	1.9	1.5	3.1	鉄軸	鉄軸			E-87	95Ac
24	109	A-検出	瀬戸	描鉢	2.2	2.3	6.7	鉄軸	鉄軸			E-88	95Ac
24	110	A-検出	美濃	黄瀬戸鉢	2.9	3.1	9.9	灰軸	灰軸			E-89	95Ac
24	111	A-検出	瀬戸美濃	鉢類	2.8	2.6	9.2	灰軸	灰軸			E-90	95Ac
24	112	A-検出	瀬戸美濃	碗類	2.6	2.2	3.3	灰軸	灰軸			E-91	95Ac
24	113	A-検出	瀬戸美濃	鍔湯呑茶碗	3.4	2.3	6.5	灰軸	無軸			E-92	95Ac
24	114	A-SD20	瀬戸美濃	描鉢	1.8	3.5	4.3	鉄軸	鉄軸			E-93	95Ac
24	115	B-検出	常滑	甕	2.8	2.2	11.7	無軸	無軸	赤物		E-94	96B

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	転用器種	長軸 (cm)	短軸 (cm)	重量 (g)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
24	116	B-SD01	瀬戸美濃	搥鉢	2.1	2.3	5	鉄軸	鉄軸			E-95	96B
24	117	C-表土剥き	美濃	小碗	4.8	4.5	32.5	鉄軸	無軸(露胎)			E-96	96Ca
24	118	C-トレンナ	常滑?	甕?	1.8	1.6	5.2	無軸	鉄軸			E-97	96Ca
24	119	C-トレンナ	常滑	大型製品	3.4	3	11.8	無軸	無軸	赤物		E-98	96Ca
24	120	C-検出	美濃	壺類?	2.1	2.3	4.7	灰軸	灰軸			E-99	96Ca
24	121	C-検出	瀬戸美濃	盤類	2.3	2.5	6.7	灰軸	無軸			E-100	96Ca
24	122	C-検出	瀬戸	甕	1.9	1.8	4.1	鉄軸	鉄軸			E-101	96Ca
24	123	C-SD03	瀬戸美濃	碗類	1.9	2.2	3.4	灰軸	灰軸(一部露胎)			E-102	96Ca
24	124	C-SD04	瀬戸	搥鉢	2.5	2.3	10.6	鉄軸	鉄軸			E-103	96Ca
24	125	C-SD07	常滑	甕	2.2	1.9	10.5	無軸	無軸			E-104	96Ca
24	126	C-SD09	瀬戸美濃	天目茶碗	4.3	4.3	24.4	鉄軸	無軸(露胎)			E-105	96Ca
24	127	C-SD16	瀬戸美濃	搥鉢	1.1	1.1	4.1	鉄軸	鉄軸			E-106	96Ca
24	128	C-SD16	瀬戸美濃	搥鉢	2	1.6	5	鉄軸	鉄軸			E-107	96Ca
24	129	C-SK01	瀬戸	湯呑茶碗	1.9	1.7	1.8	灰軸	灰軸			E-108	96Ca
24	130	C-表土剥き	美濃	碗類?	2	1.8	3.3	灰軸	灰軸			E-109	96Cb
24	131	C-表土剥き	瀬戸美濃	搥鉢	3.8	4.4	22	鉄軸	鉄軸			E-110	96Cb
24	132	C-表土剥き	美濃	小杯	5.3	5.3	32.5	灰軸	無軸(高台部露胎)			E-111	96Cb
25	133	C-検出	瀬戸美濃	大型製品	2.5	2.1	9.3	無軸	鉄軸	壺・甕・瓶類		E-112	96Cb
25	134	C-検出	瀬戸	灰軸碗?	5.3	4.2	34.6	灰軸	灰軸			E-113	96Cb
25	135	C-検出	美濃	灰軸碗?	2.4	2.3	6.1	灰軸	灰軸			E-114	96Cb
25	136	C-SD01	瀬戸	搥鉢	2.9	2.7	10.1	鉄軸	鉄軸			E-115	96Cb
25	137	C-SD01	瀬戸	搥鉢	2.9	3.6	11.5	鉄軸	鉄軸			E-116	96Cb
25	138	C-SD11	瀬戸	搥鉢	3.8	4.5	21.7	鉄軸	鉄軸			E-117	96Cb
25	139	C-SK18	瀬戸	腰鉋湯呑茶碗	5.8	3.6	20.9	灰軸	鉄軸(高台端部露胎)			E-118	96Cb
25	140	C-SK19	美濃	徳利	2.1	1.9	4.1	無軸	鉄軸			E-119	96Cb
25	141	D-トレンナ	瀬戸美濃	碗類	2	2.1	2.9	灰軸	灰軸			E-120	96D
25	142	D-検出	瀬戸	搥鉢	2.1	3.1	7.2	鉄軸	鉄軸			E-121	96D
25	143	D-検出		瓦	4.7	4.2	34.2					E-122	96D
25	144	D-検出	瀬戸	搥鉢	2.2	1.9	4.1	鉄軸	鉄軸			E-123	96D
25	145	D-検出	瀬戸美濃	尾呂茶碗	5.1	残3	26.6	鉄軸	無軸			E-124	96D
25	146	D-検出	瀬戸美濃	鉢類	3.6	3.9	17.2	無軸	無軸			E-125	96D
25	147	D-検出	瀬戸	瓶掛	2.5	2	7.2	鉄軸	銅緑軸			E-126	96D
25	148	D-検出	瀬戸	搥鉢	3	3	9.1	鉄軸	鉄軸			E-127	96D
25	149	D-SD01	美濃	鉢類	1.9	2.1	4.2	灰軸	灰軸			E-128	96D
25	150	D-SD01	美濃	鉢類	2.5	2.9	8.6	灰軸	灰軸			E-129	96D
25	151	D-SD01	瀬戸美濃	丸皿or端反皿	3	3	7.3	灰軸	灰軸			E-130	96D
25	152	D-SD01	産地不明	搥鉢	4.1	3.1	10	鉄軸	鉄軸			E-131	96D
25	153	D-SD01	美濃	徳利	2.4	2.4	3.9	無軸	鉄軸			E-132	96D
25	154	D-SD01	瀬戸美濃	鉄鉋壺	2	2	4.2	無軸	鉄軸			E-133	96D
25	155	D-SD01	常滑	甕	2.4	2.2	8.2	無軸	無軸			E-134	96D
25	156	D-SD01	常滑	壺・甕類	3.7	3.6	17	無軸	無軸	赤物		E-135	96D
25	157	D-SD01	美濃	片口鉢	2.4	2.6	5.4	灰軸	灰軸			E-136	96D
25	158	D-SD01	瀬戸美濃	鉢類	3.6	3.5	16	灰軸	灰軸(一部露胎)			E-137	96D
25	159	D-SD01	瀬戸美濃	器種不明	3.3	残1.6	3.7	無軸	灰軸			E-138	96D
25	160	D-SD01	瀬戸美濃	甕	2.6	2.5	9	鉄軸	鉄軸			E-139	96D
25	161	D-SD01	瀬戸	搥鉢	3.4	2.3	8.3	鉄軸	鉄軸			E-140	96D

加工円盤

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	長軸 (cm)	短軸 (cm)	重量 (g)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
25	162	C-SD11	土師器	土製円盤	残3.5	残1.6			指すサエ			E-141	96Cb

擦り痕を有する土器

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	転用器種	長さa (cm)	長さb (cm)	重量 (g)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
25	163	A-検出	瀬戸美濃	搥鉢	3.9	2.5	17.7	鉄軸	鉄軸			E-142	95Ab
25	164	A-検出	瀬戸美濃	搥鉢	4.4	3.4	13.9	鉄軸	鉄軸			E-143	95Ab
25	165	A-検出	瀬戸美濃	搥鉢	5.1	6.1	20.3	鉄軸	鉄軸			E-144	95Ac
25	166	A-検出		瓦	4.3	6.6	40.1					E-145	95Ac
25	167	C-トレンナ	瀬戸美濃	甕	8.5	6.8	45.3	無軸	鉄軸			E-146	96Ca
25	168	C-SK02	常滑	甕	6.6	6.9	77.4	無軸	鉄軸			E-147	6Ca
25	169	C-SK01	瀬戸	搥鉢	4.4	7.3	35.6	鉄軸	鉄軸			E-148	96Ca
25	170	C-SD17	瀬戸	搥鉢	6.8	4.7	35.4	鉄軸	鉄軸			E-149	96Ca
25	171	C-SK01	瀬戸	搥鉢	5.9	4.8	25.5	鉄軸	鉄軸			E-150	96Ca
25	172	C-SK02	瀬戸	火鉢	8.9	6.1	58.3	鉄軸	鉄軸			E-151	96Ca
25	173	C-SD02	瀬戸	搥鉢	6.4	5.4	33.5	鉄軸	鉄軸		内面は使用痕?	E-152	96Ca
25	174	C-SK01	瀬戸	搥鉢	6.7	5.6	29	鉄軸	鉄軸			E-153	96Ca
25	175	C-検出	瀬戸	搥鉢	2.8	3.1	10.7	鉄軸	鉄軸			E-154	96Ca

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	長さa	長さb	重量	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
					(cm)	(cm)							
25	176	C-SK01	瀬戸	搦鉢	5.3	4.4	34.3	鉄釉	鉄釉		底部に磨り跡	E-155	96Ca
25	177	C-検出	瀬戸美濃	搦鉢	2.8	3.2	3.4	鉄釉	鉄釉			E-156	96Ca
25	178	C-SD01	瀬戸	搦鉢	3.5	3.9	21.6	鉄釉	鉄釉			E-157	96Cb
25	179	C-検出	瀬戸	搦鉢	6.7	6.1	51.4	鉄釉	鉄釉			E-158	96Cb
25	180	C-検出	瀬戸	搦鉢	6	6.3	30.9	鉄釉	鉄釉			E-159	6Cb
25	181	D-表土剥き	瀬戸	甕	4	3.6	15.8	無釉	鉄釉			E-160	
25	182	D-検出	瀬戸	搦鉢	4.8	3.7	26.6	鉄釉	鉄釉			E-161	

陶丸・土玉

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	最大径(mm)		重量	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
					(mm)								
25	183	A-表土剥き	瀬戸美濃	陶丸	22.4		11.9			灰白色		E-162	95Ab
25	184	B-検出	瀬戸美濃	陶丸	23.5		11.9			灰白色		E-163	
25	185	C-検出	土師器	土玉	20.6		6.5			灰黄色		E-164	96Ca

土錘

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	長さ	径	孔径	重量	調整	端面	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
					(mm)	(mm)	(mm)							
25	186	A-トレンチ	土師器	土錘	残45.1	13.0	3.6	6.9	ユビ指圧	指ナデ?	ニブイ赤褐色		E-165	95Ab
25	187	B-トレンチ	土師器	土錘	残40.5	15.6	5.0	7.2	ユビ指圧	無し	浅黄褐色		E-166	
25	188	C-SD03	土師器	土錘	31.5	12.9	5.3	3.5	ユビ指圧	指ナデ	浅黄褐色		E-167	96Ca

土鈴・土人形

挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	高さ	幅	奥行	形状	成形法	胎土	備考	登録 番号	旧遺構 番号
					(cm)	(cm)	(cm)						
25	189	A-攪乱	土師器	鈴	残1.5	残1.7			手捻り	ニブイ黄褐色		E-168	95Ac
25	190	C-SD20	土師器	鈴	残1.7	残1.8			手捻り	灰白色		E-169	96Ca
25	191	C-SD01	土師器	鈴	残1.6	残0.9			手捻り	淡黄色		E-170	96Cb
25	192	C-SD01	土師器	鈴	残1.8	残1.1			手捻り	淡黄色		E-171	96Cb
25	193	D-トレンチ	土師器	鈴	残2.5	残2.7			手捻り	橙色		E-172	
25	194	D-SD01	土師器	鈴	残2.1	残1.6			手捻り	ニブイ橙色		E-173	
25	195	A-検出	土師器	人形	3.7	3.6	2.6	鳥	手捻り	橙色		E-174	95Ac
25	196	D-検出	土師器	人形	0.8	2.9	2	亀	型/指オサエ	灰白色		E-175	

石製品

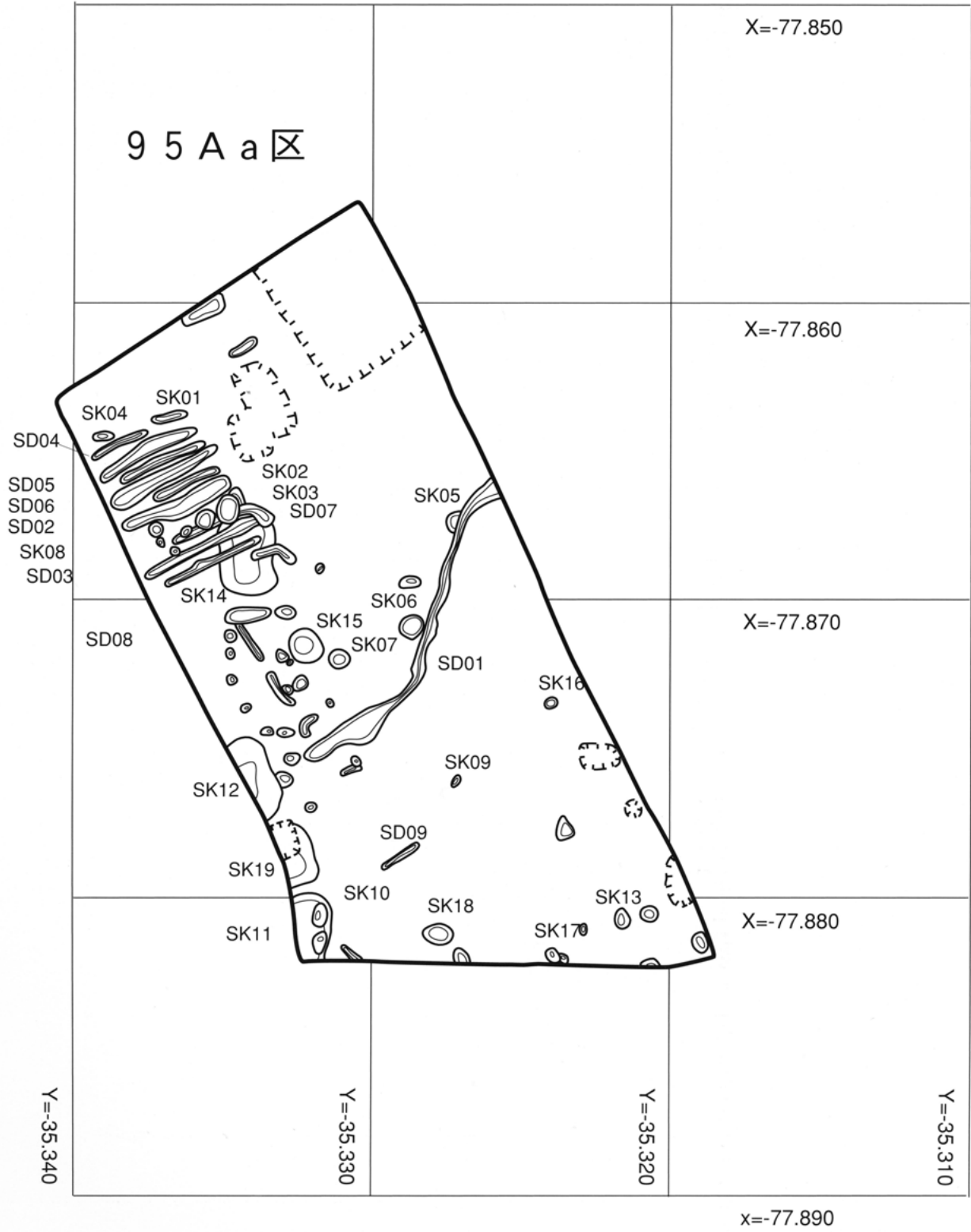
挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	高さ	幅	厚さ	形状	調整	石材	備考	登録 番号	旧遺構 番号
					(cm)	(cm)	(cm)						
31	197	A-検出	石	石錘	残2.1	1.4	0.7			下呂石		S-2	95Aa
31	198	C-検出	石	剥片石器	残1.9	1.5	0.5			チャート		S-3	96Ca
31	199	D-SD01	石	燧石	2.3	2.1	0.9			チャート	養老山系産?	S-4	
31	200	C-SD20	石	硯?	残4.2	残3.5	0.7			凝灰質泥岩		S-5	96Ca
31	201	C-SD11	石	硯	残2.6	1.8	0.7			凝灰質泥岩		S-6	96Cb
31	202	C-SD09	石	硯	残5.8	残2.2	0.6			凝灰質泥岩		S-7	96Ca
31	203	B-検出	石	砥石	10.5	4.3	3.4			凝灰岩	被熱痕	S-8	
31	204	C-SD02	石	砥石	残5.6	3.7	1.5			凝灰質泥岩		S-9	96Ca
31	205	C-SD01	石	砥石	3.4	2.6	2.3			凝灰岩		S-10	96Cb
31	206	C-SD09	石	砥石	残6.0	残5.1	2.4			凝灰岩		S-11	96Ca

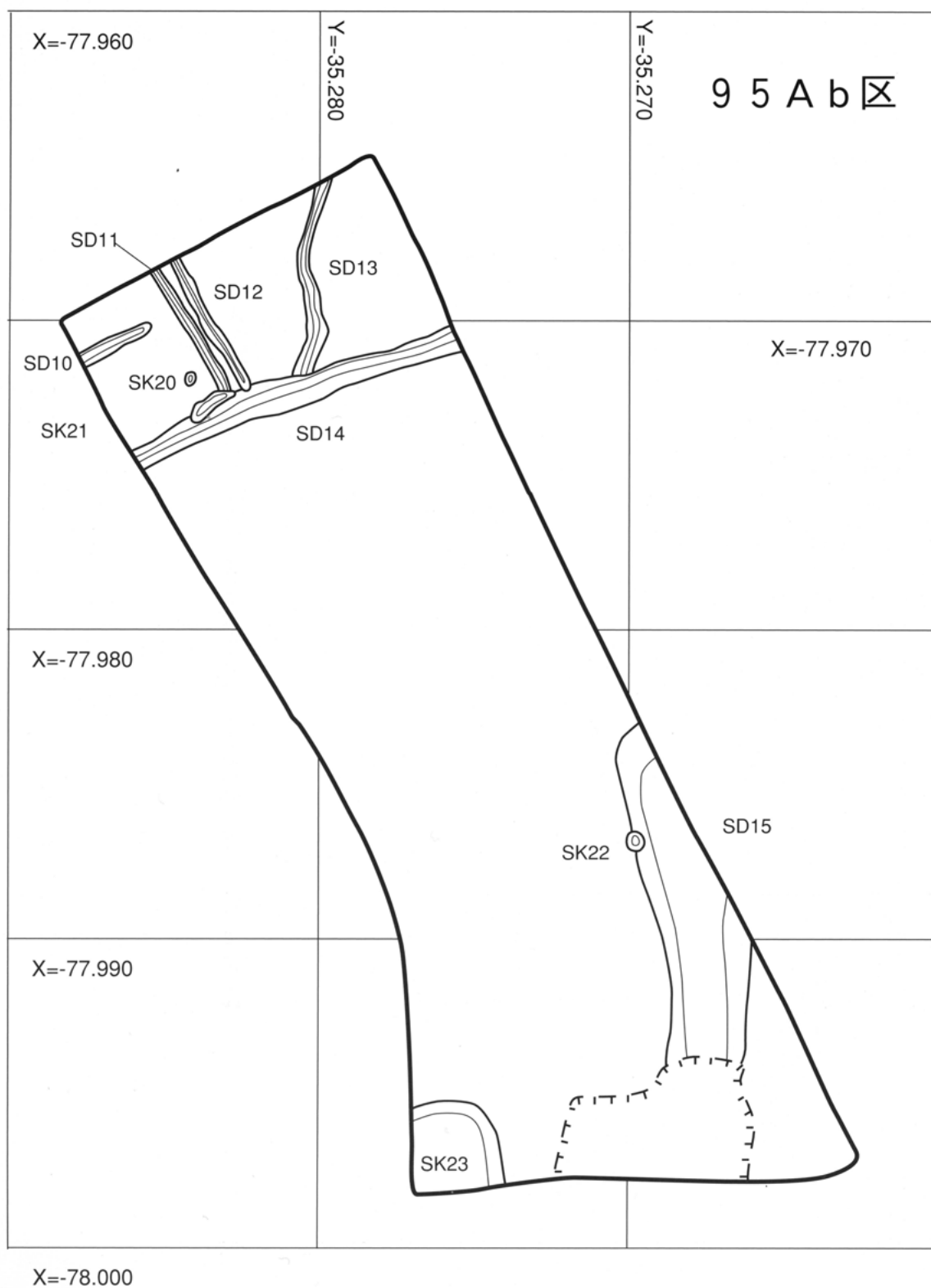
金属製品

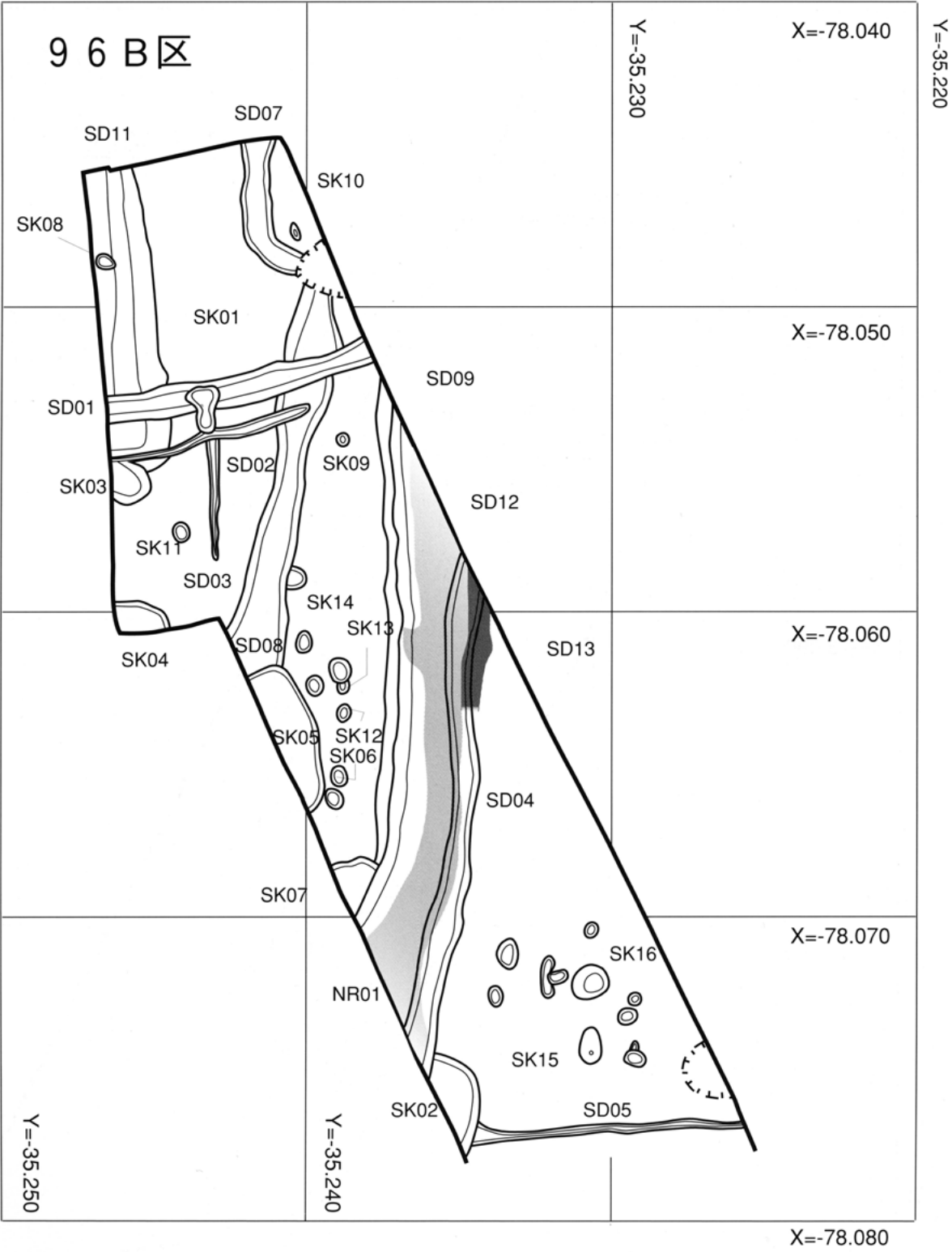
挿図 番号	遺物 番号	遺構番号	産地・材質	器種	高さ	幅	厚さ	形状	調整	銭種	備考	登録 番号	旧遺構 番号
						(cm)	(cm)						
32	207	A-検出	鉄	釘	12.6	0.7						M-2	95Ac
32	208	B-SK03	鉄	釘?	7.3	0.8						M-3	
32	209	C-SD08	鉄	釘	残3.3	0.5						M-4	96Ca
32	210	D-SK03	鉄	釘	4.9	0.8						M-5	
32	211	A-検出	銅	銅銭	径2.44					祥符元寶		M-6	95Ab
32	212	A-検出	銅	銅銭	径2.38					元符通寶		M-7	95Ab
32	213	A-東壁	銅	銅銭	径2.39					寛永通寶		M-8	95Ac
32	214	C-検出	銅	銅銭	残径1.38						判読不能	M-9	96Ca
32	215	D-検出	銅	銅銭	径2.41					?元通寶か		M-10	
32	216	D-検出	銅	銅銭	径2.41					?元通寶か		M-11	

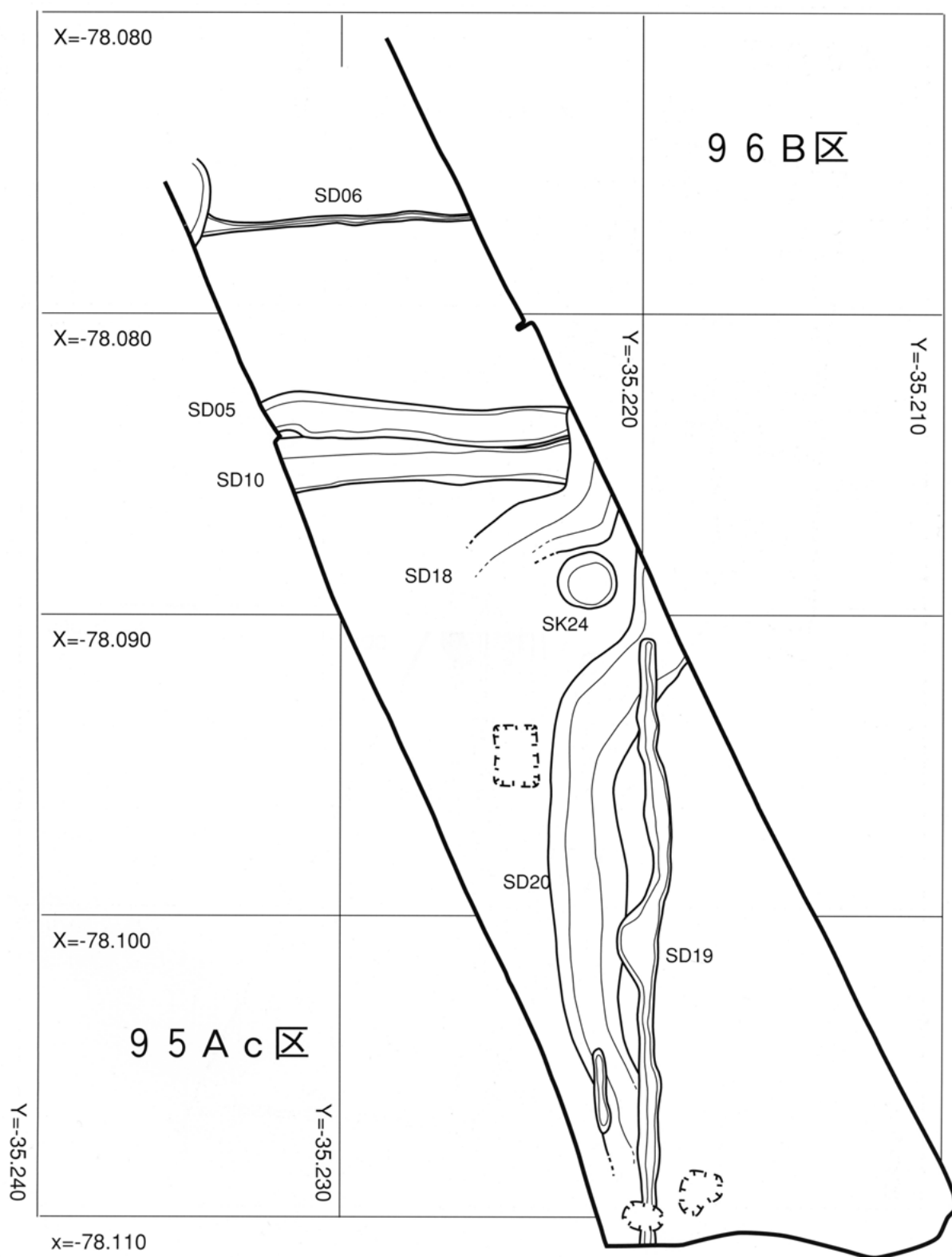
図版

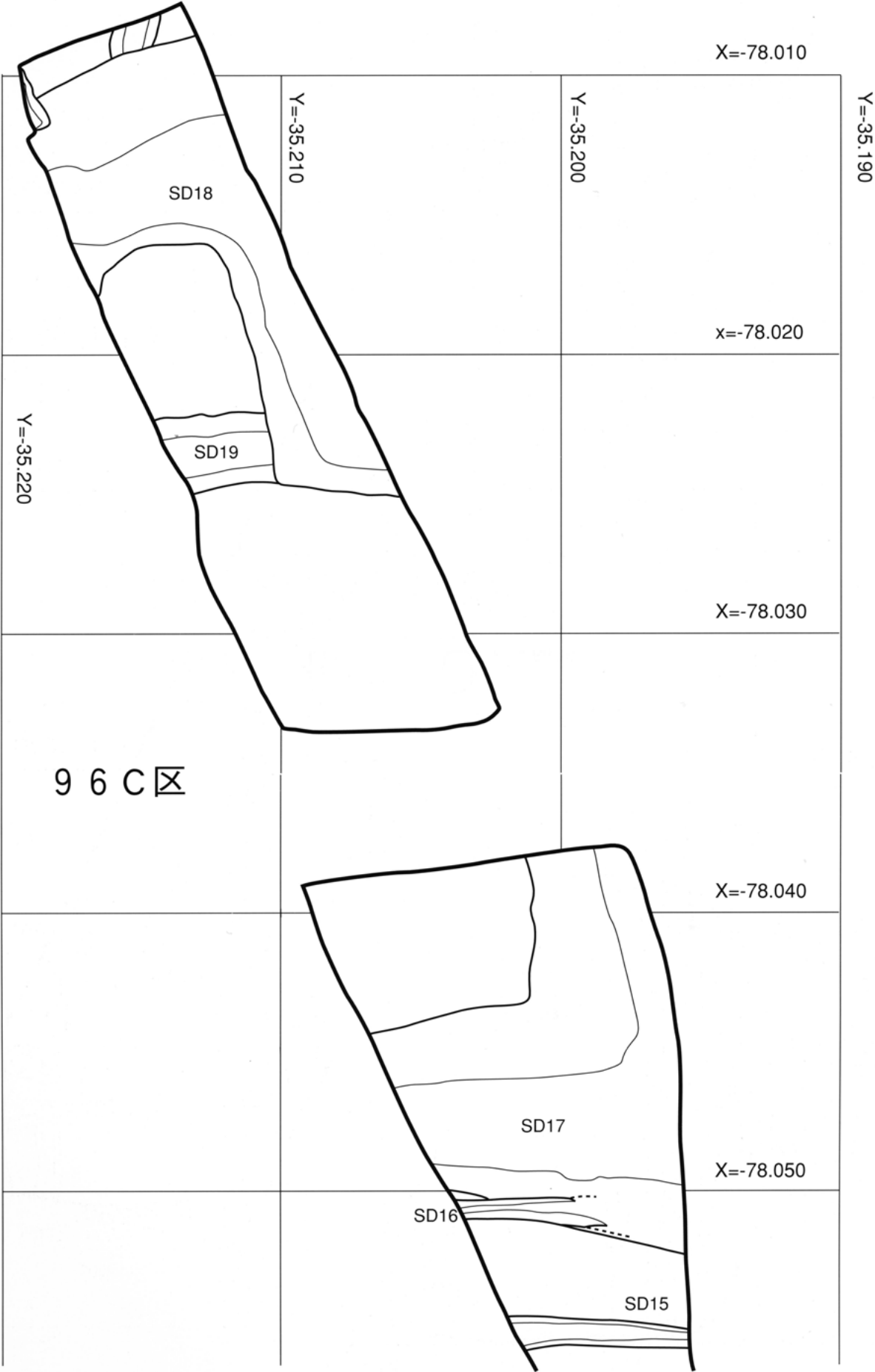
- * 遺構図版の縮尺は1：200である
- * 写真図版の縮尺は各頁ごとに記載している
- * 写真下の数字は挿図の遺物番号を示す

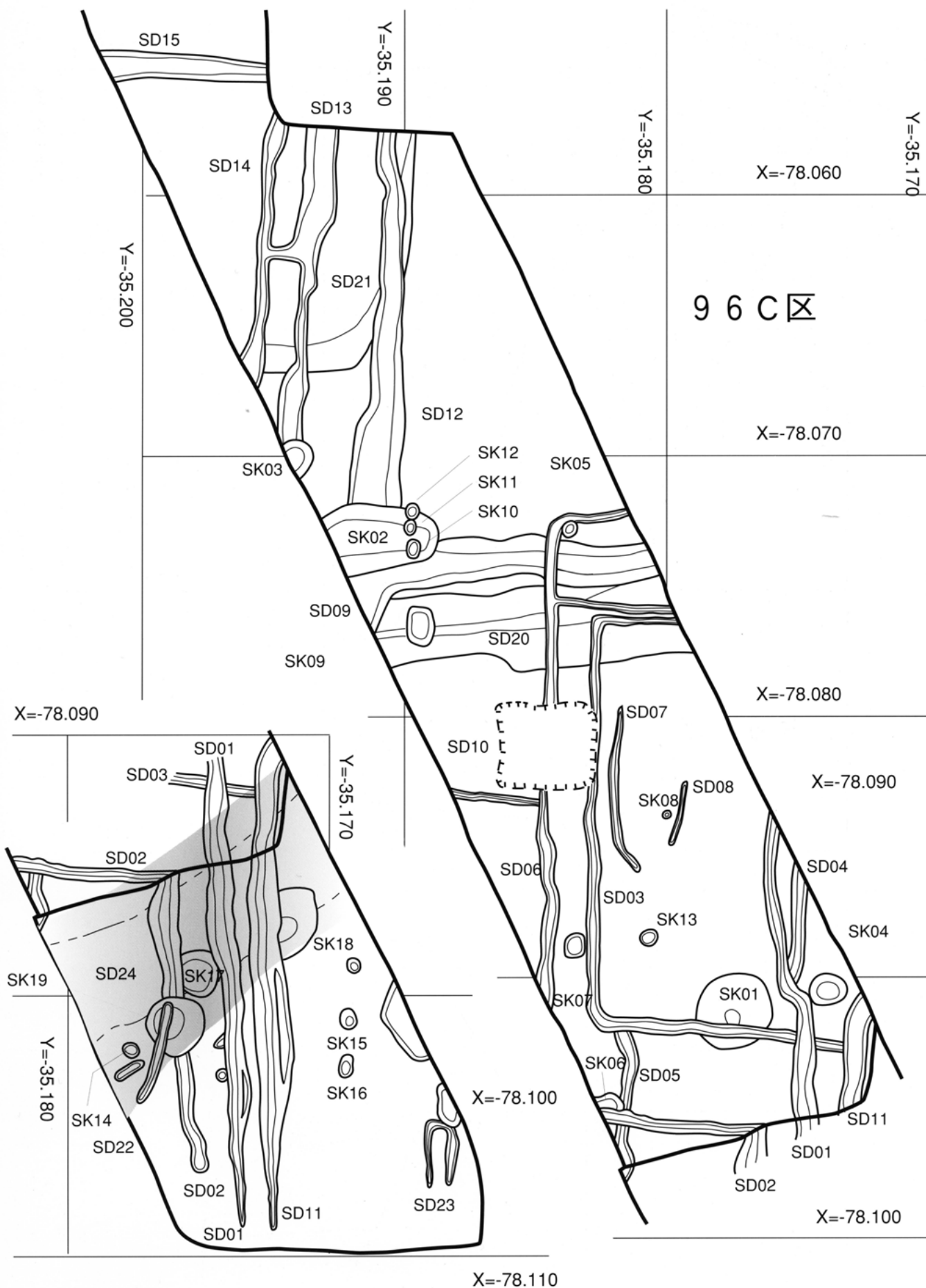




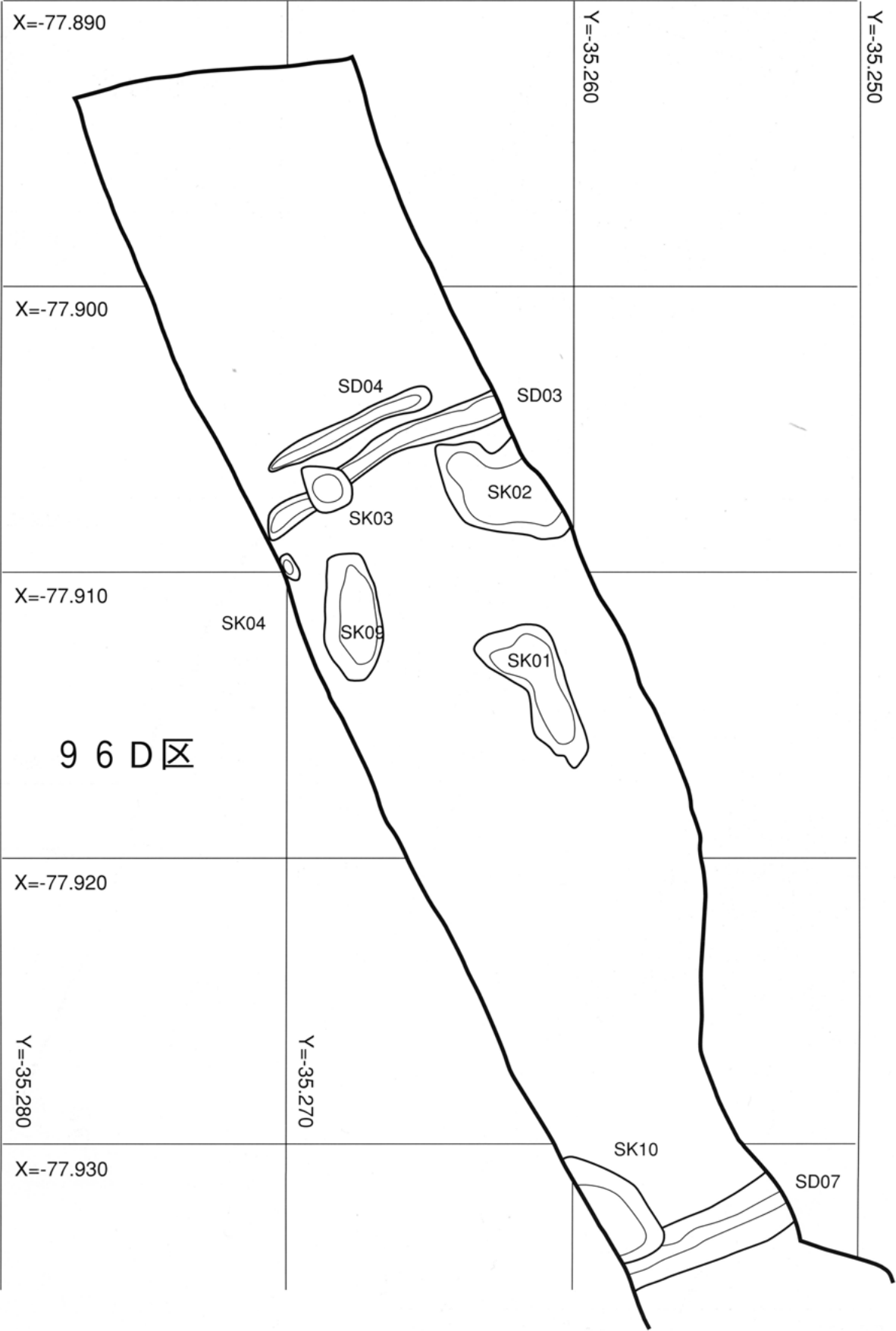


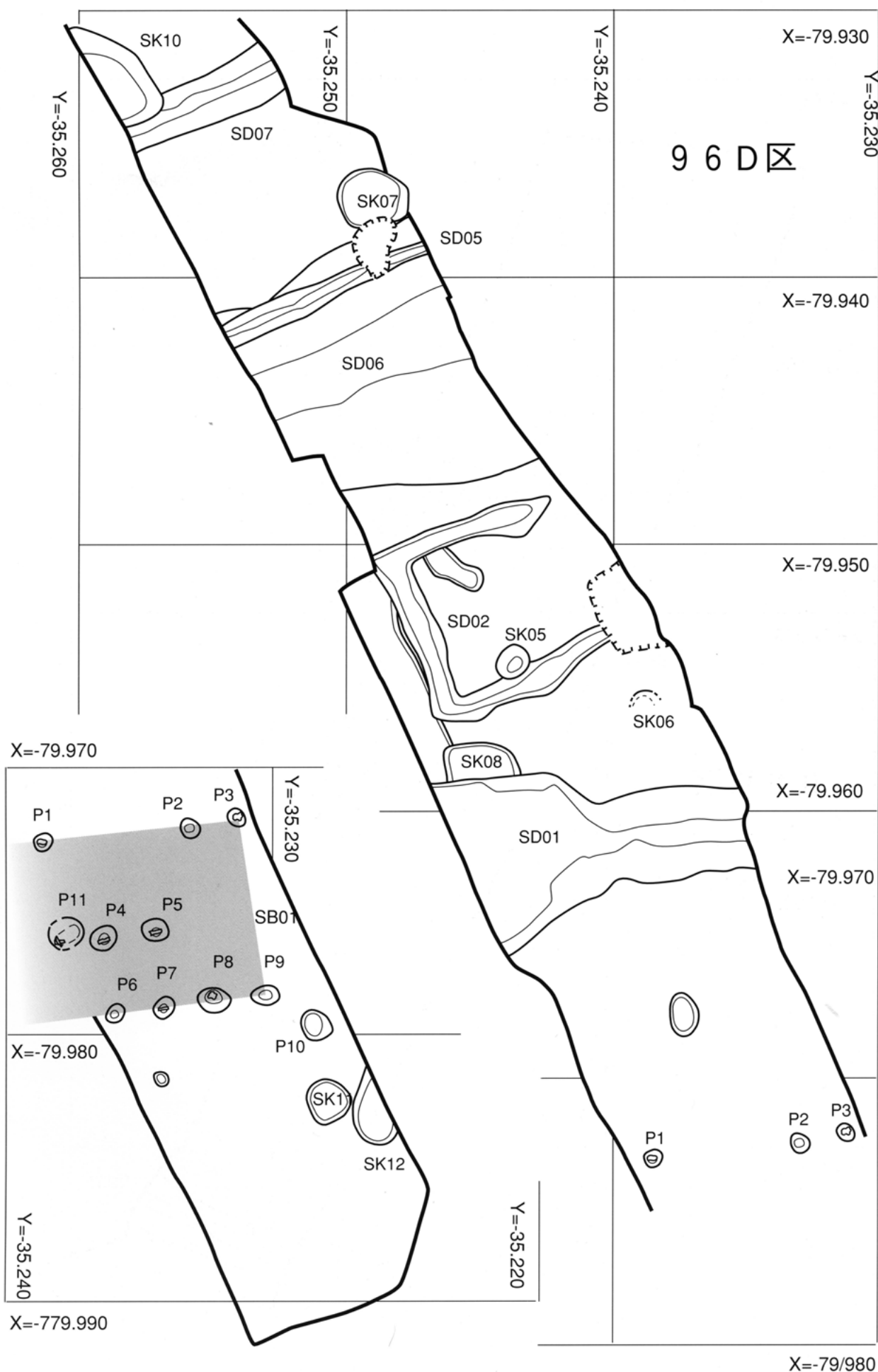






図版 7



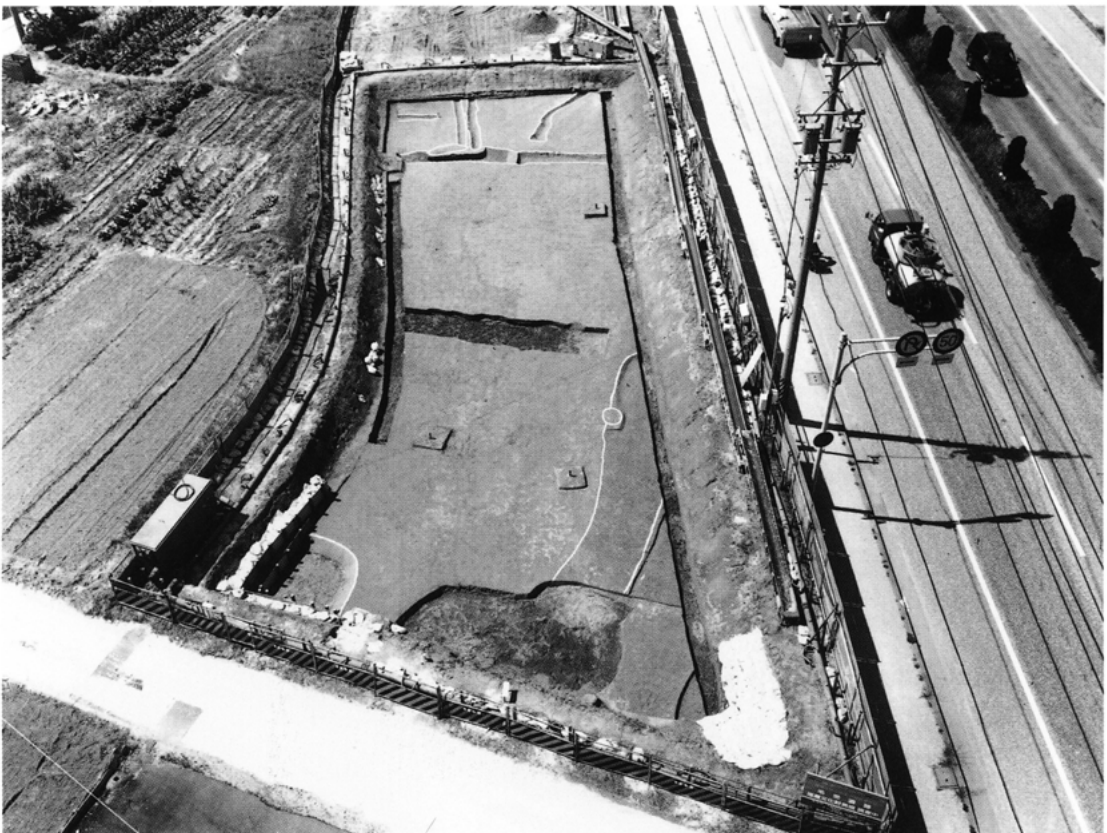




毛受遺跡遠景（南から）



A a区全景（北から）



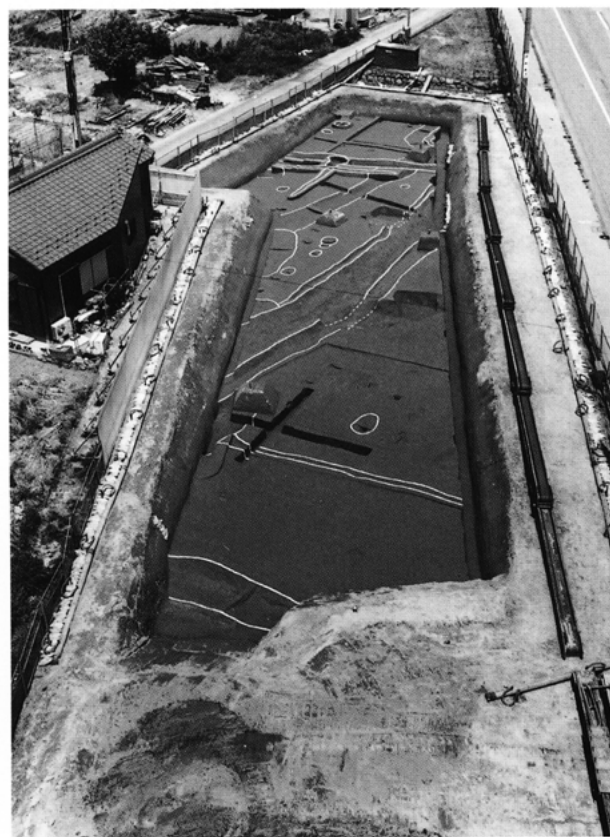
A b区全景（南から）



A c 区全景 (北から)



B 区 SD11 (南から)



B 区全景 (南から)



B 区 SD12 (西から)



C区全景（北から）



C区 SK18 最下層



C区 SD20 遺物出土状況

C区南部全景（北から）





C区 SD17 (西から)



C区 SD18 (西から)



C区 SD17 遺物出土状況



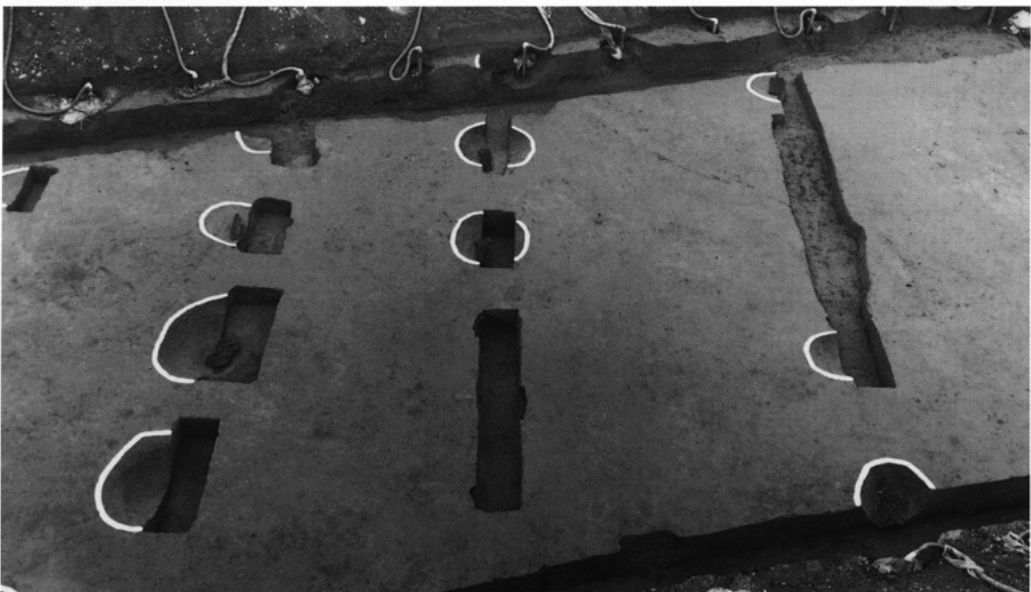
C区 SD18 遺物出土状況



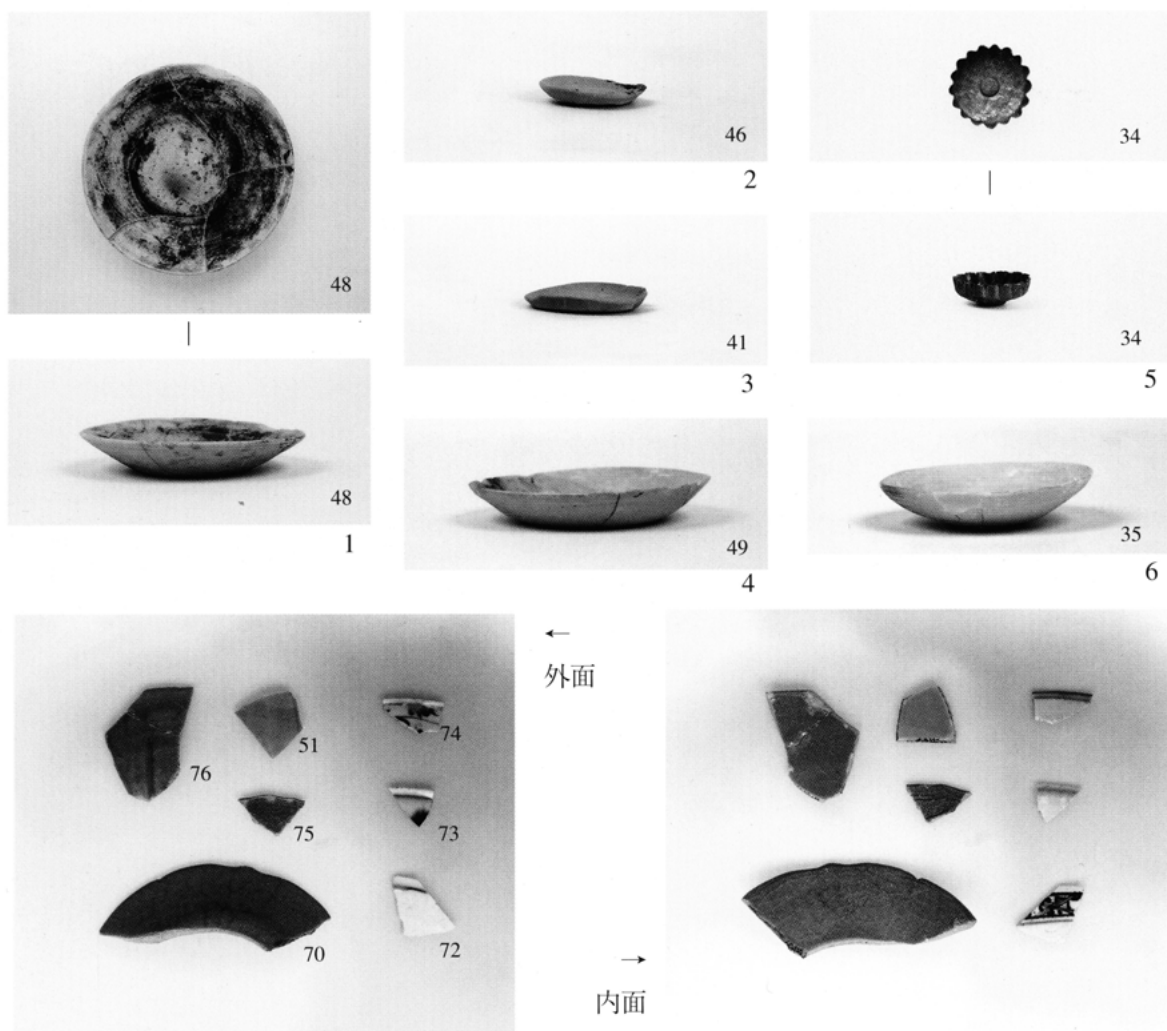
D区
北部全景
(南から)



D区
SD06

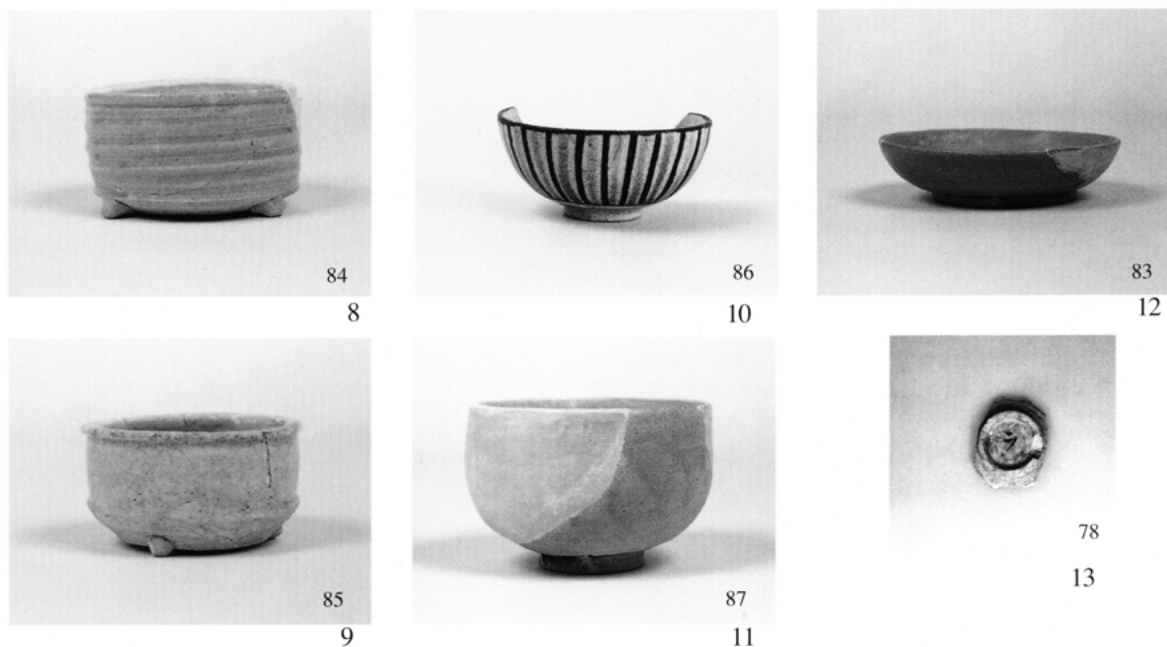


D区
SB01

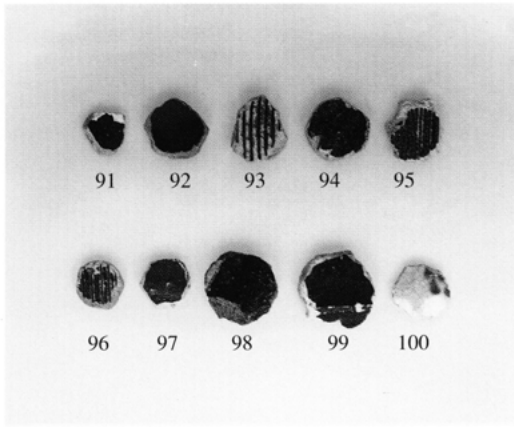


7

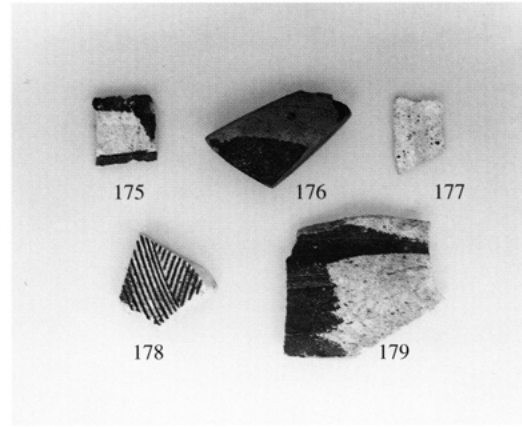
B期遺物 (7は1:3、他は1:4)



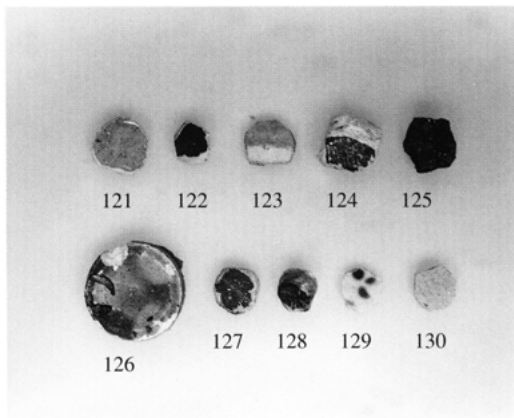
C期遺物 (1:4)



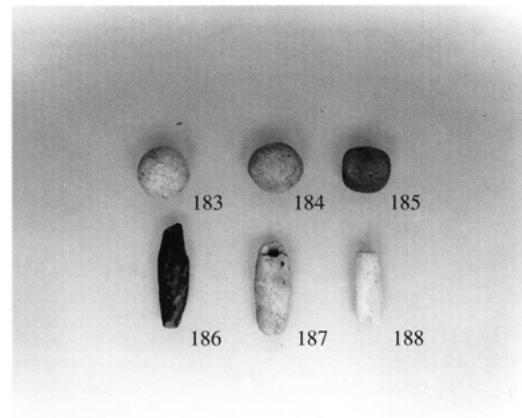
14



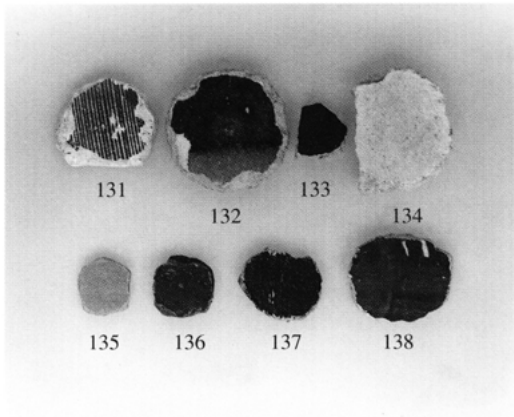
18



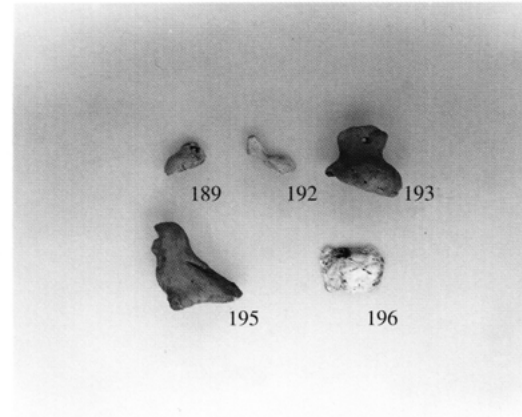
15



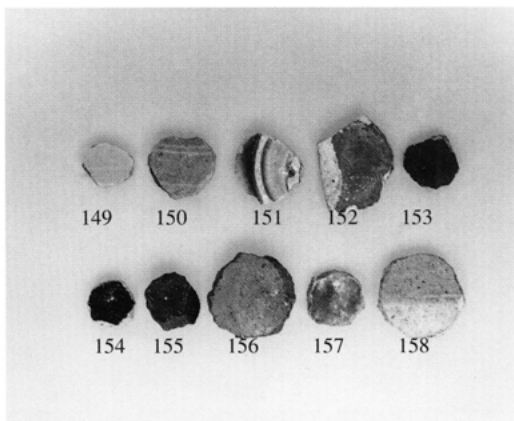
19



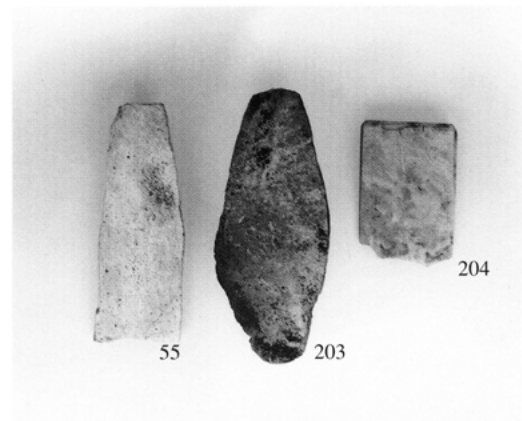
16



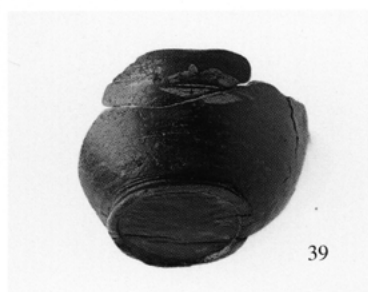
20



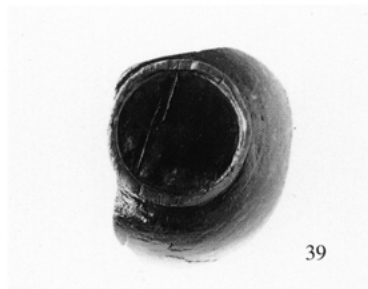
17



21



I



22



23



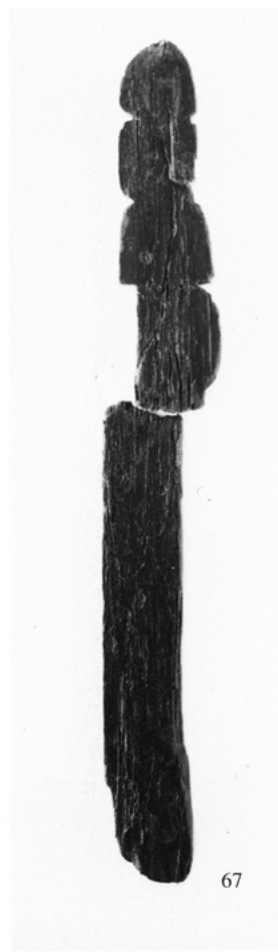
24



25

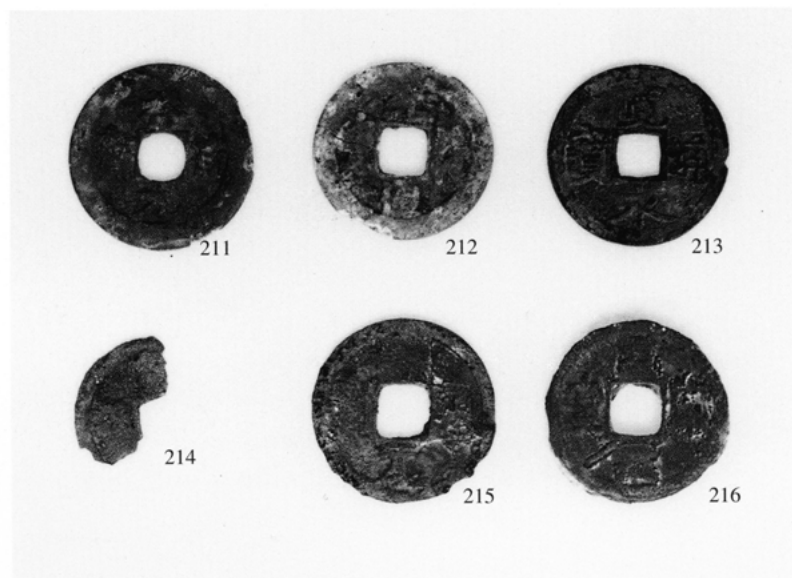


26



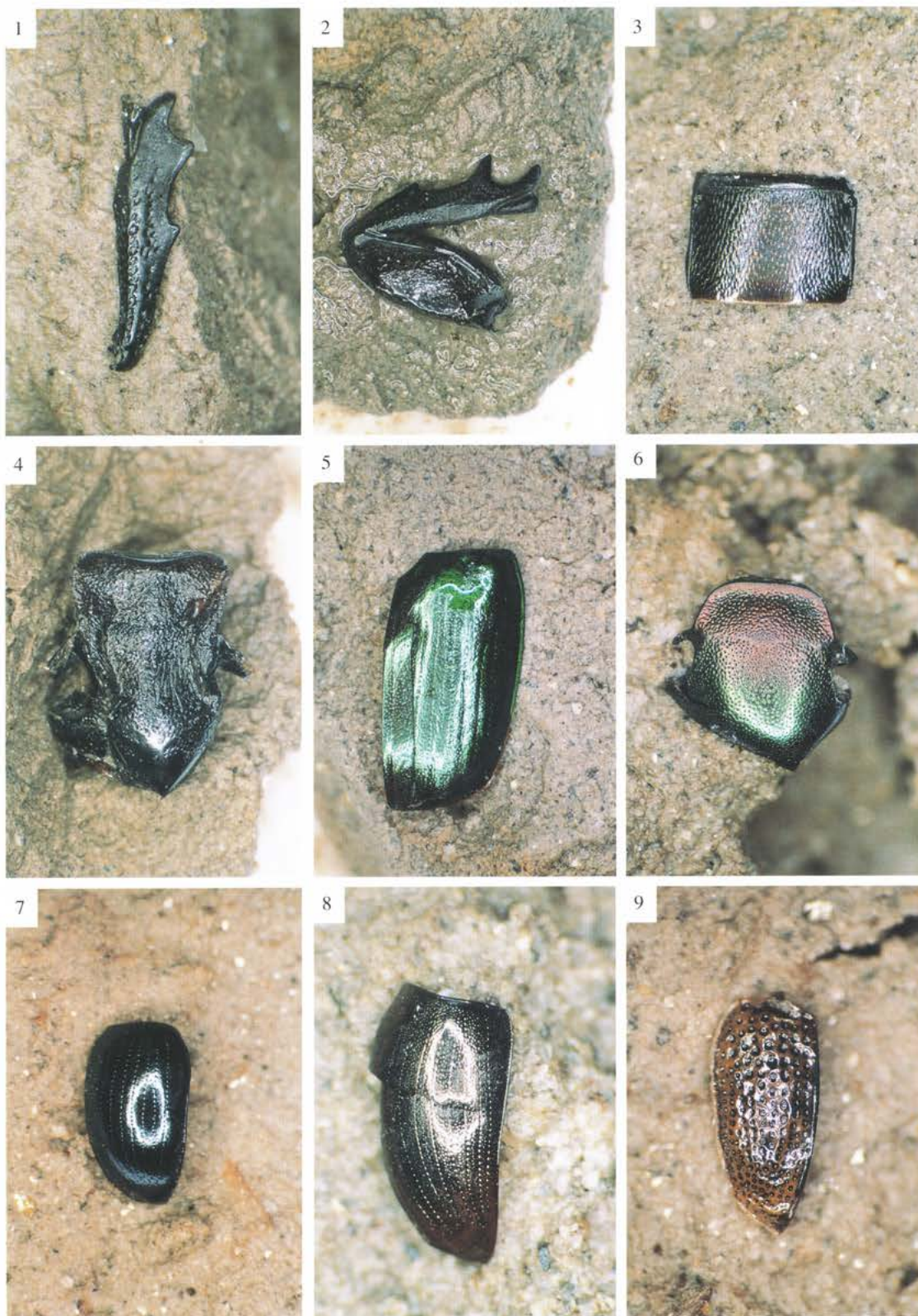
27

木製品 (1:4)



28

銅銭 (1:1)



1. クロコガネ *Holotrichia kiotoensis* Brenske
右前脛節 長さ 4.4 mm (標本 11)
2. コカブトムシ *Eophilurus chinensis* (Faldernmann)
左前脛節 脛節の長さ 7.2 mm (標本 19)
3. ハネカクシ科 *Staphylinidae*
腹部背板 最大幅 2.8 mm (標本 41)

4. ヒゲコガネ *Polyphylla laticollis* Lewis
頭部 長さ 6.5 mm (標本 22)
5. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
右上翅 長さ 9.2 mm (標本 32)
6. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky
頭部 長さ 3.2 mm (標本 9)

7. ダイコンハムシ *Phaedon brassicae* Baly
左上翅 長さ 3.4 mm (標本 75)
8. マメガムシ *Regimbartia attenuata* (Fabricius)
右上翅 長さ 3.8 mm (標本 44)
9. コガシラミズムシ *Peltodytes intermedius* (Sharp)
左上翅 長さ 2.6 mm (標本 10)

報告書抄録

ふりがな	めんじょいせき
書名	毛受遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第82集
編著者名	飴谷 一・浅井厚視・鬼頭 剛・三辻利一・森 勇一
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802番24 TEL 0567-67-4161
発行年月日	西暦 1999年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
めんじょ 毛受	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 やまとちょうめんじょ 大和町毛受	23203	2097	37度 17分 56秒	136度 46分 58秒	199504～ 199506 199604～ 199610	1446m ² 4115m ² 計 5561m ²	東海北陸 自動車道 建設に伴 う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
毛受	集落	室町	溝1		
		戦国	掘立柱建物1 溝	瀬戸美濃窯産陶器 常滑産陶器 中国窯産陶磁器 土師器・木製品 石製品・金属製品	居館跡
		江戸	井戸2 土坑 溝	瀬戸美濃窯産陶磁器 肥前窯産磁器 関西系窯産陶磁器 常滑窯産陶器 土師器・石製品 金属製品	町屋

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 82 集

毛受遺跡

1999 年 8 月 31 日

編集発行	財団法人 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
印刷	株式会社 名古屋大気堂